

大宰府史跡

平成8年度発掘調査概報



平成9年3月

九州歴史資料館

正誤表

訂正箇所	誤	正
66 頁 3行目	SB345	SD4345
94 頁 24 行目	軒丸瓦 2・7類の	軒平瓦 2・7類の

大宰府史跡

平成8年度発掘調査概報

平成9年3月

九州歴史資料館



水城跡西門地区全景



門建物SB120柱掘形断面



水城経塚経筒出土状況



経筒・副納品



第169-1次調査区全景



礎石建物SB4255全景

序

特別史跡水城跡の諸施設の解明に力点をおいた大宰府史跡第5次発掘調査計画は、今年度が最終年次である。

この計画で水城跡の発掘調査として、東門跡西側地区（第24次調査）と西門跡（第26次調査）の2箇所を実施したのに留まることとなった。

この2箇所の調査成果は、平成5・7年度の調査概報で報告を行ったが、西門跡の平成7年度調査の最終段階において、水城築堤期に遡ると思われる遺構を検出したことから、さらに平成8年度も継続して調査を実施することとなった。

本書では、水城西門跡の調査成果を中心に報告し、併せて葺司西側の来木丘陵と学業院中学校南側で実施した民間宅地造成に伴う発掘調査結果を報告する。

発掘調査にあたっては、大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁、大宰府市教育委員会、大野城市教育委員会、地元関係者各位に多大なる御指導と御協力を頂いた。記して謝意を表する次第である。

なお、平成9年3月2日、大宰府史跡調査研究指導委員会の委員長を昭和43年の発掘調査開始時から、昭和59年までお務め頂いた竹内理三先生が逝去された。大宰府跡の指定域拡張問題ばかりでなく発掘調査についても多大な御指導を頂いたことに対して心から感謝申し上げご冥福をお祈りする次第である。

平成9年3月31日

九州歴史資料館長 高橋 良平

例 言

1. 本書は平成8年度に福岡県が国庫補助を受けて、九州歴史資料館が発掘調査を実施した大宰府史跡発掘調査の概要報告であり、大宰府史跡第169-1次・175次の調査と水城跡第26次調査補足及び2件の立会調査を掲載した。
なお、第174次調査については、顕著な遺構が検出されなかったので報告を割愛した。また、第176次調査については整理途中であり、来年度の報告とする。
2. 遺構実測図は、国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成した（昭和51年度発掘調査概報参照）。
3. 検出遺構及び出土遺物については、大宰府史跡調査研究指導委員の御指導と御教示を得た。
4. 本文中の挿図は、土器・陶磁器類を3分の1、瓦埴類は4分の1縮尺を原則としている。
5. 本書掲載の写真は、当館学芸第二課石丸洋の撮影による。
6. 金属製品の保存修復作業は、当館学芸第二課横田義章による。
7. 遺物の実測・製図作業には調査課員があたり、小田美和・今井涼子の助力を得た。
8. 遺物の復原整理作業は、大宰府史跡坂本発掘調査事務所において行い、大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝の協力を得た。
9. 本書の執筆には、調査課栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・小川泰樹・杉原敏之があたり、文末に氏名を記し、文責を明らかにした。
10. 本書の編集は調査課員で行い、小田がとりまとめた。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査計画	1
2	調査経過	2
II	立会調査	5
1	水城瓦窯跡	5
2	観世音寺鐘記念碑建設地	6
III	発掘調査	8
1	第169—1次調査	8
	検出遺構	8
	出土遺物	15
	小 結	29
2	第175次調査	31
	検出遺構	31
	出土遺物	37
	小 結	65
IV	水城跡の発掘調査	69
1	第26次調査補足	69
	検出遺構	72
	出土遺物	83
	小 結	107

挿 図 目 次

第1図	大宰府史跡発掘調査	折込
第2図	水城瓦窯跡出土軒九瓦・平瓦拓影・実測図	6
第3図	観世音寺鐘記念碑建設地出土軒先瓦・熨斗瓦拓影・実測図	7
第4図	第169—1次調査遺構配置図	9
第5図	SB4245・4250柱攪形、SB4255礎石断面図	10
第6図	竪穴住居SI4235実測図	12

第7図	竪穴住居SI4230実測図	13
第8図	竪穴住居SI4235カマド実測図	14
第9図	弥生貯蔵穴SK4240実測図	15
第10図	SI4230・4235、SB4245・4250・4255出土土器・土製品実測図	16
第11図	SB4255、SK4233出土土器・土製品実測図	18
第12図	SK4240出土弥生土器実測図	19
第13図	暗褐色土層出土土器実測図(1)	20
第14図	暗褐色土層出土土器実測図(2)	21
第15図	軒平瓦・丸瓦拓影・実測図	23
第16図	平瓦拓影・実測図	24
第17図	金属製品実測図	25
第18図	鑄造関係遺物実測図	26
第19図	籬羽口装着状況模式図	27
第20図	石器実測図	28
第21図	来木地区主要遺構配置図	折込
第22図	調査区東壁土層図	31
第23図	第175次調査遺構配置図	32
第24図	SB4340柱掘形断面図	33
第25図	SD4345土層図	34
第26図	SK4334実測図	35
第27図	SK4344・4347実測図	36
第28図	SB4340、SD4335出土土器実測図	37
第29図	SD4345出土土器実測図(1)	38
第30図	SD4345出土土器実測図(2)	40
第31図	SD4345出土土器実測図(3)	41
第32図	SD4345出土土器実測図(4)	42
第33図	SD4345出土土器実測図(5)	43
第34図	SD4345出土土器実測図(6)	45
第35図	SD4345出土土器実測図(7)	46
第36図	SD4345出土土器実測図(8)	48
第37図	SD4345出土土器実測図(9)	49
第38図	SD4345出土土器実測図(10)	50
第39図	SD4345出土土器実測図(11)	51

第40图	SD4345出土土器实测图(12)	52
第41图	SD4345出土製塩土器实测图	53
第42图	SD4345出土土製品实测图	54
第43图	SK4333·4334·4336·4337·4338·4341出土土器·陶磁器实测图	56
第44图	SK4342·4343·4344·4346出土土器·陶磁器实测图	57
第45图	SK4347·4348出土土器·陶磁器实测图	59
第46图	遺構検出面出土土器·陶磁器实测图	60
第47图	文字瓦·平瓦拓影·实测图	63
第48图	石器实测图	64
第49图	第166·175次調査主要遺構配置图	66
第50图	水城跡発掘調査地域图	折込
第51图	水城跡第26次調査補足発掘区配置图	71
第52图	水城跡西門周辺測量图	折込
第53图	石垣SA115A·B、門建物SB120实测图	73
第54图	石垣SA115A·B、溝SD109A·B土層图	74
第55图	門建物SB120柱掘形断面图	75
第56图	門建物SB110下層土層图	77
第57图	柱穴列SA128实测图	78
第58图	D区土層断割り土層图	79
第59图	東土層西端土層图	80
第60图	経塚SX111·112·113配置图	81
第61图	経塚SX111·112·113实测图	82
第62图	SA115B、SB120A·B出土土器实测图	83
第63图	SD109A·B出土土器·鉄器实测图	85
第64图	SK129、SX127出土土器实测图	86
第65图	Ⅲ期版築土層出土土器实测图	87
第66图	E区北西端出土土器·土製品实测图	89
第67图	D·K区出土土器实测图	90
第68图	西土層頂部出土軒瓦拓影·实测图	92
第69图	鬼瓦拓影	93
第70图	丸瓦·道具瓦拓影·实测图	96
第71图	平瓦拓影·实测图(1)	97
第72图	平瓦拓影·实测图(2)	98

第73図	経塚SX111出土経筒・利器実測図	102
第74図	経塚SX111出土垂飾品実測図	103
第75図	経塚SX111出土木製品実測図	104
第76図	石器実測図	105

表 目 次

第1表	調査計画表	1
第2表	平成8年度史跡地内現状変更申請等対応状況表	折込
第3表	調査実施表	4
第4表	第169-1次調査石器観察表	28
第5表	第175次調査出土瓦点数表	64
第6表	第175次調査石器観察表	65
第7表	軒丸瓦の特徴	91
第8表	軒平瓦の特徴	91
第9表	水城跡西門地区出土軒丸瓦点数表	99
第10表	水城跡西門地区出土軒平瓦点数表	100
第11表	水城跡西門地区出土丸・平瓦点数表	101
第12表	水城跡第26次調査補足石器観察表	106

図 版 目 次

巻頭図版1	(上)	水城跡西門地区全景
	(下)	門建物SB120柱断面
巻頭図版2	(上)	水城経塚経筒出土状況
	(下)	経筒・副納品
巻頭図版3	(上)	第169-1次調査区全景 礎石建物SB4255全景
図版1		第169-1次調査区全景(南上空から)
図版2	(上)	第169-1次調査区全景(東上空から)
	(下)	第169-1次調査区全景(北から)

- 図版 3 (上) 第169—1次調査区全景 (拡張後、北東から)
(下) 第169—1次調査区全景 (拡張後、南西から)
- 図版 4 (上) 掘立柱建物SB4245・4250 (西上空から)
(下) 掘立柱建物SB4245・4250 (北から)
- 図版 5 (上) 掘立柱建物SB4245柱撮形
(下) 掘立柱建物SB4250柱撮形
- 図版 6 (上) 礎石建物SB4255 (東から)
(下) 礎石建物SB4255 (南から)
- 図版 7 礎石建物SB4255礎石・根石
- 図版 8 (上) 竪穴住居SI4230 (南西から)
(中) SI4230カマド (南西から)
(下) 土壌SK4233遺物出土状況 (南西から)
- 図版 9 (上) 竪穴住居SI4235 (南から)
(下) SI4235カマド (南から)
- 図版10 (上) 第175次調査区全景 (北上空から)
(下) 第175次調査区全景 (西から)
- 図版11 (上) 掘立柱建物SB4340、溝SD4335 (北上空から)
(下) 掘立柱建物SB4340、溝SD4335 (南から)
- 図版12 掘立柱建物SB4340柱撮形
- 図版13 (上) 調査区西半土壌群 (西上空から)
(下) 溝SD4345、土壌SK4347 (西から)
- 図版14 (上) 北側土壌群SK4333・4334・4336・4338・4339 (南上空から)
(下) 土壌SK4334 (東から)
- 図版15 (上) 土壌SK4338・4339 (北東から)
(中) 土壌SK4344・4346・4348 (南東から)
(下) 土壌SK4347 (北東から)
- 図版16 (上) 水城瓦窯出土瓦
(下) 『日本の百百選・観世音寺の鐘』選定記念碑基礎出土瓦
- 図版17 第169—1次調査SI4230、SB4245・4250・4255、SK4233出土土器・土製品
- 図版18 第169—1次調査SK4233・4240、暗褐色土層出土土器・土製品
- 図版19 第169—1次調査出土軒平瓦・平瓦・文字瓦
- 図版20 第169—1次調査出土金屬製品・鑄羽口
- 図版21 第169—1次調査出土鑄羽口

- 図版22 第175次調査SB4340、SD4335・4345出土土器
- 図版23 第175次調査SD4345出土土器（2）
- 図版24 第175次調査SD4345出土土器（3）
- 図版25 第175次調査SD4345出土土器（4）
- 図版26 第175次調査SD4345出土土器（5）
- 図版27 第175次調査SD4345出土土器（6）
- 図版28 第175次調査SD4345出土土器（7）
- 図版29 第175次調査SD4345、SK4334・4336・4344出土土器・陶磁器
- 図版30 第175次調査SK4334・4336・4344・4348、検出面出土陶磁器
- 図版31 第175次調査SK4347、検出面出土硯・陶磁器
- 図版32 第175次調査出土文字瓦・平瓦
- 図版33 第175次調査SD4345出土製塩土器
- 図版34 第175次調査SD4335・4345、SK4347出土製塩土器・土製品
- 図版35 水城跡西門地区空中写真（南東上空から、×印試掘箇所）
- 図版36 (上) 水城西門跡遠景（北西上空から）
(下) 水城西門跡遠景（南東上空から）
- 図版37 (上) 水城跡第26次調査区（西門跡、北西から）
(下) 水城跡第26次調査補足区（Ⅲ期整地層除去後、北西から）
- 図版38 (上) 西土塁石垣SA115A・B重複状況（左側がSA115A、北東から）
(下) 東土塁石垣SA103下位壁面
- 図版39 (上) 石垣SA115背面版築土層（北西から）
(下) 石垣SA115A掘形（西から）
- 図版40 (上) 石垣SA115A・B、門建物SB120、溝SD109（北西から）
(下) 門建物SB120A（北西から）
- 図版41 (上) 門建物SB120A西側柱穴（北東から）
(中) 西側柱穴柱掘形（北東から）
(下) 柱根検出状況（北東から）
- 図版42 (上) 門建物SB120A東側柱穴（北東から）
(下) 東側柱穴柱掘形（南東から）
- 図版43 (上) 西土塁中段テラス（西から）
(下) 柱穴列SA128検出状況（東から）
- 図版44 (上) 西土塁断割トレンチ（北西から）
(下) 西土塁頂上部Ⅲ期版築土層（左側が築埴期土塁）

- 図版45 (上) E 2 区Ⅲ期版築土層 (北から)
 (中) E 3 区Ⅲ期版築土層 (奥の石はSA115A)
 (下) 版築土突棒痕
- 図版46 (上) 西土塁壁面 (Ⅲ期版築土層、北東から)
 (下) Ⅲ期門建物SB110半截状況 (北東から)
- 図版47 (上) 経塚SX111全景 (東から)
 (下) 経塚SX111全景 (南東から)
- 図版48 (上左) 経塚SX111積石状況 (西から)
 (上右) 経塚SX111積石状況 (南から)
 (下) 積石除去後 (中央が蓋石、左脇に短刀)
- 図版49 (上) 経塚SX111掘下げ状況 (南東から)
 (下) 経筒・短刀埋納状況 (南から)
- 図版50 (上) 経塚SX112・113検出状況 (南西から)
 (下) 経塚SX112・113 (左側SX113、右側SX112)
- 図版51 (上) 経塚SX112 (南東から)
 (中) 経塚SX113 (南から)
 (下) 経塚SX113掘形 (立石除去後、南東から)
- 図版52 水城跡第26次調査補足SA115B、SB120A・B、SD109A・B、SK129、版築土層出土土器・鉄器
- 図版53 水城跡第26次調査補足E区出土土器・鬼瓦・平瓦
- 図版54 水城跡第26次調査補足出土丸瓦
- 図版55 水城跡第26次調査補足出土丸瓦・面戸瓦・平瓦
- 図版56 水城跡第26次調査補足出土平瓦 (2)
- 図版57 水城跡第26次調査補足出土平瓦 (3)
- 図版58 水城跡第26次調査補足出土経筒・経巻・経軸
- 図版59 水城跡第26次調査補足出土経塚副納品・木製品

I はじめに

1. 調査計画

発掘調査第5次5箇年計画は、本年度最終年次を迎えた。第5次計画立案の当初においては、水城跡踏施設の解明、大宰府跡正殿の発掘調査及び大宰府政庁城の報告書の刊行という大きな目標に向けて盛りだくさんの発掘調査を計画した。計画調査の進捗状況は、既概報で報告したとおり大きく遅延し、既に第3年次で計画変更を行ったような状況にある。

本年度計画では、先ず水城跡西門地区の築堤期に遡ると思われる遺構の解明と長い間の懸案であった大宰府政庁正殿跡の発掘調査に着手すること、さらには前年度から予定していた緊急調査を実施することであった。下表はこの段階での発掘調査予定地区である。

その後、これまで福岡県文化課が実施していた特別史跡大野城跡太宰府口城門の環境整備事業に伴う発掘調査を本年度から調査課が主体となって実施することとなった。また、平成6年度から太宰府市工務課が史跡地内で実施してきた上・下水道管理設工事が、今年度は史跡学校院跡地区で計画されるのを受けて文化庁記念物課・県教委文化課と協議した結果、この地区の発掘調査を実施すべきであるということになった。さらに、史跡地に隣接した部分において、民間住宅建設と太宰府市の水供給事情に絡み緊急に発掘調査を行う必要が生じた。加えて、集合住宅建設計画地の合計3件の発掘調査を優先することとなった。そのため、調査計画全体を大きく変更して実施する結果となり、当初計画とは大きく異なるものとなった。

第1表 調査計画表

	区 分	場 所	面積(m ²)	地 番	備 考
1	大宰府跡	政庁正殿	1,800		現状変更
2	水城跡	西門跡	100		"
	政庁前面官衙城	蔵司西地区	500	太宰府市観世音寺字蔵司431-1地	緊急調査(個人)
		不丁地区	2,600	" 字不丁301-2	" (個人)
		不丁地区	1,100	" 字不丁286-8	" (個人)
		不丁地区	360	" 字不丁287	" (保留地)
		大櫓地区	264	" 字大櫓329	" (保留地)
		広丸地区	182	" 字広丸	" (保留地)
		大櫓地区	658	" 字大櫓330-1	" (個人)

平成8年度の大宰府史跡調査研究指導委員会は5月15・16日に開催したが、上記3件の発掘調査の時期・面積等については未確定であったため、指導委員会には調査計画を提示できなかった。従って、委員各位からは調査計画について特段の意見は出していない。ただ、会議の席で

大宰府史跡発掘調査30周年の記念すべき年を平成10年に迎えるにあたり、大宰府政庁南門跡の10分の1模型を作成したいこと、記念展を平成10年に行いたい旨を申し上げたところ、大宰府政庁正殿跡の発掘調査を記念行事の一環として第6次計画の中で実施してはどうかとの意見を頂いた。これにより、大宰府政庁正殿跡の発掘調査については、大宰府史跡発掘調査30周年の記念行事の一環として平成9・10年度に実施することに変更した。

2. 調査経過

平成7年3月26日、個人の車庫建設に起因する現状変更申請に伴う発掘調査を史跡学校院跡で行った。調査地は第128次調査区（1991年）の東側隣接地である。この東側では第18・37・112次調査（1972・75・88年）を実施し、掘立柱建物（SB3320）などが検出された。第128次調査では、遺構は検出されていなかったが、今回は学校院跡の遺構の広がりを確認する意味もあって重機を用いて調査を実施した。地表下40cm程で地山面が検出され、調査区の中央から東側にかけては家屋解体時の廃材が埋められていた。また、西半部で検出した遺構は20cmに満たない穴などであったため1日だけの調査で終わっている。これを第174次調査とした。

昨年度の11月から着手していた大宰府史跡第169次調査（匠司関連遺構）では、礎石建物（SB4255）と掘立柱建物（SB4245・4250）とが南北に並ぶ状態で検出されたが、礎石建物はその一部が検出されていただけであったため、3月から排土を移して建物全体の規模を確認する調査を実施した。この結果、SB4255は東西3間×南北3間の総柱建物となったが、未指定地で礎石建物が検出されたことは、大宰府の官衙城がこの地区を含んでいたものと判断でき、今後はこの周辺部での指定域の拡張を考慮する必要性が生じた。調査は5月上旬で一旦終了しているが、平成9年1月に調査区西半部の表土除去を重機で行った。この部分の調査は平成9年度に実施予定であり、東半部の発掘調査終了部分を第169-1次調査とし、西半部の調査を第169-2次調査としておく。

水城跡西門地区の発掘調査は、大宰府史跡第169-1次調査のSB4255の検出をほぼ終了した4月10日から再開した。調査は昨年12月末で終了する予定であったが、終了直前になって水城築堤時に遡るのではないかと考えられる遺構・遺物の発見があったことにより、さらに発掘調査を進めることとした。調査の詳細については本文に譲るが、築堤時の門遺構・切り通し壁面の石垣などが確認された。発掘調査は作業員の手配りから大宰府史跡第175次調査の期間（7～8月）中断したが、平成9年3月に終了した。なお、門建物の検討会を2月12日に鈴木嘉吉・澤村仁両指導委員に來福頂き実施した。

水城跡の計画調査は西門地区（水城跡第26次調査補足）1件だけであったが、水城跡西門地区付近（第49図A）で、大野城市教育委員会が8月に試掘調査を行っている。調査地点は西門跡の北側で、水城の博多側外濠の推定地にあたる。調査では地表下1m前後で地山面が検出さ

第2表 平成8年度史跡地内現状変更申請等対応状況表

No	提出月	申請者	目的	地番	申請面積	指定区分	文化庁等指示	九歴等の対応	備考
1	7年 11月	太宰府市長	街路灯設置	太宰府市観世音寺4丁目	160㎡	大宰府跡	工事許可	立会	9年2月工事
2	12月	福岡県知事	樹木補栽	" " 3・5丁目	160	大宰府跡・観世音寺	県教委許可	"	8年3月工事
3	"	太宰府市長	法面保護工事	" 太宰府1491地	452	大野城跡	工事許可	県教委指示	
4	8年 2月	太宰府市教育長	広場整備	" 観世音寺4丁目	6,034	観世音寺	調査後許可	"	3月、太宰府市教委と共同調査
5	"	個人	車庫設置	" " "	179	学校院跡	"	"	3月26日、発掘調査(太宰府史跡第174次)
6	3月	九州歴史資料館長	発掘調査	太宰府市吉松・大野城市下大利	500	水城跡	調査許可	発掘調査	水城西門跡(水城第26次調査補足)
7	4月	個人	住宅改築	" 観世音寺4丁目	334	観世音寺	許可立会指示	立会	
8	5月	市民祭実行委員会	仮設物設置	" " "	26,000	大宰府跡	県教委許可	太宰府市教委指示	
9	"	太宰府市長	水路改良	" " 5・6丁目	230	観世音寺及び観世園地	許可立会指示	立会	
10	6月	宗教法人	"	" " 4丁目	100	学校院跡	県教委許可	太宰府市教委指示	
11	"	福岡県農林事務所長	浸食防止工事	糟屋郡宇美町大字炭焼	3,000	大野城跡	許可立会指示	立会	
12	"	福岡県教育長	発掘調査・環境整備	太宰府市大宰府字岩屋	400	"	許可	発掘調査	9~10月発掘調査、1月以降環境整備
13	"	太宰府市長	上・下水道管設置	" 観世音寺4・6丁目	1,715	学校院跡・観世園地	調査・立会指示	発掘調査・立会	学校院跡(太宰府史跡第176次調査)
14	7月	宗教法人	仮設物設置	" " 3丁目	1,500	大宰府跡	県教委許可	太宰府市教委指示	
15	"	個人	住宅改築	" " 6丁目	262	観世音寺(観世園地)	許可立会指示	立会	
16	"	太宰府市長	解説板設置	" " 5丁目	1	観世音寺	県教委許可・立会指示	"	観世音寺鐘記念碑建設
17	9月	宇美町長	法面保護工事	糟屋郡宇美町大字因王寺	200	大野城跡	許可立会指示	"	
18	"	太宰府市長	上・下水道管設置	太宰府市観世音寺5丁目	252	観世音寺	"	発掘調査	3月現在工事中
19	"	宗教法人	寺院増築	" 4丁目	561	大宰府跡	県教委許可・立会指示	立会	
20	10月	太宰府市教育長	案内板設置	" 園分4丁目	2	筑前園分寺跡	"	"	
21	"	個人	住宅改築	" 観世音寺6丁目	300	観世音寺(観世園地)	"	"	
22	12月	太宰府市教育長	広場整備	" " 4丁目	6,034	観世音寺	"	"	
23	1月	福岡県知事	自然歩道再整備	太宰府市原・坂本字上谷	60	大野城跡・観世音寺	県教委許可・立会指示	立会	
24	"	太宰府市長	上・下水道管設置	" 観世音寺4丁目	952	大宰府跡	"	"	
25	2月	"	モニュメント設置	" 観世音寺1丁目他	2	筑前園分寺跡	県教委許可・立会指示	"	
26	3月	"	市民の森整備	" 観世音寺5丁目	55	観世音寺	"	"	

れ、この部分にも濠は存在しないこととなった。このことから、博多側の外濠の幅を60mと推定してはいるものの、西門付近の官道東側で確認した外濠は幅60mに達しないことが判明した。これは、今後の調査によって追求する必要がある。

7月に入って、太宰府市立学院中学校前面の県道を挟んだ広九地区で、集合住宅建設予定地の発掘調査を実施した。この地区は大宰府史跡第166次調査区（1994年）の北側に当たる。第166次調査の結果から、大宰府史跡に関連する遺構が検出されるとは予想していなかった場所である。建物の方位が東側に9度の傾きをもつ四面崩壊物（SB4340）や溝状遺構（SK4345）などが検出された。この溝状遺構からは多量の土器や瓦が一括廃棄された状況で出土している。発掘調査は炎天下の中行われたため2ヶ月を要したが、8月30日に終了した。

盆休みが終わった8月19日からは、大野城跡太宰府口城門付近の環境整備事業に伴う発掘調査を実施した。当館は水城跡西門地区の調査を実施していたため、急速発掘作業員の手配を大野城市教育委員会にお願いし、調査を進めることができた。発掘調査は土塁修復の基礎資料を得るために城門東側外周土塁に8本のトレンチを設定した。調査の状況については、別途大野城跡の環境整備事業報告書として刊行される予定であるが、外周土塁東側頂部では2列の柱穴掘形があること、土塁の外側掘で版築工事を実施するための支柱の穴が検出されたこと、さらには城門東側石組に設けたトレンチにより、現在露出している石組の奥に古期の石組が存在することなどの調査成果があった。大野城跡太宰府口城門整備事業は、既に第3年次が経過したが、10月10日に一応終了している。

9月上旬、太宰府市が実施している上・下水道管理設工事は、4工区に分け一斉に発注された。4工区のうち3工区は観世団地内の事業であり、過去の調査状況から一部を除けば工事は遺構面に達しない深さで行われることから、立会を中心とした調査を行うことにしたが、他の1工区は史跡学院地区内であった。特に、第37次調査区（1975年）の東・北側の市道部分に下水管が埋設される計画であることから、文化庁の指示のもとに福岡県教育委員会・太宰府市教育委員会・太宰府市当局との協議の結果、第37次調査区の北側及び東側の市道の幅一杯調査を実施することとした。それは、第37次調査区の遺構面と現市道との差が僅か0.2mであり、管の埋設工事で遺構の削平は避けられない状況が判ったためである。結果的に北側市道部分の調査では中・近世の遺構・遺物を認めただけであったが、東側市道部分では第37次調査で検出していたSB760・765の柱穴の連続部分を調査できたことや文様埴が出土したことなどの成果があった。市道部分の遺構は管理設のため破壊されたが、このような機会であれば今後とも調査対象地とはならない部分であり、発掘調査を実施して良かったと考えている。この発掘調査を第176次調査とした。調査は12月上旬で終了した。

以後、今日まで発掘調査関係の業務は、水城跡西門地区の最終確認調査及び埋め戻し作業を行っている。

本書は、水城跡第26次調査補足の成果を中心に、第169-1次調査・第175次調査について報告する。第176次調査の結果については現在出土遺物の整理途中であり、平成9年度の概要報告に送る。第174次調査については、顕著な遺構・遺物が見られないことから報告を省略する。

なお、平成8年4月3日、水城跡東門地区の太宰府側基底部斜面が崩壊し、土砂が民有地に流失した。その土砂除去作業を太宰府市教育委員会が実施し、当館が立会調査を行った。崩壊場所は水城跡基底部に構築された水城瓦窟跡であり、崩壊土の中から軒瓦が採集された。本書にはその採集遺物の概略報告を加えた。

また、観世音寺の鎮の音が「日本の音百選」に選定され、太宰府市では記念碑の建設を計画した(現状変更申請等対応状況表No.16)。記念碑建設の基礎工事の立会調査を11月21日に行ったが、若干の軒瓦等の出土があったので、この概略も報告に加えた。

平成8年度には、太宰府市が「文化ふれあい館」を4月27日にオープンさせた。史跡筑前国分寺跡の東側400mほどの位置である。ここでは、筑前国分寺跡の七重塔の10分の1模型を屋外展示している。館内は運営を(財)古都大宰府保存協会が受け持ち、太宰府市教育委員会文化課の埋蔵担当職員の日常業務の場所ともなっている。

(栗原和彦)

第3表 調査実施表

調査回数	調査地区	調査面積	調査期間	備 考	*
水城跡	6 AMK-V-W	500㎡	960410～970310	水城西門跡、築堤期遺構の調査	2
大野城跡	太宰府口城門東側土塁	130㎡	960819～961010	太宰府口城門跡、環境整備事業	
174次	6 Z G K	82㎡	960326	学校院西部	
175次	6 A Y Q - A	580㎡	960709～960831	広丸地区官人居住区	
176次	6 Z G K	260㎡	960924～961202	学校院西部	

*は前掲第2表の調査計画表の番号に対応する



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

II 立会調査

1. 水城瓦窯跡 (第49図B)

水城瓦窯跡は、太宰府市大字国分235、236-1・2に所在する。昭和61(1961)年、水害の災害復旧工事によって発見された。窯跡の位置は水城東門跡(旧国道3号線)から西に110mほどの水城下成土塁南端である。災害復旧工事時点で太宰府市教育委員会の山本信夫・狭川真一の両氏が立会調査を実施し、その概要が『水城跡』(太宰府市の文化財第24集 1994)に第11次調査として記されている。報告書によれば、下成土塁太宰府側斜面を清掃した結果、2基以上の窯跡を認めたとされている。

特別史跡水城跡の指定境界線が下成土塁の法下にあり、大雨が降る度に斜面の土砂が兩側の水田(民有地)に崩落する状況がその後も繰り返し続いた。史跡管理者である太宰府市教育委員会では斜面が崩落するつど、その復旧工事を実施せざるを得なかった。

九州歴史資料館は、太宰府市が行う復旧工事のたびごとに立会調査を行ってきた。平成6年の立会調査では崩落土の中から丸瓦片・埴など10余点を採集し、平成7年にもほぼ同数の資料が採集されている。

今回の立会調査は、平成8年4月3日に上記箇所で行った応急復旧工事に伴うもので、崩落土の中から軒丸瓦1点、平瓦片、埴及び窯壁などを採集した。軒丸瓦の発見はこの窯跡からは初めてのことであり、窯が操業された時期や供給先との問題もあり、採集された資料を紹介することにした。今後、窯跡の発掘調査を行えば、窯跡に関する諸問題は解決されるものと思われるが、現段階での水城瓦窯の新資料である。

第2図1は老司系弁弁八弁蓮華文軒丸瓦である。弁区より一段高い中房に1+4+8の蓮子を配し、中房の外に蒸帯が巡る。外区は内側に32子の連珠文が、外側に28前後の凸鋸歯文が配置される。瓦当文様は4分割を基本とした整った文様である。この瓦の同范例は、水城跡西門地区、大宰府政庁蔵司官衙地区、不丁官衙地区などにあり、まとまった点数ではないが出土がみられる。蔵司官衙や不丁官衙では、天平年間の木簡と共存している老司Ⅱ式や鴻臚館式の一群が主流である。このことから、採集した軒丸瓦は瓦当文様の上からも、官衙地区の軒瓦の組合せの上からも老司Ⅱ式や鴻臚館式との時期的な差は、あまりないものと考えて良い資料である。8世紀の第Ⅱ四半期におけないだろうか。

2は縄目の平瓦の一例である。縄目の瓦は採集資料では比較的多く、6点ほどが認められる。既に、太宰府市教育委員会の調査でも報告されているが、凸面の叩打は丁寧に行われ、凹面の布目も残りが良い。胎土に石英粒を混ぜている。灰白色で、焼き上がりはやや悪い。

3は凸面に細かい正格子目の叩打具痕が見られる。この叩打具痕は、大宰府跡出土例では叩

打具に文字を刻んだ一群で9～10世紀と推定している。凹面には布目と幅広い模骨と思われる痕が付く。細砂粒を含むが、良質の粘土を用いている。黄灰色に硬く焼き上げられている。

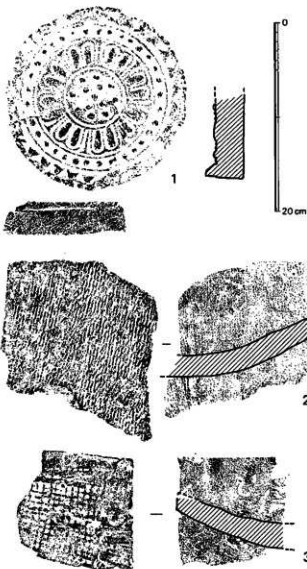
この他に塚が採集されている。完形のものはないが、太宰府市教育委員会が報告した縦32cm、横20cm、厚さ7cm程の大きさにしよう。なお、今回は甕壁の一部と思われるスサ入りの粘土塊も採集された。

(栗原)

2. 観世音寺鐘記念碑建設地 (第1図A)

国宝に指定されている観世音寺梵鐘の鐘の音が「日本の音百選」に選ばれ、太宰府市から鐘楼の上り口に記念碑を建立したいとの相談を受けた。現鐘楼が塔跡に接近して建てられているため、塔跡基壇の南辺石列から南側に6mの距離で、遺構に影響がないと想定される鐘楼階段の南隣接地に建立位置を設定した。太宰府市が現状変更申請を行い、文化庁の許可後に工事が発注され、立会調査は11月21日に行った。

碑の基礎は上端が80×65cmで、埋設するのに深さが60cmは必要であるという。表土を20cm掘り下げた段階で瓦片が出土し始め、基礎の掘形が掘り上がった段階では土嚢袋一袋ほどの出土量となった。瓦の出土状況から塔跡に関連する遺構の一部に碑の掘形を掘ったものと推測されるが、諸般の事情から遺構の確認は行っていない。この掘形からは軒九瓦1点、軒平瓦3点、



第2図 水城瓦窟跡出土軒九瓦・平瓦拓影・突測図

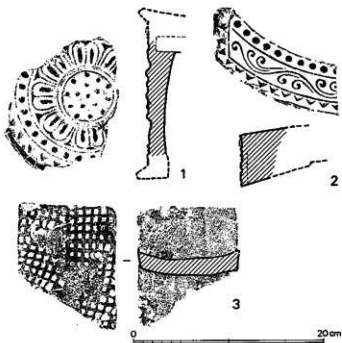
製斗瓦1点と丸・平瓦片が出土した。

第3図1は老司I式軒丸瓦である。細かい石英粒を含むが、良質の粘土を用いている。灰白色で、焼き上がりも硬い。瓦当裏面頸部には、この軒丸瓦の特徴である突帯がある。2は老司I式の軒平瓦である。破面を観察すると粘土紐巻き上げによって製作された様子が窺える。精良な粘土が使用され、灰白色で硬く焼き上げられている。他の2点はやや焼き上がりが悪い。

3は老司式軒瓦に伴う平瓦を3枚割りした製斗瓦である。凸面に格子目が、凹面には布目と横骨の痕がある。粘土紐巻き上げによって製作したものと思われるが、その痕跡は明瞭には観察できない。精良な粘土が用いられ、砂粒は含んでいない。灰色から一部黒灰色で、焼き上がりも硬い。丸・平瓦片の紹介は省略するが、出土瓦は殆どが創建期のものと思われる。

観世音寺の塔は資財帳に五重塔と記され、不空羅索観音立像の胎内墨書銘により、康平7(1064)年に焼亡し、以後再建されることはなかった。塔基壇の版築土も基底部分の一部を残して失われている状況にあるが、今回の出土瓦は塔が焼亡・倒壊した時期のものであろうと推測できることから、今後とも観世音寺境内地内の現状変更に伴う調査は注意を必要とする。

(栗原)



第3図 観世音寺鐘記念碑建設地出土軒先瓦・製斗瓦拓影・実測図

Ⅲ 発掘調査

1. 第169-1次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の調査として実施した。当調査地は大宰府政庁跡の西方約400mの所に位置し、蔵司跡西丘陵奥の低丘陵上及び斜面の中段部にあたる。調査区の西側10mの箇所は第19次調査(1972年)として実施した。また、近年では、この丘陵裾部を第160次調査(1994年)として、その西側隣接地を第170次調査(1995年、太宰府市教育委員会調査)として実施している。それに、当該地と谷を隔てた対面の丘陵(米木)東側斜面では、過去に瓦窯10基が検出されており、この一帯には工房関連遺構の存在が予想されていた。事実、第160次調査では、大規模な鑄造工房を想定させる鑄羽口・トリペ・増場などの鑄造に使用される道具が出土している。このことは第19次調査でも同様である。また、瓦窯出土の瓦は平安期のものであるが、大宰府政庁跡及びその周辺から出土するもので、政庁を中心に供給されていたことが明らかになっている。

調査地は比高5m弱の低丘陵で、頂部はかなりの平坦部となっている。この平坦部の状況から、以前より建物などの遺構が存在するのではないかと期待がもたれていた。さらに、西側斜面の中ほどにも平坦面があり、ここにも遺構の存在が予測されていた。予備調査を実施したところ、頂部では顕著な遺構は見られなかったが、中段部では建物の柱掘形らしき遺構を確認したため本調査の実施となった次第である。調査の結果、中段部で掘立柱建物と礎石建物及び竪穴住居などを検出した。このため、予備調査では特に目立った遺構が確認されなかった頂部においても関連の遺構が存在するのではないかと予測され、重機によるトレンチ調査を実施したところ、弥生時代の貯蔵穴を検出したが、歴史時代の遺構は検出されなかったため貯蔵穴は遺構確認に留めた。ここでは、中段部で検出した遺構について報告する。

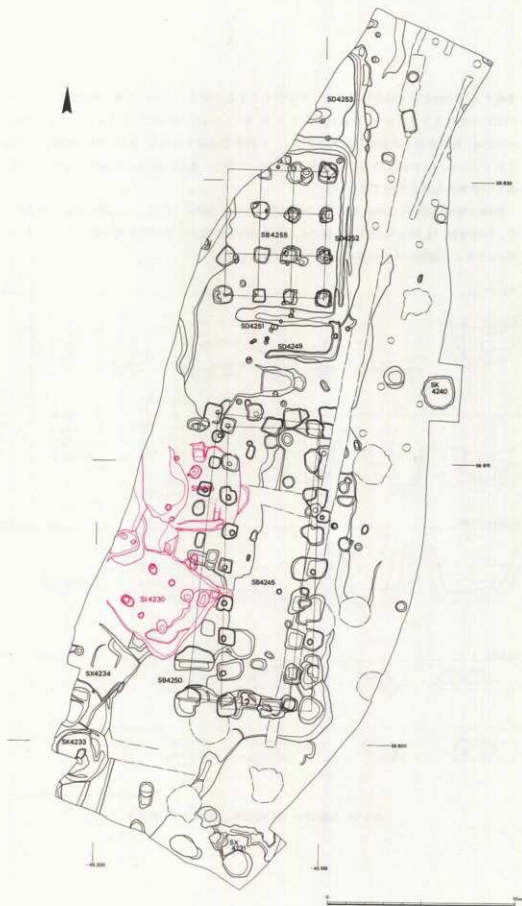
調査地番は太宰府市大字観世音寺431-1・2、433番地である。調査対象とした面積は3,300㎡であるが、発掘調査はその内の500㎡について実施した。調査期間は平成7年7月25日～平成8年1月26日である。

検出遺構

本次調査で検出した主たる遺構は、掘立柱建物2棟、礎石建物1棟、古墳時代の竪穴住居3軒(うち1軒は明確でない)、土塋、それに弥生時代の貯蔵穴などである。

掘立柱建物

SB4245 発掘区のはほぼ中央で検出した2間×8間の南北棟建物である。SB4250と重複するが、柱掘形の切り合い状況からみてSB4250より古期の建物である。東側の柱掘形はその殆どが



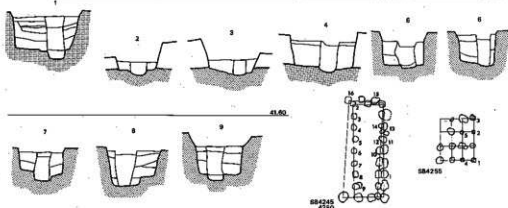
第4圖 第169-1次調査遺構配置圖

重複するため掘形の形状が明確でなく不整形を呈する。切合いのない西側の柱掘形については平面形がはっきりしており、それによると一辺1.0~1.5mで、深さは最も残りの良いもので0.8mである。柱の痕跡も西側柱列は残りが良く、8箇所確認できるが、東側では1箇所しか確認できていない。それによると、柱の径は20~30cmである。掘形の埋土は互層になっているが、強く叩き締められた状況ではない。

建物の規模は梁行4.736m(16尺)で、柱間寸法は2.368m(8尺)、桁行15.04m(50.8尺)で、柱間寸法は1.88m(6.35尺)等間である。この柱間距離から単位尺を割り出すと、1尺=0.296mである。建物の方位は座標北より0°40'東偏する。

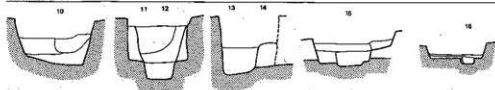
SB4245

41.80



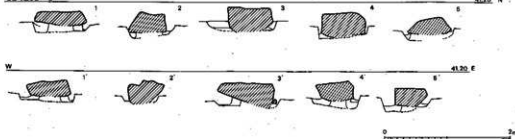
SB4245・4250

41.80



SB4255

41.20 N



第5図 SB4245・4250柱掘形、SB4255炭石断面図

SB4250 前述のSB4245と重複し、ほぼ同規模であるが、方位がかなりずれる。後世の攪乱のためか、柱掘形は明瞭さを欠いている。特に、西側の柱掘形は削平されたためか検出できなかった。柱痕跡も辛うじて確認できたのは、北西隅の1個のみである。柱痕跡がないので柱間は正確ではないが、柱位置及び柱筋が整合する位置を復原すると、建物の規模は梁行2間で、5.642m (19尺)、柱間は中央間が2.072m (7尺)、両脇間が1.776m (6尺)である。桁行は8間で、15.037m (50.8尺)、各柱間は等間で1.88m (6.35尺)とした。この柱間寸法はSB4245の単位尺0.296mを用いた。建物の方位は座標北より5°25'東偏する。

礎石建物

SB4255 掘立柱建物SB4245・4250の北側で検出した3間×3間の総柱礎石建物である。残存する礎石は5個であるが、礎石の根石掘形が明瞭に残っており、これから復原が可能である。柱位置は礎石であるため正確ではないが、整合性のある柱位置を検討すると、単位尺はSB4245と同じ0.296mで、東西(梁行)は5.328m (18尺)で、柱間は1.776m (6尺)等間である。また、南北(桁行)は6.66m (22.5尺)で、柱間は2.22m (7.5尺)等間である。この建物は南側に位置する掘立柱建物SB4245と東側柱筋を合わせており、方位は0°40'東偏する。そのことからみて同一時期に存在したものと考えられる。残存する礎石5個のうち4個は花崗岩の自然石で、最大のもので1.0×1.0m、最小のもので0.5×0.75mである。礎石の大きさから見ると、蔵司地区や大野城跡で見られる総柱の礎石建物に比較するとやや小振りであり、柱間寸法も若干短い。

この建物を建てるにあたっては、地盤のしっかりした硬い地山面を露出させ、礎石を置く範囲としている。そのため、礎石を配した部分と東側とは約0.65mの高低差が見られる。東側の高い部分の一部には地山が見られるが、南側に向かって地山面は下がっており、このことから地盤沈下を防ぐための地業とみられる。硬い地盤であるが、若干の掘り込みを行い根石を置いている。残存する礎石の上面は石の平らな面を使用し、現状でもほぼ水平を保っていることからみて、後世の攪乱は余り受けていないものと考えられる。

溝

SD4251・4252・4253 礎石建物SB4255の雨落ち溝である。幅は1m弱で、必ずしも一定していない。西側については検出できなかったが、残存する遺構面は西側が下がっていることから削平された可能性が高いが、西側は建物の端から僅かな距離で段落ちとなっており、雨落ち溝を設けなくても排水が可能であったとみることもできる。この連続する3条の溝は、礎石の心から溝の心まで1.5m前後の距離を測る。地形の関係からみて、排水は西側の段落ち部分になされたものと考えられる。

SD4249・4254 SD4249は礎石建物SB4255の南側の雨落ち溝SD4251の南側に接続し、L字状になる溝である。SD4251との間に幅約2mの空間をつくる。また、SD4254は礎石建物北側の雨落ち溝SD4253と接続し、SD4249と同じくL字状を呈する溝である。屈曲部分が僅かに発掘範

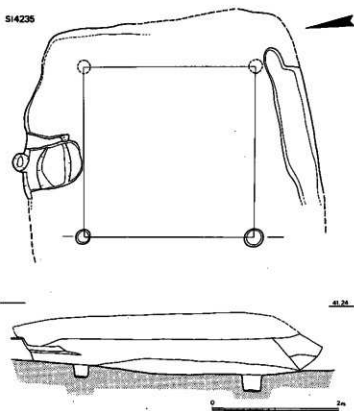
匠の中で確認できるが、それを屈曲部とすれば幅約3mの空間となる。即ち、北と南側に規模の大小はあるが、溝で区画された空間をもっている。この空間がいかなる性格を有するものか明かではないが、礎石建物に付随して機能する空間であろう。例えば、高床の倉庫に昇降するための梯子が設置されていた場所で、そのために必要な空間であったと推測される。

土壌

SK4233 発掘区の南西隅部で検出した土壌である。ほぼ正円形で、直径2.8m、深さ1.4mである。掘形はしっかりしているが、内部からは殆ど遺物が出土していないこともあり、その正確については明瞭ではない。当土壌は北側のSX4234を切っており、それより新しい年代を示す。

不明遺構

SX4234 発掘区の南西隅で、SK4233の北側に位置し、それと切合い関係にある落込み状の遺構である。西側が段落ちとなることから、傾斜面の落ち込みとみられる。ここからは、一箇所

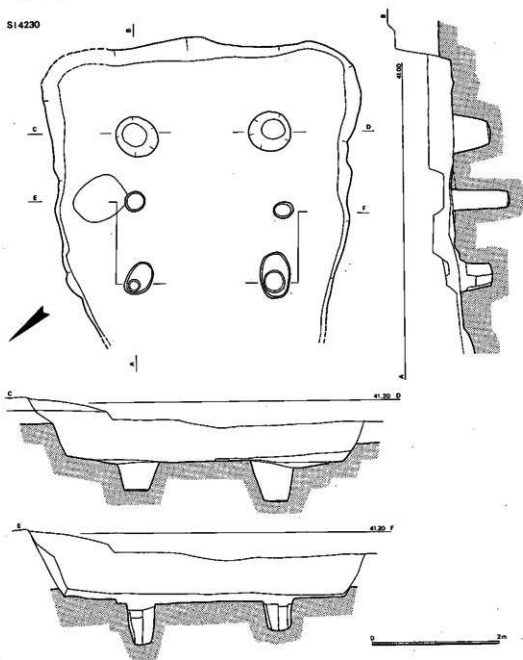


第6図 竪穴住居SX4235実測図

にまとめて炉壁片が出土した。

竪穴住居

S14230



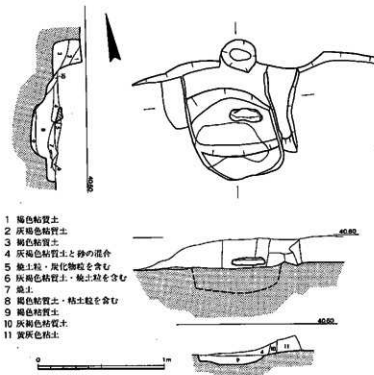
第7図 竪穴住居S14230実測図

掘立柱建物SB4245・4250の西側に重複して位置する古墳時代の竪穴住居である。3軒検出したが、住居として明確なのはSI4230・4235の2軒である。

SX4229 竪穴の一部を検出したが、住居として確定するには至らなかった。検出した竪穴部は北辺と東辺である。残存する深さは最も深い部分で0.30mを測る。

SI4230 SX4229の北側で検出した。西辺は削平のため不明であるが、南北3.5m、東西3.6m(柱位置から折返した復原値)のはほぼ正方形のプランを有する。後世の擾乱が著しく判然とした部分もあるが、遺存状態の良好な箇所では検出面から床面までの深さは0.6m前後である。やや堅緻な床面は12㎡程の広さであろう。柱穴は6個を検出したが、四隅の柱穴が径0.4～0.6m、深さ0.6mと大きく、その東西方向のはほぼ中心にある柱穴は径0.2～0.3m、深さ0.3～0.9mとやや小さい。柱間は南北2.2m、東西2.35mを測る。また、北辺中央部には長径0.8m、短径0.7mの焼土が入った浅い窪みがあり、カマドと考えられる。

SI4235 SI4230の北側で検出した。プランは後世の擾乱のため明瞭ではないが、南北4.6m、東西4.3mの不整形を呈する。柱穴2個を検出したが、住居の東半部は掘立柱建物SB4245・4250の柱掘形が存在するため確認できていない。柱穴は径0.2～0.3m、深さ0.4mである。床面の広さは約20㎡である。住居壁の北辺中央部に作り付けのカマドが付設されている。



第8図 竪穴住居SI4235カマド実測図

カマドは袖部の遺存状態は悪いが、床面を掘り込むタイプのもので、掘形は0.95×0.6mの大きさである。掘形の中央部には住居壁面を掘り込んで長さ0.25mの煙道を設けている。また、火床中央には長さ0.25m、幅0.1mの自然石があり、支脚とみられる。

貯蔵穴

SK4240 発掘区東辺のほぼ中央で検出した弥生時代の貯蔵穴である。上面径1.75m、底面径1.9mで、深さは1.1mの残存状況である。側壁はオーバーハング気味であるが、底面に山形に堆積した埋土の状況から、本来は袋状を呈していたものと思われる。遺物は埋土上層から出土している。

(横田賢次郎)

出土遺物

SB4245出土土器 (第10図、図版17)

須恵器

蓋 (17・18) 口縁端部を下方に折り曲げる。

17は復原口径14.0cm、18は15.1cm。

高杯 (19) 脚部は短く八字に開く。焼成は軟質で、茶褐色～灰色を呈する。

SB4250出土土器 (第10図、図版17)

須恵器

杯 (20) 底部には高台が付き、体部は直線的に立ち上がる。復原口径12.0cm。

SB4245・4250出土土器 (第10図、図版17)

SB4245とSB4250の柱掘形が重複して、何れの建物に属するか不明な土器を掲載した。

須恵器

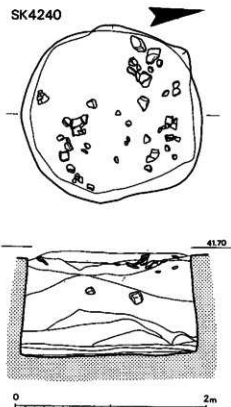
蓋 (21) 器高は比較的高く、口縁端部は内面に段を持つ程度である。復原口径13.1cm。

杯 (22) 底部に幅広で低い高台を持つ。復原高台径9.5cm。

浄瓶 (23) 浄瓶の蓋部分と思われる。回転ヨコナデ調整。

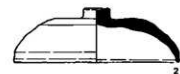
円面碗 (24・25) 何れも破片であるが、2個体分が出土した。24は脚台上半が垂直に近く立ち上がり、25は裾が大きく八字に開き端部を四角く作る。2点とも脚台部にはへら状工具で

SK4240

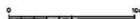
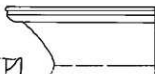


第9図 弥生貯蔵穴SK4240実測図

SI4230



SI4235



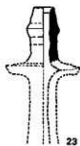
SB4245



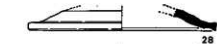
SB4250



SB4245-4250



SB4255



第10图 SI4230·4235、SB4245·4250·4255出土土器·土製品実測图

方形の透かしを入れ、24は復原すると15～16箇所に入る。24は復原陸部径11.8cm、25は復原脚台径20.0cm。

SB4255出土土器・土製品（第10・11図、図版17）

須恵器

蓋（26～29） 口縁端部は何れも嘴状に折り曲げる。26・27は天井部外面はへら削りする。口径15.1～18.4cm。

杯（30） 底部に断面逆台径の高台を貼付する。

皿（31） 底部からなだらかに口縁部が立ち上がる。底部は切り離した後、一部削りを施す。内面には墨痕がみられる。復原口径20.0cm。器高2.4cm。

土師器

杯（32） 底部は丸底気味で、体部との境は不明瞭である。復原口径15.0cm。

皿（33） 底部と口縁部の境は屈曲して曲がり、口縁端部をシャープに仕上げる。復原口径16.0cm。器高1.5cm。

器台（34） 受部を欠失する。脚部は直線的にラッパ状に開き、裾部で僅かに外反する。

土製品

手捏ね土器（35） 半球形に作る。

SI4230出土土器・土製品（第10図、図版17）

須恵器

蓋（1） 下位で屈曲して天井部と口縁部を分ける。天井部外面は回転へら削り調整。口径14.5cm。

高杯蓋（2） 器形は丸く、口縁部外面が僅かに窪む。天井部には釘状の撮を貼付する。焼成は軟質で淡灰色を呈する。復原口径13.1cm。

高杯（3） 脚部。外面はカキ目を施し、中位に2条の沈線が入る。

瓶（4） 提瓶などの口頸部であろうか。締まった頸部から口縁部が外反して開く。

土師器

杯（5） 体部と底部の境に稜をもち、体部は僅かに外反して立ち上がる。器面は風化しており、調整は不明。

土製品

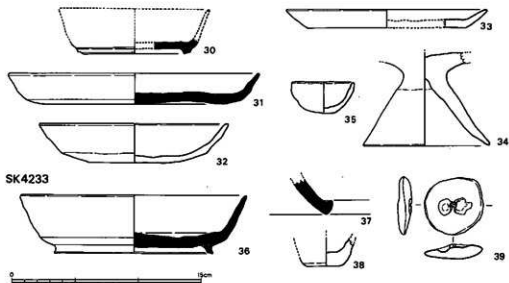
手捏ね土器（6～10） 5点出土した。6～9は径4cm前後で、10はそれより大形になる。7～9は丸底、6・10は平底気味で、10の底部外面にはへら状工具の痕跡が残る。

SI4235出土土器・土製品（第10図）

須恵器

蓋（11・13） 11は天井部と口縁部の境に僅かな稜をもち、口縁端部は丸く仕上げる。復原

SB4255



SK4233

第11図 SB4255、SK4233出土土器・土製品実測図

口径14.0cm。13は天井部外面に鉤状の襷をもつ蓋の破片。

杯 (12) 立ち上がりは内傾する。復原受部径14.0cm。

高杯 (14) 脚部の破片。八字に開き、端部で下方に折り曲げる。

甕 (15) 口頸部の破片。外反して開き、口縁部外側に粘土紐を貼り付けて肥厚させる。復原口径23.5cm。

土製品

手捏ね土器 (16) 底部は平底で、灰色を呈する。

SK4233出土土器・土製品 (第11図、図版17・18)

須恵器

杯 (36) 体部はほぼ直線的に立ち上がり、裾広がりの高台は底部のやや内側に付く。復原口径18.0cm。

円面硯 (37) 脚台部の破片。裾は大きく八字に開き端部は屈曲し斜め上方に跳ね上げる。

土製品

手捏ね土器 (38) 平底に作る。

模造鏡 (39) 粘土で円盤を作り、親指と人差し指で鈕を掘出した後、へら状の工具で鈕孔部分を刻む。直径4.6cm。

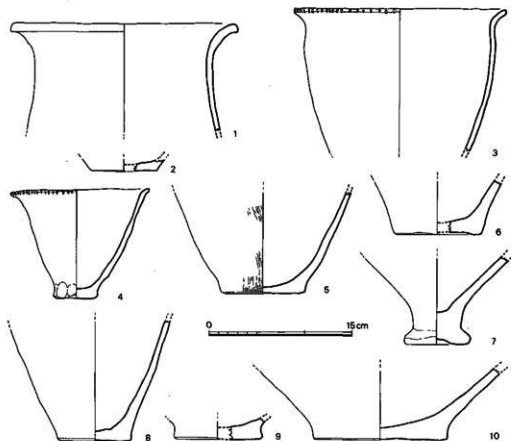
SK4240出土土器 (第12図、図版18)

弥生土器

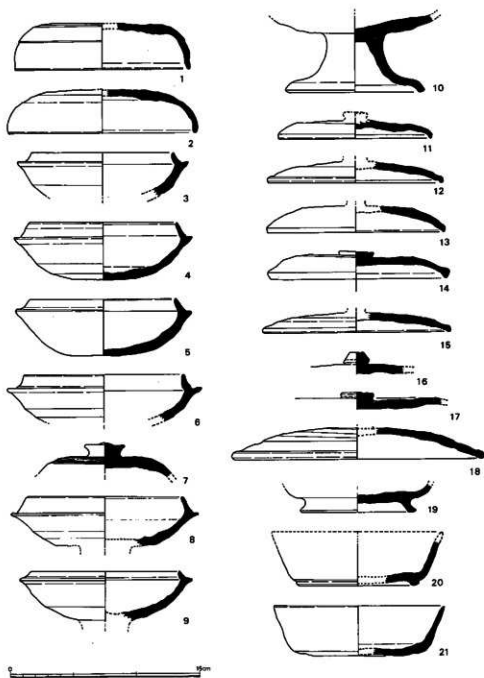
壺 (1・2) 1は直線的にすはまる頸部に外反して開く口縁部が付く。内外面ともナデ調整。2は底部破片で、平底で薄い。

甕 (3~9) 3は如意形の口縁部をもち、口縁端部には刻目が入る。4は小形甕で完形品。胴部は僅かに内湾して開き、口縁部が外反する。口縁端部には同じく刻目が入る。5~9は胴部から底部の破片。5・8・9は底部が平底で薄い。6はやや上げ底気味。7は底部が厚く上げ底で、裾が外に張り出した踏ん張った形になる。5は外面をハケメ調整で仕上げ、その他はナデ調整。

甕棺 (10) 底部は平底で径14.0cm。器壁も厚く、甕棺と考えられる。



第12図 SK4240出土弥生土器実測図

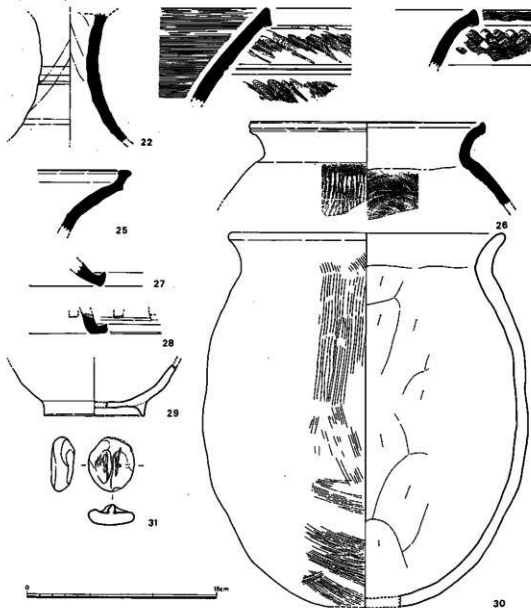


第13图 暗褐色土层出土土器实测图(1)

暗褐色土層出土土器・土製品 (第13・14図、図版18)

須恵器

壺 (1・2・11~18) 1は天井部と口縁部の境と口縁部内面に段をもつ。復原口径13.9cm。2は天井部と口縁部の境が明瞭でなく、口縁端部を丸く納める。11~18は天井部に撮が付き、口縁部を下方に折り曲げるタイプ。口径12.2~15.0cmの中形品(11~15)と20.0cmの大形品(18)がある。14は焼き歪みがあるもの。14・17の撮は鉤状であるが、16は断面台形の特異な形状をしている。



第14図 暗褐色土層出土土器実測図(2)

杯(3~6・19~21) 3~6は古墳時代の杯で、立ち上がりは内傾する。受部径13.6~15.4cm。4は底部外面に「×」のヘラ記号がある。5は軟質で器面が風化しており、淡茶灰色~灰色を呈する。19は底部と体部の境に丸みをもち、八字に開いた高い高台をもつ。20は体部が直線的に立ち上がり、底部にはやや低い高台を貼付する。21は20とはほぼ同器形であるが高台をもたない。

高杯蓋(7) 天井部に擬宝珠状の境をもつ。天井部外面にはカキメを施し、内面には同心円形の当て具痕が残る。

高杯(8・9) 8は破片で一見杯のようだが、底部内面に青海波状の当て具痕があり、脚部を失った高杯と考えられる。9は立ち上がりが8と比べて短い。8は復原受部径14.9cm。9は13.7cm。22は長脚のタイプで、裾に向かって外湾して広がる。

壺(10) 脚付壺の脚部と考えられる。脚は八字に開き、裾で下方に曲げる。

甕(23~25) 23・24は口縁部を三角形に作り、頸部外面を沈線で区切って櫛描波状文を施す。24は口縁部外面にも波状文がみられる。口頸部内面は23がカキメ、24はヨコナデ調整。25は口縁部と頸部の境が屈曲して二重口縁状になる。26は丸みをもった胴部に短く開く口縁部が付く。胴部外面には平行タタキ痕が、内面には青海波状に当て具痕が残る。

円面碗(27・28) 2点とも脚部裾の破片である。27は裾で大きく広がって端部を斜め上方に跳ね上げる。28は裾がそれほど開かず、端部をL字形に曲げる。28はヘラ状工具による透かしの下端が確認できる。

土師器

碗(29) 体部は丸みをもち、底部との境は直立する高台によって分ける。復原高台径8.0cm。

甕(30) 楕円形の胴部に短く開く口縁部が付く。口径は胴部最大径を上回らない。胴部外面はハケメ調整。ハケメの原体が上半部と下半部では違っている。内面はケズリ調整。

土製品

模造鏡(31) 4.3×3.7cmの楕円形で、長軸に沿って高さ0.6cmの鈕を掘み出す。さらに両側から櫛状工具で孔を空けるが、孔は貫通しない。(小川泰樹)

瓦類

この調査では瓦の出土量は少なかった。軒平瓦3点と、若干数の丸・平瓦片が出土した程度である。

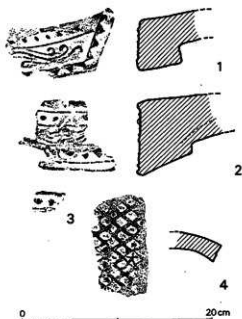
軒平瓦(第15図、図版19)

1は老司Ⅱ式軒平瓦である。短く深い段頸をもつ。砂粒を含むが、良質の粘土が用いられている。黄灰色で焼き上がりはやや悪い。礎石建物SB4255の近くで出土している。

2は内区に右から左へ偏行する唐草文を配し、上外区に連珠文、下外区に凸鋸齒文を配置する老司系の瓦当文様の軒平瓦である。老司Ⅰ・Ⅱ式と比較した場合、唐草文が逆方向に流れてい

る点、上外区・下外区の外側に界線より高い素文帯が配置されている点が異なっている。長く浅い段頸をへらで切り込んで作り、頸下の部分に指で横方向にナデた痕がある。破面からは平瓦を挿入した痕は認められないことから老司Ⅰ・Ⅱ式同様、粘土紐巻き上げ技法で製作された可能性が高い。少量の細砂粒を胎土に混ぜているが、精良な粘土によって作られている。焼き上がりはやや悪い。

3は上外区に配置された珠文2個を残す瓦当の破片である。珠文は丸く突出していて、この特徴をもつ2～3種の軒平瓦の一つと限定できる。瓦当面の背後に平瓦の先端部が剝離した痕が見られることから、平瓦包み込み技法によって作られた軒平瓦と思われる。良質な粘土が用いられ、青灰色で須恵質に焼き上がっている。



第15図 軒平瓦・丸瓦拓影・実測図

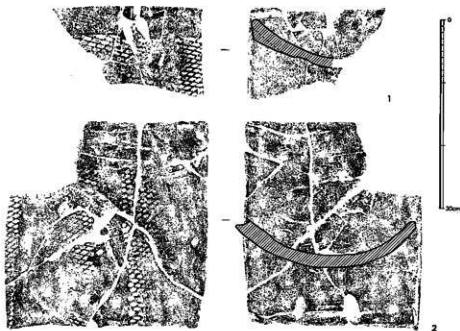
文字瓦 (第15図、図版19)

4は丸瓦の破片である。凸面に斜格子目の叩打具痕が残るが、斜格子目の一部に「大」の字が認められる。石松好雄・高橋章氏の集成した文字瓦のX V類に一種類「大」字があるが、これとは明らかに異なったものである。一端に分割面を残している。砂粒を多量に含む粘土が用いられ、暗灰色で須恵質に焼き上がっている。1点出土。遺構に伴った資料ではない。

丸・平瓦片 (第15図、図版19)

丸瓦では小破片が数点出土した。凸面を擦り消したものと、斜格子文のものと二種があるが、破片が小さいため図示していない。平瓦では凸面が縄目叩打されたもの、斜格子目叩打されたものの破片が出土しているが、ここでは礎石建物S B4255の周囲で出土した平瓦のうち2点を図示した。

1・2とも粘土板橋巻き作りされたもので、両者とも凹面左端に粘土板の合わせ目部分がやや厚みに残る。凸面は図の上端の数cmを素地のまま残し、6.5×25.0cm以上の長手の叩打具で一方方向から叩打している。凹面では1・2とも布目痕があるが、横骨や糸切りの痕は認められない。1・2とも図の上端の凹面側をへら削りして、2の下端凹面もへら削りされている。1・2の瓦とも横骨に取り付けた分割突起の部分で分割されているが、1は分割面に刃物の痕がなく、割られた状態のまま、2は明瞭な刃物の痕が分割面に認められる。1・2ともに小



第16図 平瓦拓影・実測図

量の砂を混ぜているが、良質の粘土が用いられている。灰白色で焼き上がりはやや悪い点も共通している。また、2の資料の形状から、製作に使用された模骨は円錐台形のものと考えられるよりも円筒形のものとして想定されるが、大宰府跡出土瓦の多くは円錐台形のものと考えられているから、今後に出土例の増加を待つ必要がある。

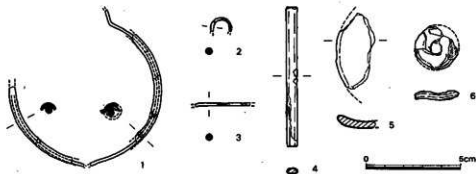
この資料は胎土が老司式の瓦に近いことや老司II式軒平瓦と同様、礎石建物S B 4255の近くで出土していること、第169次調査区が第160次調査区（1994年）と一連の遺跡であることなどから奈良時代前半の資料と考えたい。しかし、次の点で疑問が残る。叩打具や叩打方法が9・10世紀の文字瓦を伴う平瓦群に共通すること、さらには、これらの平瓦が桶巻き四枚作りで製作されているのに対し、老司式は粘土紐桶巻き作りであることなどの点である。（栗原）

金属製品（第17図、図版20）

不明銅製品（1～4） 1～3はS B 4245・4250の東側柱列掘形の東に隣接する小穴から出土した。1は2点に分かれているが、本来同一の製品が折れたものであろう。径1.5mmの青銅針金で8cm前後の円形を作り、一方で短冊状の青銅製薄板を縦に半分に折り2枚重ねにして、これを径4mmの断面円形の楕状にしたうえで針金に合わせて円形を作り、針金にかぶせる構造である。さらに復原すると4箇所径1.5mmの穴を空け、断面四角形の1mm前後の細い針金で両者を固定したものと考えられる。製品の用途は不明であるが、円形の針金の片面のみに板を被せて

裝飾する構造からみて、表と裏の区別のあるものであり、何らかの製品の縁部分かと思われる。2は半円状、3は棒状の針金であるが、何れも両端部が折れている。本来1と同一の製品であった可能性がある。

4は試掘溝の埋土から出土した。青銅製で、長さ7.4cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmの断面円形で、中は空洞で管状になる。継ぎ目は認められず鑄造品と考えられる。5は円盤形の製品の一部と思われる。現状で長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmが残存するが、表面には凹凸があり歪みも見られる。鑄造時に出る銅屑である可能性もあり、製品としても不良品の部類であろう。6は銅銭で、3枚が重なって接着した状態である。風化が進んでおり、文字などは認められない。直径約2.3cm。



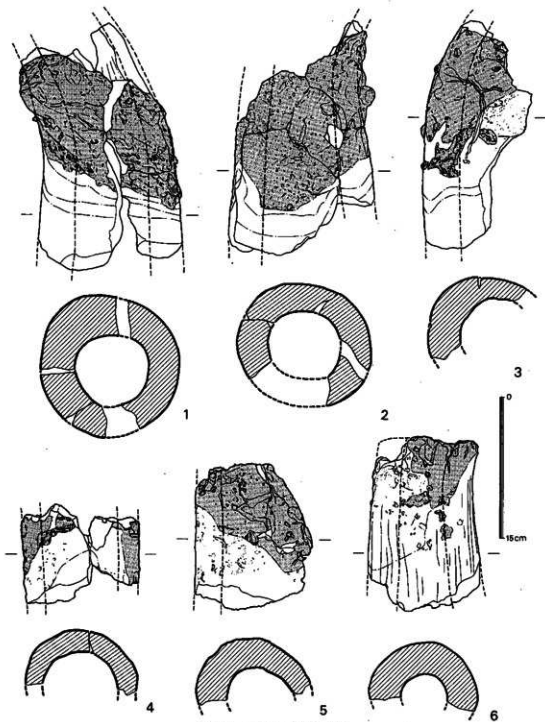
第17図 金属製品実測図

鑄造関係遺物 (第18・19図、図版20・21)

土製品

輪羽口 (1～6) 5がS X 4233出土である以外はすべてS X 4234から炉壁片・炭化物などと一緒に投棄された状態で出土した。6点とも大形の輪羽口で、1～3は先端部分が曲がった湾曲羽口である。先端の高温にさらされた部分は溶けてガラス質化しており、黒色・赤色を呈する。ガラス質化した部分は湾曲に対応して羽口の軸に対して斜めに傾いている。炉に対して斜め上方から差し込んで、先端部分が下方を向く構造と考えられる。溶けた胎土が流れた方向もこれに矛盾しない。4・5のガラス質化した部分も軸に対して斜め方向であることから、湾曲羽口である可能性が高い。1～3・6の元口方向の胎土は灰褐色を呈し本来の色と思われるが、先端のガラス質化した部分から元口に向かって灰色・白色・黄色の順で縞状に変化しており、熱によるものであろう。

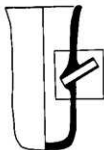
1は現存長25.5cmで、元口側の最大外径15.5cm、孔径7.8cm、先端側では器壁が薄くなり外径10.5cm、孔径6.5～8.0cm。2は最大外径15.0cm、孔径8.0cmで、先端側はやはり肉薄になる。6は元口側で外径11.5cm、孔径4.8cm、先端で外径10.0cm、孔径4.5cmとこの中では最も孔径が小



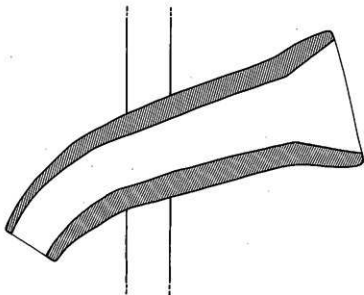
第18図 鑄造関係遺物実測図

さい。外面にはへら状の工具による調整の痕跡が残る。4は外径12.0cm、孔径8.0cm。

奈良時代の湾曲羽口は、本例のような大形品ではないが、平城京右京八条一坊十四坪及び左京三条二坊七坪に類例があり、報告者は非鉄金属（ここでは鋼）の溶解に使用された特殊な輪



溶解炉復原想定図



第19図 穂羽口装箭状状況模式図

羽口であるとしている。n2

SI4235出土石製品（第20図）

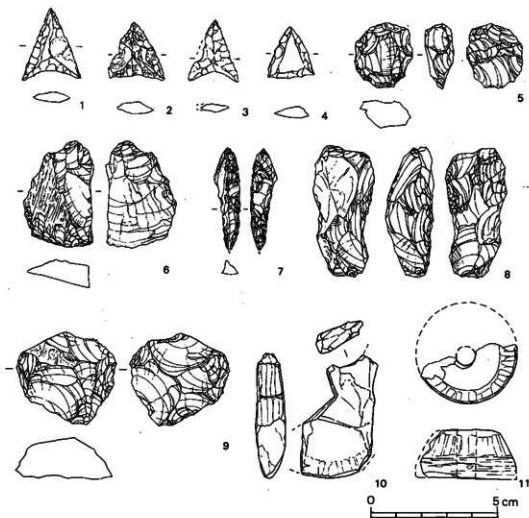
石製品

紡錘車（11） 滑石製紡錘車で約半分が欠損している。截頭円錐形と円柱形を組み合わせたような形態をしており上端で径2.6cm、下端で3.9cmで、中央に径0.8cmの孔を穿つ。上半部は工具による縦方向の整形痕がみられ、下半は同じく横方向に引っ掻き傷状に痕跡が残る。（小川）

出土石器（第20図）

第169-1次調査では、大宰府関連の遺構以外にも弥生時代の貯蔵穴群や6世紀代の住居跡など、複数期の遺構を検出した。また同時に、これらに伴うと考えられる石器・石製品も多数出土した。特に、黒曜石やサヌカイト剥片を素材とする石器が多量に出土しており、器種には石鏃、スクレイパー、ドリル、楔形石器等がある。これらの石器の大半は、貯蔵穴より出土した弥生前期の城ノ越式土器に伴うものであろう。その他、石鏃片や角錐状石器が出土している。

1～4は石鏃である。1は左右対称形で両基端がシャープである。サヌカイト製。2、3は1と同様のタイプであろう。それぞれ側縁が欠損している。4は周縁調整を行っているが、素材面を大きく残し、かつ断面が厚いことから未製品と考えられる。サヌカイト製。5は素材の周縁に刃部加工を施したラウンド・スクレイパーである。6は厚い剥片の端部に刃部加工を施したエンド・スクレイパーである。7は剥片に平坦剥離を行い、断面三角形に仕上げたドリ



第20図 石器実測図

第4表 第169—1次調査石器観察表

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	出土地点
1	石鏃	サヌカイト	2.90	2.35	0.35	1.30		RI.28 暗灰土段落
2	"	黒曜石	2.35	2.25	0.45	1.50		RN25 暗灰土下層
3	"	サヌカイト	2.45	2.00	0.30	0.70	左側端欠	RP26
4	"	"	2.05	1.85	0.50	1.60	未製品?	RQ22 上層
5	スクレイパー	黒曜石	2.55	2.25	1.20	6.50		RJ27 暗灰土
6	"	サヌカイト	4.20	2.80	1.20	14.50		RM265-41
7	ドリル	黒曜石	4.00	1.10	0.70	2.00	先端欠	
8	筒形石器	"	5.20	2.40	1.90	23.10		RI.28 暗灰土段落
9	石杖	サヌカイト	3.70	4.95	1.75	22.00		RO27 斜面礫土
10	不明石器製品	滑石	(4.90)	(2.95)	1.20	23.1		RI.27 暗褐色土上層
11	紡錘車	"		4.00	2.00		半損品	RP26 住居埋土

ルである。8は両側縁から、剥離している楔形石器である。ただ、長軸方向に「両極剥離」が認められないことから、楔として使用されなかったかもしれない。9は、剥片剥離作業が回転しながら行われている石核である。10は用途不明の滑石製品である。側縁部も面的加工されている。11は滑石製の紡錘車である。(杉原)

小 結

今回、検出した遺構は、弥生・古墳・奈良時代の各時代にわたっている。主要な遺構として、弥生時代一貯蔵穴1基、古墳時代一竪穴住居2軒、奈良時代一掘立柱建物2棟・礎石建物1棟である。

政庁周辺の地域では、溝や整地層から弥生・古墳時代の遺物が検出されることは珍しいことではないが、直接に生活遺構を検出したのは初例である。今回は、遺構確認で終わったが、丘陵頂部でも多数の貯蔵穴を検出したこと、また、平成6年度に実施した第160次調査では、多量の弥生・古墳時代の遺物が出土したことなどを考慮すると、弥生～古墳時代にかけてこの丘陵一帯が当時の生活の場であったことを示している。

弥生時代については、出土遺物により前期末～中期初頭が主体となる時期と言える。今回、検出されたのは貯蔵穴のみであり、同時期の住居跡は検出できなかった。検出した貯蔵穴は遺存状態からみると後世に削平されており、住居跡も削平された可能性が高く、この丘陵の何れかに存在する可能性は十分考えられる。古墳時代では竪穴住居2軒を検出した。出土遺物により6世紀中～後半の時期が考えられる。検出した住居は近接しており、また方位が異なっていることから同時期に併存したのではなく、時期差が考えられる。この様に、大宰府が設置される以前に、この地域が居住地域として良好な場所であったことは、前述の遺構群から推察することが可能である。掘立柱建物SB4245・4250と礎石建物SB4255については、時期の決めてとなる出土遺物に乏しいが、8世紀前半～中頃と推定される。以下、奈良時代の遺構である掘立柱建物と礎石建物について検討してみたい。

掘立柱建物SB4245・4250、礎石建物4255

2棟の掘立柱建物は同位置に重複しており、後出する建物は方位を約5°25'東偏させているものの建物全体の規模には大きな違いはみられない。このことは、この新旧2時期の建物は同じ性格・機能をもった建物であったと考えられる。古い方の建物SB4245と礎石建物SB4255は東側柱筋を揃え建物の軸線も同方位をとることから、同時期に併存していたことはほぼ確実と言える。総柱の礎石建物を倉庫とするならば、倉庫と掘立柱建物の2棟が丘陵中段に存在していたということになる。

礎石を有する建物は政庁周辺では、これまでに3棟(政庁を除く)が確認されているだけで

ある。また、礎石の倉庫は蔵司地区で2棟存在するのみである。礎石は後世に抜き取られる場合が多く、その痕跡も失われることもあり、現在確認されている礎石建物だけではないであろうが、何れにしても今回の検出例は非常に貴重なものである。このことを重視するならば、当地が倉庫を付設した役所の性格をもったものと想定される。そこで、注目されるのは、この蔵司西・米木地区において過去に調査した第19・159・160次調査において多数の鑄造遺構を検出していることである。この鑄造遺構については、第19次調査で保土穴を検出し、第159次では長方形の竪穴状遺構を検出し、鞆羽口・トリベ・銅滓などの多量の鑄造関連の遺物が出土しており、工場の存在を示す状況がみられる。これらの調査結果と今回の地域を含めるとかなりの広さで、この丘陵部一帯が鑄造に関する地域であったことが知られる。即ち、ここに大宰府における一大鑄造工場が存在していたことが窺われる。

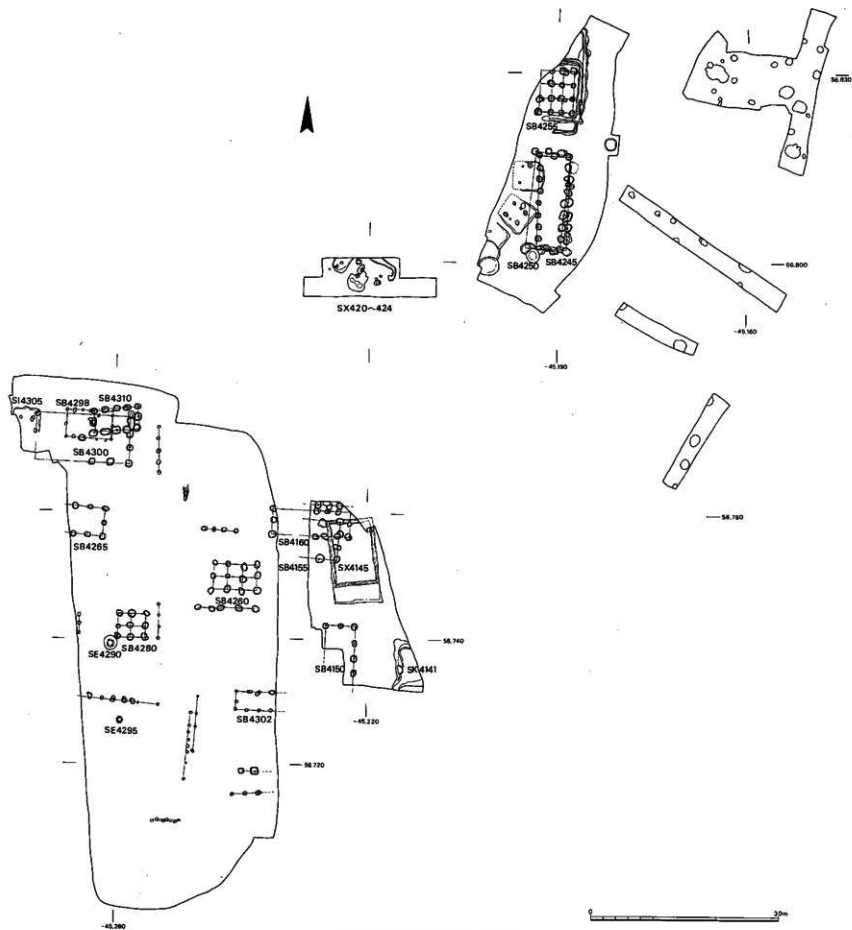
蔵司地区の倉庫群は西海道の各地より徴税された物品を収納するのが目的であり、それを管理していくことは大宰府の重要な任務であった。即ち、倉庫は保管施設として欠くことのできないものであった。今回、検出した倉庫は蔵司地区とは谷を一つ隔てた丘陵に位置し、現状の地形からみて蔵司地区とは別の性格を有するものと判断される。前記したように、ここが大鑄造工場であったことから、その製品を収納する施設、所謂倉庫が必要であったことは推察できる。倉庫(SB4255)と掘立柱建物(SB4245・4250)が同時期に併存していたことは、建物の方位と出土遺物の状況からみて間違いないであろう。そして、倉庫と掘立柱建物は製品の収納施設とその管理棟としての性格をもったものとするにはできないであろうか。

これまで、鑄造関連の工場遺構は政庁跡や蔵司地区で発見されているが、それらとは異なった状況がみられる。それは、蔵司西地区のような広範囲には及んでいないこと、さらに、年代的に7世紀末～9世紀初め頃まで継続して営まれているとみられること、また、出土した鞆羽口やトリベがこれまで大宰府周辺から出土していない大型でかつ特異な形態であること、そして、今回出土した鞆羽口から非鉄金属の溶解に使用された可能性が考えられることなど、大宰府の官営工場の存在を裏付けるのに十分な資料と言える。この地域については、一部を残し調査がほぼ終了しており、検出した建物跡も総数で12棟であり、時期差もあろうが、一つないしは複数の官舎が存在していたものと推定される。大宰府には匠司・修理器仗所などの鑄造工場をもったと考えられる役所が存在したことは文献上で知られており、この地域がそれらと何らかの関係があったとすることは否定できないであろう。

来年度には残された部分の調査を行う予定であり、今回は時間的に細かい分析ができなかったが、今後、鉄滓・銅滓などの科学的分析を行い、さらに検討を加えたい。(横田)

註1 石松好雄・高橋 章「大宰府出土の瓦について(二)」『九州歴史資料館研究論集』4 1978

註2 奈良国立文化財研究所「平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査概報」1989



第21图 来木地区主要遺構配置図

2. 第175次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の発掘調査として実施された。当調査区は第166次調査地の西側隣接地であり、大宰府政庁南門跡から西方約500mの距離に位置している。北東側には、四王寺山より舌状に派生して一部旧地形を残している米木丘陵があり、南側では条坊内を横断する御笠川が南東から北西に向きを変えて流れている。遺跡はちょうど丘登端部から、御笠川に向かって地形が落ちていく場所に立地し、調査区内に広く流砂が認められることから水の影響を受けやすい場所であったと考えられる。

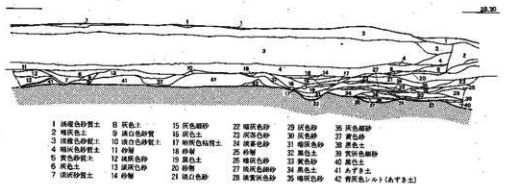
周辺では、第96次調査をはじめ、第142次、第157次、第165次、第166次調査が行われている。この地域は過去の調査から官人居住区に推定されていた場所であり、第96次調査では官人居宅の可能性が考えられる8世紀代的大型建物や平行する溝が、第166次調査では倉庫様建物がそれぞれ検出されている。そして、現在までのところ広九地区官人居住域西限は、西端で確認されたSB4200付近に求められている。

調査地の地番は太宰府市観世音寺355-5番地で調査面積は580㎡である。調査は平成8年7月9日より開始した。8日までに重機による調査区内の表土の除去作業を終え、東側から人力による遺構確認・検出作業を行った。その結果、SB4340の掘立柱建物をはじめ、土壌、溝等を検出した。また、遺構実測作業については検出作業と併行して行った。途中大雨に見舞われ幾度か調査は中断した。8月21日には空中写真撮影を行い、その後SB4340の柱穴の断ち割りを行った。8月31日には実測の一部と器材撤収を終えて調査を終了した。

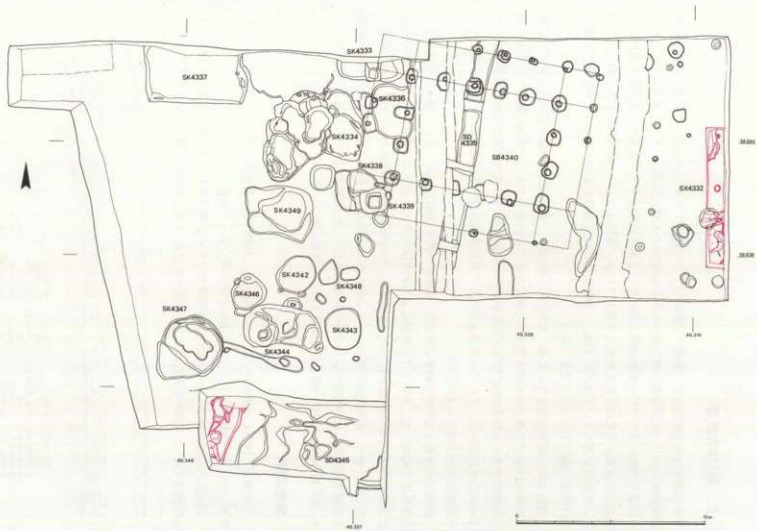
検出遺構

本次調査で検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土壌12基、溝2条等であり、ほぼ中央付近に密集している。西側にいくにつれて遺構密度は薄くなっている。

調査区内の基本層序については、調査区東壁において観察をおこなった。1層は、現在の生活整地層である。2層は暗灰色土でやや粘性をおびる。3層は淡橙色砂質土のいわゆる“マサ土”



第22図 調査区東壁土層図



第23圖 第175次調査遺構配置図

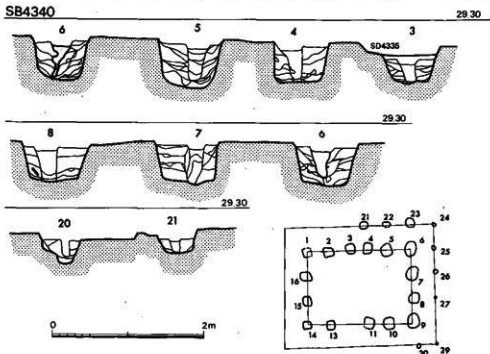
で、嵩上げ層である。4層は暗灰色砂質土で旧耕作土。5層は黄色砂質土で床土である。6～9層、14～19層はそれぞれ溝の堆積層である。両側の21層以下は古い時期の自然流路の堆積層である。また、本遺跡では、遺構は5層最下面と接する層の最上面で確認される。この5層下の層は単一層ではなく幾つもの層があるが、これは5層堆積以前にその下層が削平を受けていることによる。よって、遺跡内には遺構に共時する整地層が純粹に残っているわけではなく、検出遺構もその上部は大きく削られている。

孤立柱建物跡

SB4340 調査区の中央北隅で5間×7間の東西棟の建物を検出した。3間×5間の身舎の周囲に廂を取り付けた四面廂の建物である。身舎の桁行、梁行の柱間総距離7.992mと、5.55mで、主軸はG.N.に対して9°05'東にふれている。単位尺を求めるならば0.296m前後となる。そして、身舎桁行北側における柱間距離を計測すると中央3間が1.48m(5尺)、両脇間が1.776m(6尺)となり、等間にはならない。また、東側梁行については身舎・廂とも1.85m(6.25尺)等間で、桁行の廂の柱間についても1.85m(6.25尺)である。柱の深さは0.3～0.5m位であり、規模は小さい。また、柱痕には焼土が入っているものが複数あり、焼失した可能性がある。

溝

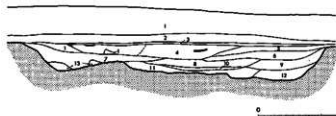
SD4335 調査区の中央付近で検出した南北方向の溝である。SB4340を切っている。溝の横断



第24図 SB4340柱掘形断面図

SD4345

28.20



- 1 マゼ土
- 2 粘黄土
- 3 床土
- 4 褐色砂質土
- 5 黄褐色砂
- 6 緑灰色砂
- 7 暗灰色粗砂
- 8 6より灰多し
- 9 暗褐色シルト
- 10 灰色砂
- 11 暗緑灰色砂
- 12 灰白色粗砂
- 13 灰色粗砂

第25図 SD4345土層図

面はU字状を呈しており、溝幅1.0m、深さ0.2mで南北に走っている。

SD4345 調査区の南端で検出した東西方向の溝である。溝幅5.0mで、遺構確認面からの深さは最も深いところで0.6mを測り、横断面は長い逆台形状を呈している。今回は約10m分を検出した。遺物は4層を中心に出土している。土器や瓦が、多量の炭化物と混在した状態であり、自然に堆積したものではなく、一時期に一括投棄されたと考えられる。全体に窪地に遺物を捨て捨てた状態である。下層の11層においてようやく、水の影響を受けたと考えられる層を確認した。さらに下層では古い時期の流路を確認しており、溝幅約1.0m、最深0.3mである。このような状況を周辺の遺構で関連を求めれば、SB4340が挙げられる。同建物は柱の部分において焼土があり、火の影響が考えられた。このことと、炭化物と混在した遺物が出土した本遺構は現時点において何かしらの関連を求めることができるだろう。また、この溝の広がりを確認するため調査区の東側で重機によるトレンチを入れたが広がりは確認されなかった。このことは、本遺構が溝として本格的な流水機能を持つものではないことを示している。出土遺物より、8世紀後半代に溝は埋められたと考えられる。

土壌

SK4333 調査区中央北端で検出した不整形の土壌で、一部は調査区外に広がっている。長軸3.5m、深さ0.4mを測り、埋土は灰色砂質土で炭化物を多く含んでいる。床面下よりSB4340の柱穴が検出されている。おそらく採土遺構であろう。

SK4334 調査区中央のやや西側において検出した。遺構確認時は暗灰色の埋土が流砂に覆われた状態でプランは不明瞭であった。埋土は暗灰色の粘黄土と砂質土が互層に堆積していた。検出した遺構は不整形の土壌が幾つも切り合う状況でそれぞれの側壁は深く掘込まれており、プランに規則性は認められない。また、遺構はあずき色の土を掘抜く様な状況であり、この土の採取が目的であったのだろう。遺構確認面からの深さは、0.6～0.7mである。この様な遺構は、第156次調査で確認されたSX4115と似た様な状況であり、この遺構も採土遺構と考えられよう。ただ、今回の調査では鋤痕を確認するまでには至らなかった。

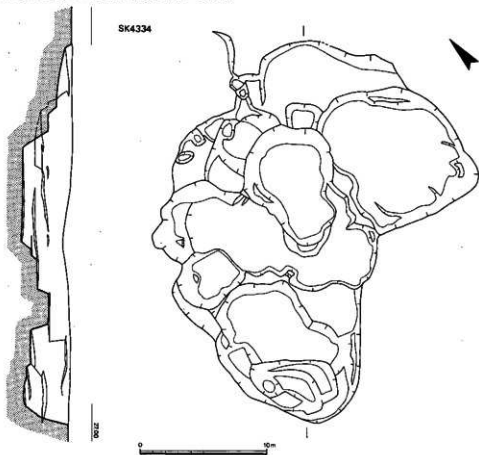
SK4336 調査区中央北より付近で検出した。長軸3.0m、深さ0.2mの隅丸方形を呈している。東側は排水管の埋設時に破壊されており、西側ではSB4340の柱穴を切っている。床面プランがフラットなことから、採土遺構とは考えにくい。

SK4337 調査区西の北端付近で検出した。灰色土のプランにトレンチを設定した。南北のプランは結果的にトレンチ状に残したが、東西においてはそれぞれ、壁の立ち上がりが検出できた。東西長軸は5.4m、深さ0.45mを測る。底では青灰色粘土層が一部掘られた状態で露出しており、上層のあずき色粘土を採取している。また、東側の底では床面が不整形のテラス状に掘り残されている。

SK4338 調査区中央で検出した。長軸2.2m、深さ0.52mを測る不整形の土塙である。西側においては浅いテラス状の掘込みがある。SK4339に切られている。

SK4339 調査区中央で検出した。長軸1.41m、短軸1.05m、深さ0.6mを測る。主軸をほぼ東西にとり、平面プランは隅丸方形を呈している。SK4333を切っている。以上のことから、墓の可能性が考えられる。

SK4342 調査区中央南よりで検出した。長軸2.2mを測るが、深さ0.1mと浅く、横断面はレンズ状を呈している窪み程度のものである。



第28図 SK4334実測図

SK4343 調査区中央南側で検出した。長軸2.2m、短軸1.95m、深さ0.1mと浅い。SK4342と似た状況である。

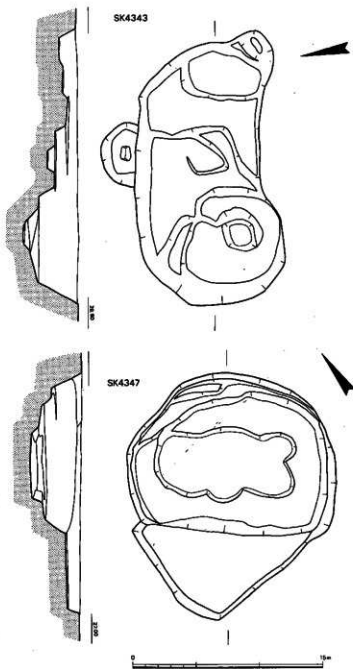
SK4344 調査区中央南側で検出した。南北に長く、長胴形を呈しており、床面はテラス状の段が2段つく。長軸4.5m、短軸2.0mを測り、最も深い西側のところで0.9mを測る。

SK4346 調査区中央南側で検出した。長軸2.3m、短軸1.85m、深さ0.27mを測り南北にやや長い楕円形を呈している。横断形はややサラダボール状を呈している。

SK4347 調査区中央西側で検出した。長軸3.9m、短軸3.4m、深さ0.72mを測り、やや南北に長い楕円形を呈している。サラダボール状に掘込まれている。上層においては、埋土は砂質土であり、下層においては炭化物を含む灰色の粘質土であった。遺物は埋土中より万遍なく出土し、一括投棄の状況とは違う。

SK4348 SK4344に切られている。長軸1.0mを測るが、深さは0.3mでビット状を呈している。

その他の遺構



第27図 SK4344・4347実測図

SX4332 調査区東端付近において遺構確認時に認められた楕円状プランの遺構検出を行ったところ、下層よりはば南北に走る自然流路を検出した。確認面での溝の幅は0.7m、深さ0.3mであり、横断面は鈍いV字状を呈している。また、基本層序の確認とこの流路の土層図作成のため東壁をひっかけて7.2×1.0mのトレンチを設定した。その結果、自然流路は一時期ではないこと、流路に関係する段落ちがあることと自然木等をそれぞれ確認した。また、流路の最下層は腐食の進んだ黒色土であり、段落ち部分にも同層が認められた。この流路がSB4345西の溝底で確認された流路につながるのかもしれない。

出土遺物

SB4340楕形出土土器 (第28図、図版22)

須恵器

蓋(1) 身舎柱穴4の柱痕より出土した破片で、撮を欠損する。復原口径は19.6cmを測る。口縁部はヨコナデ調整。

SD4335出土土器 (第28図、図版22・34)

須恵器

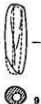
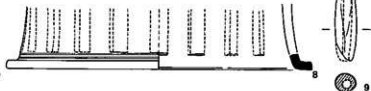
蓋(2・3) 2は復原資料で撮を欠損する。調整は天井部回転ヘラ切り未調整。口縁部ナデ調整。3の撮は内窪みである。天井部はヘラ切り調整。

杯(4～6) いずれも高台付の杯身で、体部と底部の境は明瞭である。4の口縁部内外面、

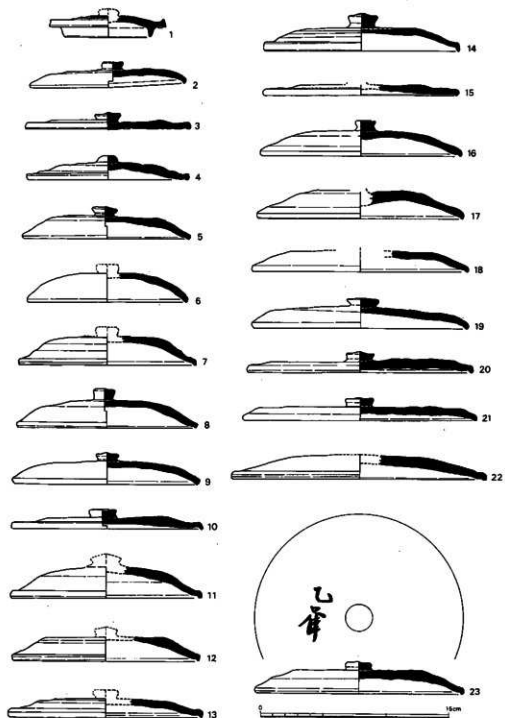
SB4340



SD4335



第28図 SB4340、SD4335出土土器実測図



第29图 SD4345出土土器突刺图(1)

底部外面はヨコナデ調整。6・7の底部調整はナデによる。

皿(7) 底部はやや内湾する。底部外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整。

硯

円面硯(8) 長方形透かしを有する円面硯の脚部片である。脚幅を外方向に大きく引きだしている。透かしは23個に復元される。

土製品

土鉢(9) 紡錘形で中央に0.7cmの孔を穿っている。長さ5.5cm、径1.7cmを測る。

SD4345出土土器(第29~42図、図版22~29、33・34)

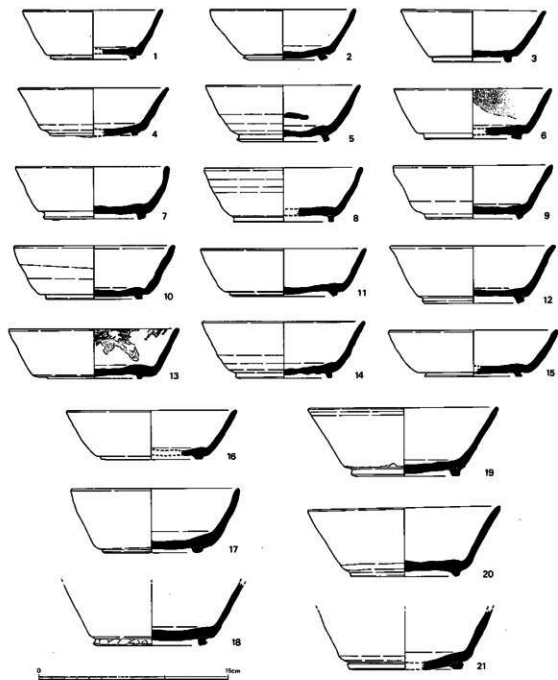
須恵器(第29~35図)

壺蓋(1) 復原口径6.7cm。撮り欠損する。杯蓋と同様の器種をつくり、内天井部に長めの返りを垂下させたもの。調整は全てヨコナデを施す。外天井部に墨痕が付着する。

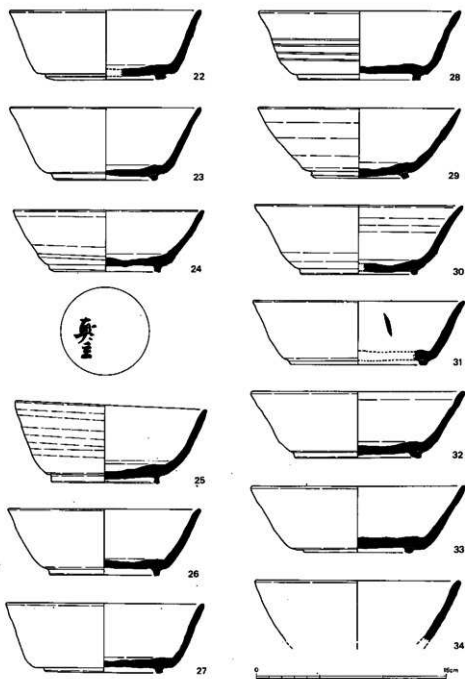
蓋(2~23) 口径12.2~20.0cm。口径による器種の分化が窺える。器形と調整から数種に分類が可能である。天井部が高く体部との境が明瞭なものに5・7・8・12・14・17・23がある。天井部から口端部まで水平に近いほど器高の低い3・10・15・20・21があり、この他は天井部が2cm程の高さとなっている。口端部は長く折返しした14や退化して痕跡程度に突出した6・17がある。この他は短く突出し内面に稜を巡らせたものが大勢を占めている。調整は外天井部に回転ヘラケズリを施したものに6・8・14がある。ヘラ切り後にヨコナデ調整を施したものに2・5・7・9~12・15~23があり、この他はヘラ切り未調整のままである。23の外天井部には「乙□」の人名と思われる墨書がある。出土したこれらの蓋は4~10・15・16・18~21の内天井部は良く摺れまた墨痕を有するなど高い確率で硯に転用されている。また、22の口縁部には煤が付着している。

高台付杯(1~39) 口径11.0~18.7cm。蓋と同様に法量による器種の分化が認められる。体部が直線的に開き口端部がその延長で収束するものが最も多い。高台は外底部の周縁からやや内側に短く貼付したものが多く、また、底部と体部の境は丸味を帯びている。外底部の調整は回転ヘラケズリを施す古い技法を有すものに13・28があり、多くはナデを施し、9・14・15・18・22・26・27はヘラ切離しのままである。24には「真主」、39は「十」の墨書が外底部に認められる。38はその一部が残存するだけで判読できない。31の体部内面には墨痕がある。この他の特徴的なものには6と13には油煙が付着。灯火器として使用されている。また、5の内面には漆が付着する。

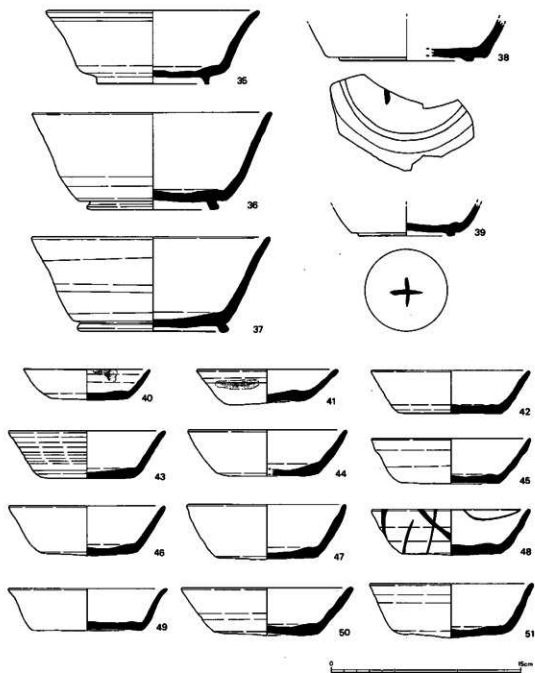
杯(40~61) 口径10.0~14.2cm。高台を有するものに比べて比較的口径が小さい傾向にある。器形は平底から体部がほぼ直線的に開くものである。底部と体部の境は54・55を除いて僅かに丸味を帯びる。外底部の調整はヘラ切り後にナデを施した40~42・48・49・51・52・58、その他はヘラ切離しのままである。なお外底部の板状圧痕(土器を置いた板の木目が内底部に



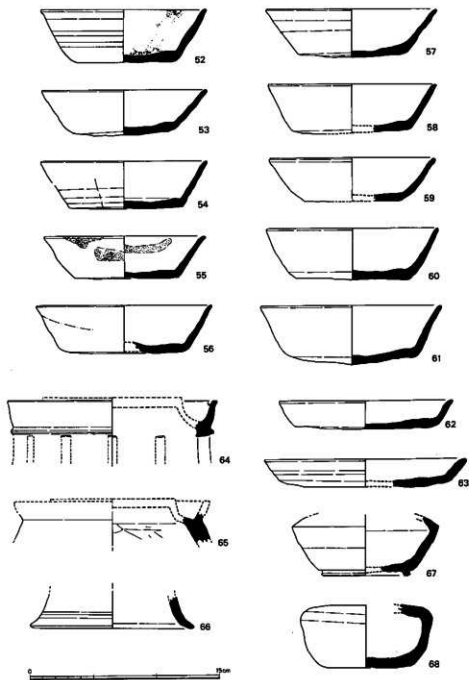
第30图 SD4345出土土器实测图(2)



第31图 SD4345出土土器实测图(3)



第32图 SD4345出土土器实测图(4)



第33图 SD4345出土土器实测图(5)

強いナデを施す際に転写されたもの)は明瞭なものと認められないものが混じっている。この他48は体部の内外面に54は外面に火押が窺える。4・41・52・55には体部に煤が付着する。また、43・44・58の内底部はよく研磨されており硯に転用されていた可能性もある。

皿(62・63) 口径13.8・16.0cm。ともに体部の立上りは通常のものに比べて直立気味である。外底部は62がナデ、63はへら切離しのままである。62の内底部は平滑になされており転用硯の可能性もある。

円面硯(64~66) 64は長方形透かしを有する円面硯の外境部片である。透かしは13個に復原できる。65は海部片で外面ナデ、内面削り。66は脚端部で少し屈曲する。ヨコナデで調整。

長頸壺(67・68) 67は肩部は鋭く張る。高台端部は外側に跳ねる。体部下位は回転ケズリ調整。68は器面の磨滅が著しい。外底面は回転ケズリ。

壺(1~6) 1・3は長頸壺である。1は頸部から底部にかけての破片である。外面体部下位から底部にかけては回転ヘラケズリ調整している。内面体部下位では円弧のあて具痕が残る。2はほぼ完形で復原された。底面は径3.0cmにわたって穿孔されている。肩部の張りは弱い。体部外面下位が回転ヘラケズリ、内面ヨコナデで調整。底面については回転ヘラケズリ。また底面穿孔は、内面より外面に向かって行っている。口径は4.2cmで、復原底径は8.6cmである。2・4・5は短頸壺である。2は頸部を欠損し、高台部が剥離している。肩部の張りは弱く、外底面は回転ヘラケズリ。4はほぼ完形で底面は球状を呈している。外面体部は叩きのちナデ、底部は手持ちケズリのちナデ調整。内面の体部では円弧叩きあり。5は復原口径18.2cmを測る。外面体部下位、底部については回転ヘラケズリ。6は把手付壺の把手で指ナデで調整。

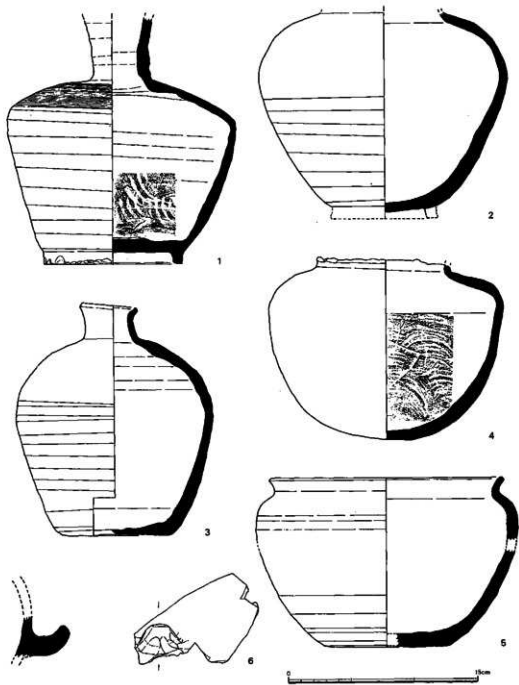
甕(7~11) 7は小型品で復原径13.8cm。口縁部下にわずかに削り出しの突帯が残る。8は、口縁部から胴部片で、復原口径は16.4cmである。外面には格子叩き、内面には頸部に指押さえ、体部に円弧の当て具痕。9も同様の調整。10の口縁端部下の突帯は外に折れる。

土師器(第36~40図)

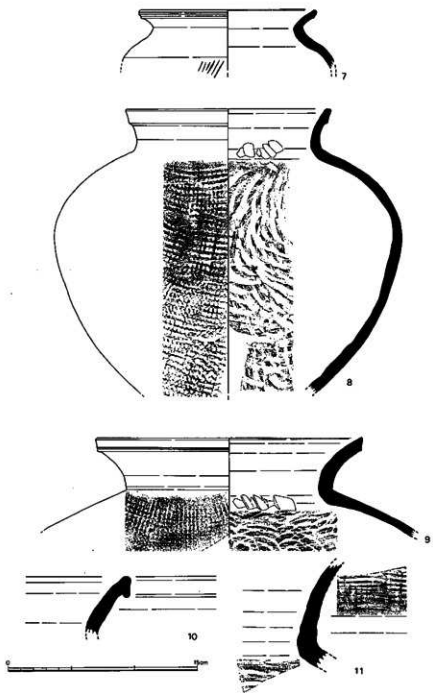
蓋(1~4) 口径15.1~18.5cm。中型の碗形態に伴うもの。須恵器蓋の器形を模倣したものである。口端部の返りは短く突出する。外天井部は1・3・4が回転ヘラケズリ、2はへら切り後にナデを施す。4は内外面にロクロによるへら研磨を密に施す。

高台付杯(5~7) 高台径7.0~12.1cm。碗と呼ぶべき器種である。高台は外底部の周縁付近に貼付される。5は外底部にナデ、6・7は体部下半から外底部にかけて回転ヘラケズリを施す。5は体部の内外面にへら研磨を加えて器面を飾る。

杯(8~36) 口径10.8~18.4cm。大宰府の食膳形態を特徴づける杯Cの出土が最も多い。これは湾曲して大きく開く体部に平底の底部を備えるもので、体部下半から外底部に回転ヘラケズリを施したもの。回転へら研磨を密に施すのも特徴であるが、時期が下るとその研磨は粗くなり、中には研磨が省略されるものもある。また、器面には橙褐色のスリップを施す。12~31



第34图 SD4345出土土器实测图(6)



第35图 SD4345出土土器实测图(7)

がこの杯Cに該当する。ただし、器高/口径の指数からすると23に代表されるように皿と呼ぶべきものも含まれている。30・31は内面に漆の被膜が残されており、漆芸の容器に利用されている。

その他には、まず8・9・11のように体部が直線的あるいは上半で僅かに屈曲するものがある。8は外底部に手持ヘラケズリを施す古相のものである。9・11は外底部がヘラ切離しのまま。10は杯Cに近い器形をなしているものの、器内が厚く口縁部で僅かに屈曲する。32～35は古墳時代土師器の系譜を色濃く残したものの、外底部は手持ヘラケズリを施し、体部は僅かに丸味を帯びている。このうち32は口縁部の内面を強いヨコナデで面取りした特異なものである。33の外面には条線が走る。36は口縁部が内側に突出したもので畿内系統のものか。体部下半に回転ヘラケズリ、上半に指圧痕が認められる。内面には漆の被膜が残されている。

皿(38～40) 口径は38が18.9cm、39は19.2cm。38は体部と底部の境を削って面取りする。磨滅し調整には不明なところが多い。39・40は体部が僅かに丸味を帯びたもの。外底部に回転ヘラケズリ、それ以外にヨコナデを施し、体部外面に回転ヘラミガキが残存する。内底部は器面が磨滅している。40の外底部には墨書が残されるが判読するまでにいたらない。

壺(37) 小型の薬壺と思われるもの。外底部にヘラケズリ、体部にヨコナデを施す。内面に漆の被膜が残される。

壺(1・6) 1は壺の頸部から端部へわずかに屈曲し外反する。復原口径は10.8cmを測る。6は復原口径12.8cmを測り、内面はハケ目調整。

脚(2) 外面調整はシボリ後ナデ調整、内面にはシボリ痕が残る。器高13.6cmを測る。

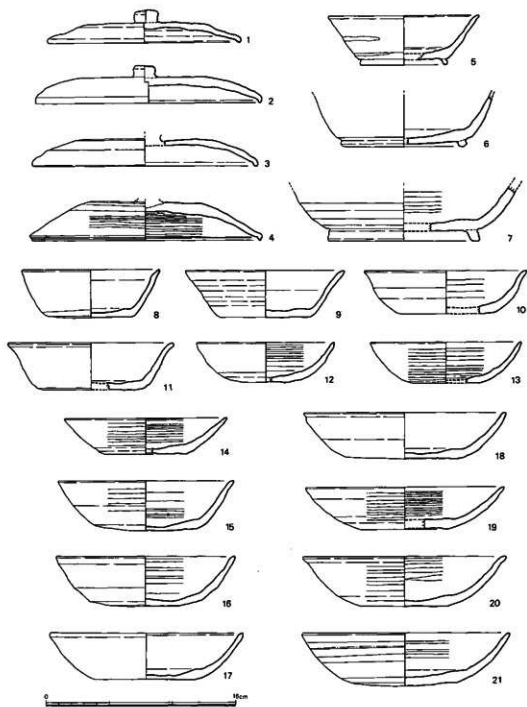
椀(3) 口縁端部へは大きく外反し、端部は内面に折れる。内外面ともに回転ミガキ調整。

鉢(4) 外面の調整はケズリ後、横ナデ調整。内面は磨滅し調整不明。外底面にはケズリを残す。

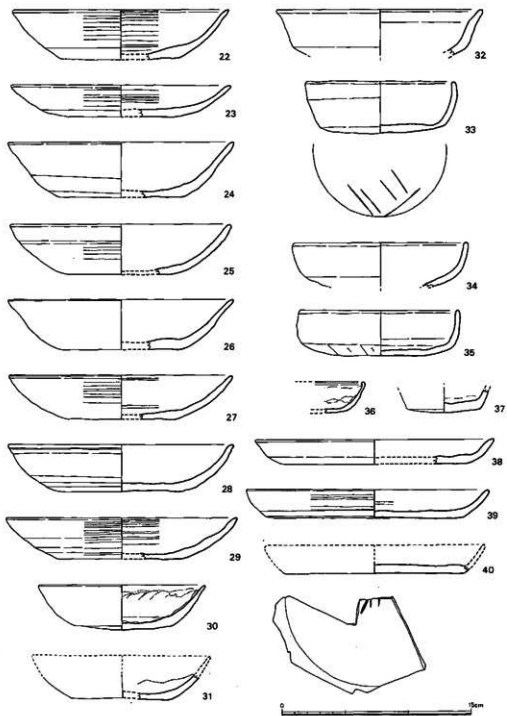
甕(5・7～26) 5～16は口径15.0～18.0cmで小型品、17～21は19.0～22.0cmで中型品、22～26は26.0～40.0cmの大型品になり三種類に分けられる。また、口縁端部が肥厚し内面頸部付近には削りによる稜が残るもの(8～14・22・24)、頸部から口縁端部へ緩やかな屈曲を持って直立気味に立ち上がるもの(17～19)がそれぞれある。大型品は概して頸部が大きく折れる。調整については、外面胴部にハケメ、頸部内面以下にケズリを残し、口縁部は内外面ともにナデ調整で仕上げられるものがほとんどである。唯一底部の破片である7は外底部ヘラケズリで体部にはハケメを施している。

把手(27～29) 27・28の小型品と28の大型品とに別れる。面取りのちナデ調整。

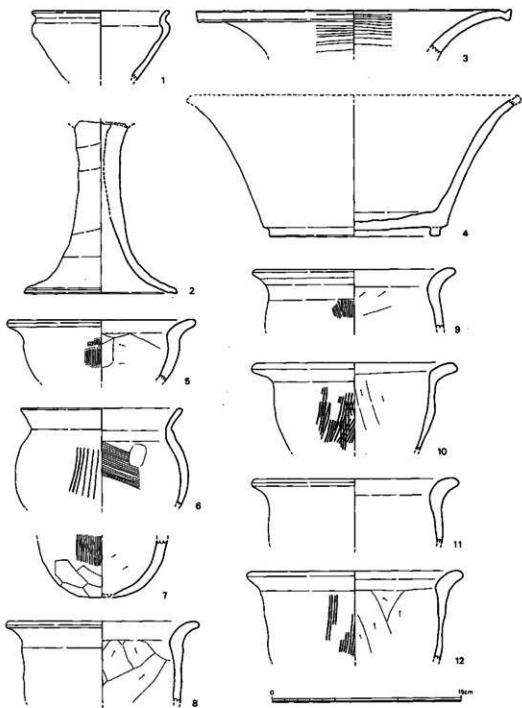
製塩土器(1～16) 1・2は「玄界灘式土器」で外面に煤が付着している。外面縦格子タタキ、内面には、弧状のタタキがある。3～5は円筒形に復原される。3・5の内面は布目圧痕が認められる。4の内面は削り調整。6～14は逆円錐形を呈している。6～8が底部から直



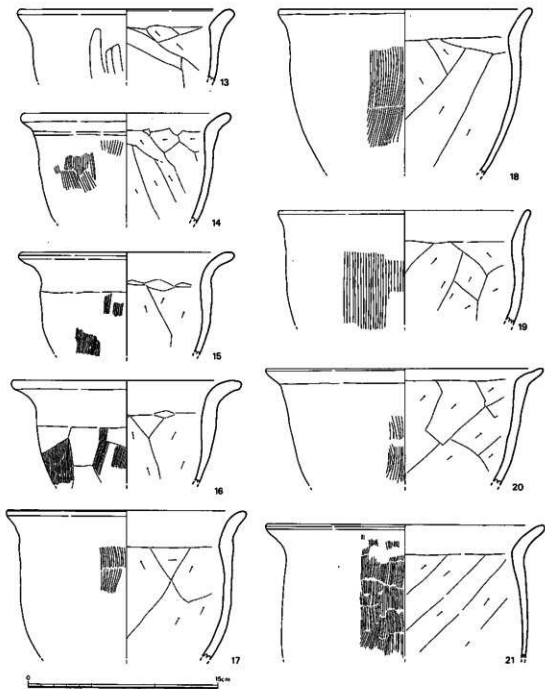
第36图 SD4345出土土器实测图(8)



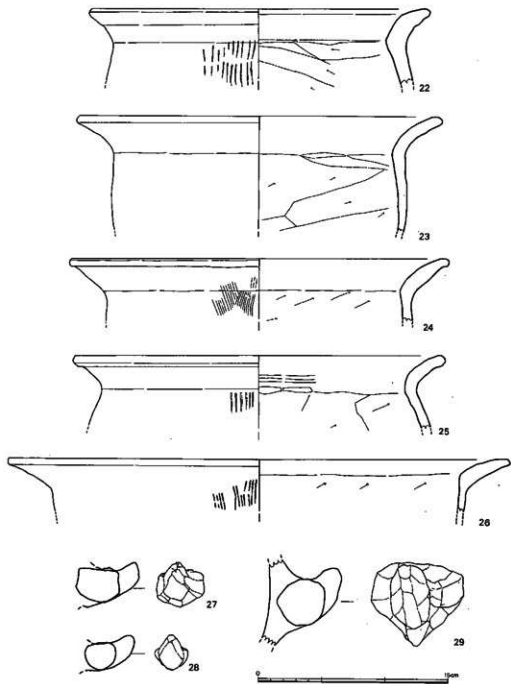
第37图 SD4345出土土器实测图(9)



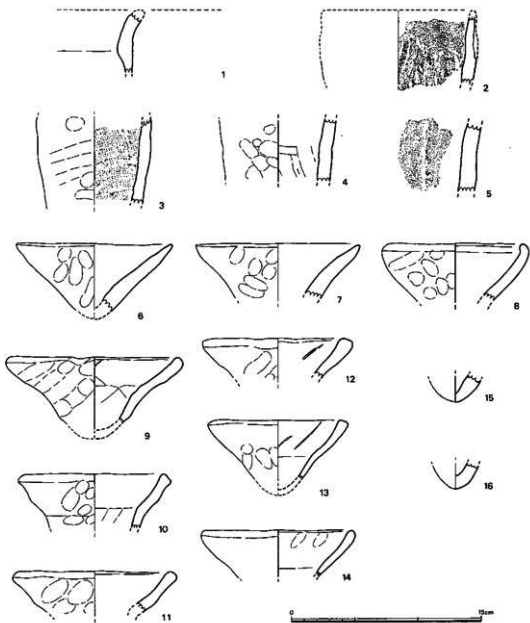
第38图 SD4345出土土器突测图(10)



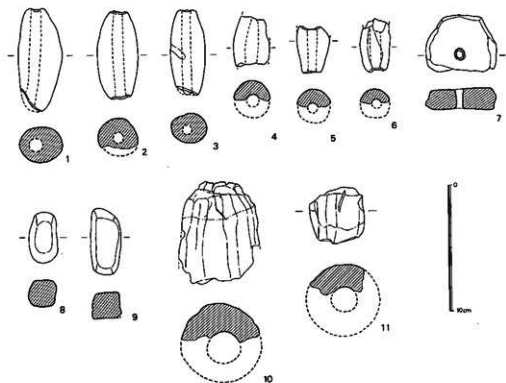
第39图 SD4345出土土器実測图(11)



第48图 SD4345出土土器实测图(12)



第41圖 SD4345出土製塩土器実測圖



第42図 SD4345出土土製品実測図

線的に開くのに対し、9～14は、体部中位で一旦屈曲する。6～14の外表面は熱を受けており、器面が荒れている。

土製品 (第42図、図版34)

土鍾(1～6) 1～6は大型の土鍾である。長さは最大のもので7.0cmを測り、径は2.4～3.5cmの間にある。孔は0.9cm前後である。

円盤形土製品(7) 瓦を転用し、径は6.5cm、厚さ1.6cm前後で0.8cm位の孔を開けている。

不明土製品(8・9) 8・9は瓦を転用した、やや長胴気味の土製品で全面を研磨している。

轆羽口(10・11) 10・11は轆羽口である。10は先端部付近の破片である。ガラス状の溶解物が付着し硬化している。もともと焼成は軟質で、胎土に石英粒子を多量に含んでいる。

SK4333出土土器 (第43図)

土師器

椀(1) 高台は厚く、「ハ」の字に開いている。内面に灯じみ痕あり。

SK4334出土土器 (第43図、図版29・30)

須恵器

蓋 (2・3) 2の天井部外面は回転へう削り調整。内面はナデ調整。3の天井部は丸く、内外面ともにナデ調整。

土師器

碗 (4～9) 4は口径12.4cm、器高4.8cm、底径7.1cmを測る。高台はやや「ハ」字状に開き、端部は外へ反る。5の口径は12.6cmを測り、体部から端部へは直線的に立ち上がる。7の高台は真直ぐ下に伸びる。9の高台は厚く、外底面には板状圧痕がある。

杯 (10) 口縁部と底部が直接つながらないが、同一器体と考えられる。外底面はナデ調整。

皿 (11・12) 11の復原径は9.4cmを測る。12は高台杯で「ハ」字形に開き、内外面ともナデ調整。高台径は6.4cmを測る。

甕 (13) 口縁は端部付近で外反する。復原口径は26.2cmを測る。

緑釉陶器

碗 (15) 器厚は薄く、釉は淡灰緑色をである。胎土は精良で須恵質。

水注 (16) 口縁はわずかに肥厚し、ラッパ状に開く。

灰釉陶器

碗 (14) 口縁は直線的に立ち上がっている。器厚は薄く焼成は堅緻。

SK4336出土土器 (第43図、図版29・30)

須恵器

蓋 (17) 縁を欠損し、天井部はほぼ平らである。復原口径15.6cmを測る。

土師器

碗 (18～20) 18～20は「ハ」字に開く高台付の碗である。18の高台は高さ1.6cm。

緑釉陶器

水注 (21) 21は口縁部付近の破片で復原口径8.8cmを測る。把手部を欠損している。

灰釉陶器

水注 (22) 22は把手部の付け根付近の破片。

SK4337出土土器 (第43図)

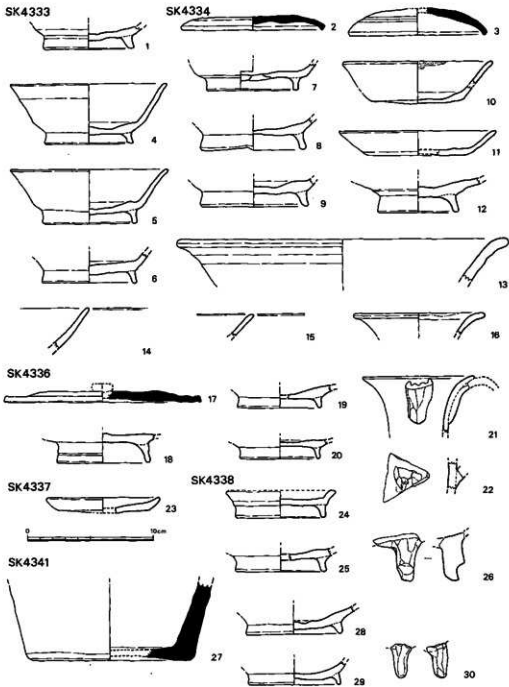
土師器

皿 (23) 復原口径9.0cm、高さ1.3cmを測る。体部はヨコナデ。

SK4338出土土器 (第43図)

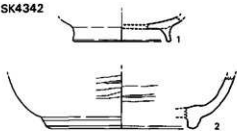
土師器

碗 (24・25) 24・25の高台は「ハ」字に開く。24は体部のない、碗の破片の内面を摩っている。

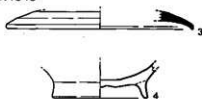


第43图 SK4333·4334·4336·4337·4338·4341出土土器·陶磁器实测图

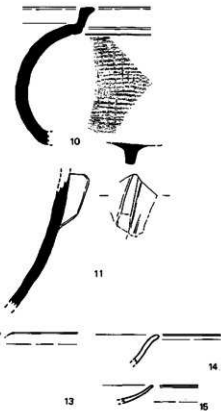
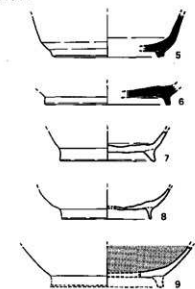
SK4342



SK4343



SK4344



SK4346



第44图 SK4342·4343·4344·4346出土土器·陶磁器实测图

脚付鉢 (26) ヘラケズリによる面取りを行っている。土師質である。

SK4341出土土器 (第43図)

須恵器

壺 (27) 体部は内外面ともに回転ナデ調整、底面は手持ちヘラケズリ。底径13.0cmを測る。

土師器

碗 (28・29) 高台が「ハ」字に開く碗の破片で、28の外底面には工具痕が、29には板状圧痕が確認される。

脚付鉢 (30) ヘラケズリによる面取りを行っている。

SK4342出土土器 (第44図)

土師器

碗 (1) 高台はやや「ハ」字に開く。底径7.8cm。

壺 (2) 内外面ともに横方向のミガキによる調整で底径12.0cmを測る。

SK4343出土遺物 (第44図)

須恵器

壺 (3) 天井部はやや丸く、回転削りによる調整。

土師器 (4) 高台付の碗で外底面には板状圧痕がある。

SK4344出土遺物 (第44図、図版29・30)

須恵器

杯 (5・6) 5は高台付杯だが体部との境は不明瞭となっている。6の高台は「ハ」字に開く。

甕 (10・11) 10の頸部は大きく湾曲する。11は耳状の把手がつく。

土師器

碗 (7・8) 7の高台はやや厚く「ハ」字に開く。8は細い高台が直立して取りつく。

黒色土器

碗 (9) 外面は横方向のナデ、内面はミガキによる調整。高台は剥離している。

硯

円面硯 (12) 長方形透かしを持ち、脚裾は外反する。端部ヨコナデ調整。

緑釉陶器

皿 (15) 口縁が大きく外反することから皿と考えられる。胎土は緻密。

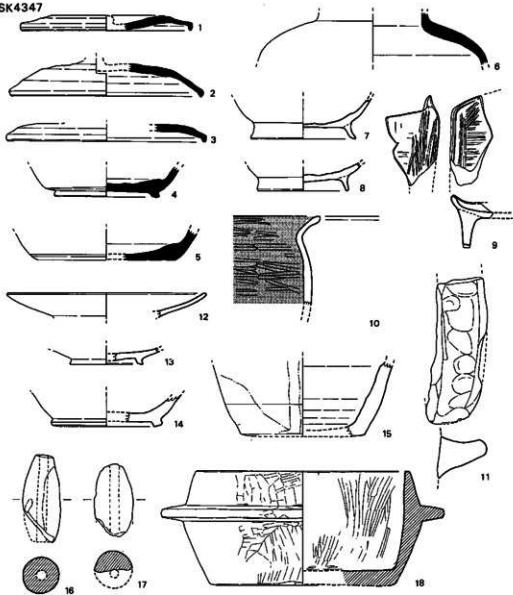
灰釉陶器

碗 (13) 口縁端部にヘラによる切り込みあがある。釉はわずかにかかる。

越

碗 (14) 口縁端部が肥厚し、わずかに外反する。

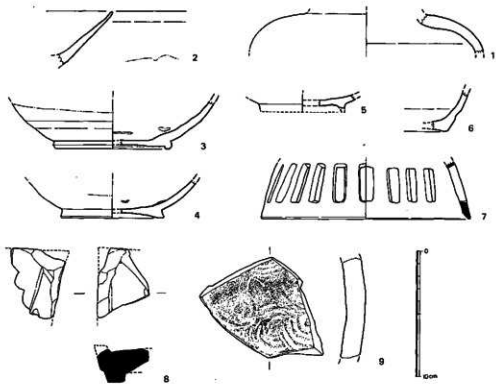
SK4347



SK4348



第45图 SK4347·4348出土土器·陶磁器实测图



第46図 遺構検出面出土土器・陶磁器実測図

SK4346出土遺物 (第44図)

須恵器

杯 (16・17) 16の高台は低く直立する。体部の境は明瞭である。

硯

円面硯 (18) 長方形透かしを有する円面硯で、透かしは20個に復原される。内面に灰被りがみられることから陸部を下にして焼成している。

SK4347 (第45図、図版31・34)

須恵器

蓋 (1～3) 1は焼成による歪みが大きい。口縁端部がわずかに立つ。2の握の位置は蓋の中心よりずれている。天井部は丸みを帯びる。3の天井部は平らで端部は立つ。

杯 (4) 高台と体部との境は明瞭である。底径8.4cmを測る。

壺 (5・6) 6の外底面は回転ヶズリ。7の頸部から体部には自然釉がかかる。

土師器

碗(7・8) 8の高台は細く「ハ」字に開き、端部は外へ反る。9の高台は直線的である。
硯(9) 9は風字硯である。調整は脚部を除く内外面は細かいヘラミガキで胎土も良好で丁寧な作りである。

黒色土器

壺(10) 外面ナデ、内面は横方向のミガキによる調整で口縁部付近は横ナデ。内面黒色、外面は一部に煤付着。

移動式カマド(11) カマド側縁にとりつく“つば”である。指抑えとナデによる調整

緑釉陶器

皿(12) 復原口径15.8cmを測る。体部から口縁端部まで一定の厚さである。

碗(14) 底径8.8cmを測る。高台は低く「ハ」字に開く。体部下位にケズリを残す。

灰釉陶器

碗(13) 底径は5.8cmで小型である。体部下位にはケズリを残す。

壺(15) 体部下位はケズリのちナデ調整。釉だまりあり。

土製品

土錘(16・17) 大型の土錘で長さ6cm以上、厚さは3cm以上である。孔は0.8cm前後である。

石製品

石鍋(18) 滑石製の石鍋で径を17.8cmに復原した。鈔の突出は1.8cmと大きい。内面は縦方向の器面調整を行っている。口縁部付近と底部付近の破片は、同じ遺構からの出土で同一個体として復原した。

SK4348(第45図、図版30)

須恵器

壺(19) 高台端部は外に反る。外底面は不正方向のナデ調整。

土師器

杯(20) 復原口径16.0cmを測る。口縁端部はわずかに外反する。外底面は手持ちのヘラケズリ。

遺構検出面出土土器(第46図、図版30・31)

緑釉陶器

碗(5) 高台端部は欠損する。土師質に焼成されている。

灰釉陶器

壺(1・6) 1は自然釉かもしれない。焼成は緻密。6の体部下位はケズリ。

越

碗(2~4) 2は体部から口縁端部へは先はそりで至る。3の体部下位はケズリのちナデ。

高台部にはケズリを残す。4の高台は丁寧にナデられ仕上げている。

硯(6~9)7は長方形の透かしの入る、円面硯の脚部片である。脚部は直線的に開き、端部は横ナデされている。透かしは23個に復原される。8は風字硯の脚部片である。硯面や脚部は、粘土板をへらで切り込んで作出している。焼成は緻密である。9は須恵器壺の破片を利用した硯で、内面はよく磨れている。(杉原)

瓦類

調査区南側隣接地の166次調査区(1994年調査)での瓦類の出土量が極端に少なかったことから、今回もほぼ同程度の出土量を予想していたが、SD4345とSK4347から想像以上の丸・平瓦の出土量があった。なお、軒瓦類では軒丸瓦(老司系)1点が出土しているが、整理途中で収納場所が不明となっている。2基の土壇出土の丸・平瓦片については、凸面に残る叩打具・整形痕を分類の基準におき、点数の確認作業を行った。瓦片の接合作業ができていない点不十分さは残るが、一応の結果として報告したい。

丸・平瓦の分類の基準を縄目・格子目・擦り消しとしたが、縄目・格子目は叩打具の痕跡であり、擦り消しとは凸面が叩打された後に叩打具の痕跡を消し去ったものである。第5表では丸・平瓦の凸面が擦り消された状態であっても、肉眼で見て縄目叩打具痕・格子目叩打具痕と判断できるものが一部にでも残っているものについては、叩打具による分類の項で計算している。叩打具による分類にも多くの問題が残る。格子目の叩打具痕は、大宰府史跡では文字を一部に刻む叩打具痕だけで70種に近く、全く文字が刻まれていない叩打具痕もあることから100種類に近いものと想像される。ただ、叩打具の形状や叩打の方法からは、大きく二とおりに分類される。

一つは老司I式軒丸瓦に伴う平瓦に代表されるもので、叩打具の幅は6.0cm前後、長さは15.0cm前後の叩打具で、円筒状態の段階で叩き締めが行われ、叩き締めの円弧を描くもの。二つめは叩打具の幅5.0~7.0cm、長さ20.0cmを越える叩打具を用いて瓦の側縁と平行に叩き締めを行っているもので、へら描きされた文字瓦を除く文字瓦はすべて叩打具に文字を刻んだもので、この方法をとっている。現状ではこの二とおりを見分けるのが精一杯である。縄目叩打具痕については、叩打具の幅や縄の太さなど様々であり、格子目の叩打具痕以上に分類は難しい。

次に、叩打具痕と擦り消し整形された瓦の関係をみてみよう。

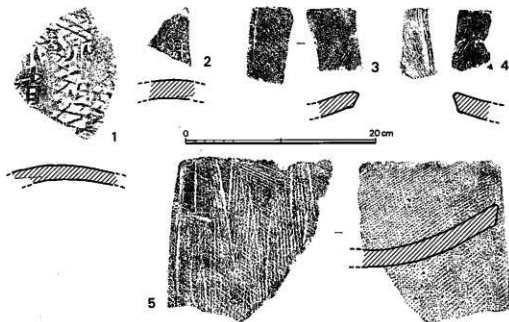
丸瓦では老司式・鴻臚館式などに伴うものは、すべて凸面が擦り消されている。老司I式軒平瓦に伴う平瓦の叩打具は格子目であり、老司II式のそれは縄目である。鴻臚館式の場合はもっと複雑で、格子目(2種以上)、平行線叩きなどに縄目叩打具痕が付加されている場合がある。また、平瓦の凸面に斜格子文を刻み、側縁と平行に叩打具痕がみられるグループに伴う丸瓦では、平瓦同様、側縁に平行した叩打具痕をそのまま残している場合が多い。平瓦の場合、丸瓦ほど叩打具痕を全面的に擦り消している例は少ない。擦り消しを行っている場合でも凸面

の一部には叩打具痕がみられる場合が多い。

この様に、叩打具の種類が多い上、調査された瓦窯からの丸・平瓦の分析も不十分な状況で、この整理の方法には多くの問題を残しているが、第47図の資料を中心に2基の土壌出土瓦について若干の紹介をしたい。

第47図1は斜格子の叩打具の中に文字を3字刻んでいる。叩打具に正字を刻んだため平瓦凸面には左右が逆になっているが、「小□瓦」と読める。中の一字は「井」と記されるが判読できない。砂粒を多量に含み焼成も悪い。SK4347から1点が出土している。2は陰刻文字の左右逆字で「平井瓦」の3文字のうち上の2字「平井」の部分が微かに残る。砂粒を多量に含み焼き上がりも悪い。SD4345から出土している。

3～5は縄目平瓦の小破片である。3はSK4347、4・5はSD4345からの出土である。3・4は凸面の縄目の叩打具痕が何かに押しつけられて殆ど消えかかっている状況である。5の凸面は縄目痕が打たれたままとなっている。3～5に共通して平瓦側縁近くに側縁と平行する状況で低い段が付いていることである。これは、平瓦製作途上で平瓦の端部や円弧を整えるために二次的に凹型の整形台に一枚ずつに切り離された平瓦を乗せて整形を行った痕跡ではないかと考えられる。SD4345とSK4347から出土する縄目平瓦片の50%程にこの様な痕跡がみられることから、第175次調査区出土の縄目平瓦の一つの特徴と考えている。



第47図 文字瓦・平瓦拓影・実測図

SD4345は調査区の南側に位置し、多量の土器とともに瓦片を廃棄していた。この中に、格子目の破片2点が含まれるが、埋土上部での出土であり、後の混入の可能性が高い。土器の時期から8世紀後半と考えられ、大宰府跡でも縄目甲打がこの時期に盛行していたことを予想させた。SK4347の場合、一定量の格子目の瓦片が出土していて、共伴の土器からも窺える。(栗原)

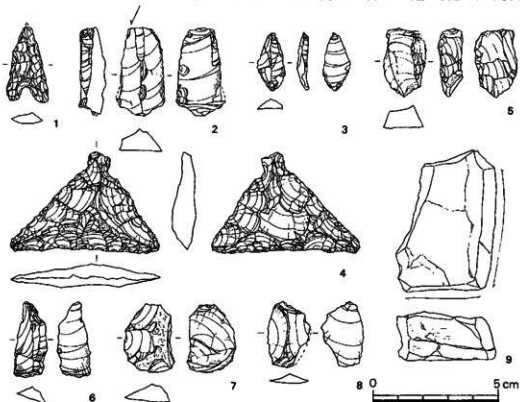
第5表 第175次調査出土瓦点数表

遺構	SD4345				SK4347			
	縄目	格子目	擦消し	合計	縄目	格子目	擦消し	合計
SD4345	15	0	18	33	505	* 2	21	528
SK4347	2	6	7	15	48	* 10	15	123

*文字瓦1点ずつ含む。

石器 (第48図1~8)

1は先端部をわずかに欠損するサヌカイト製の石鎌である。磨滅が著しい。2は黒曜石製の彫器である。先端部が折れか、調整かは不明だが、その左側縁にファシットを入れている。複数剥離面があるが、小さい剥離は使用によるものであろう。3は剥片の両極に剥離の入る楔形



第48図 石器実測図

石器である。4はサヌカイト製の石匙である。三角形状を呈しており、端部の刃部加工は丁寧である。5は黒曜石の剥片の右側面と腹面に調整を施した「ブランク」状の石器であるが器種は認定し得ない。「ブランク」として報告しておく。風化は進んでいる。6～8は剥片である。6は打面作出の際のスポールの可能性がある。7は2次加工が行われているが器種は認定し得ない。9は砂製の砥石である。砥面はやや荒い。SD4345の下層より出土した。

第6表 第175次調査石器観察表

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	出土地点
1	石 鏃	サヌカイト	3.00	1.65	0.45	1.60	先端欠	SD4345
2	彫 器	黒 曜 石	3.55	1.90	1.10	6.70		
3	模 形 石 器	#	2.25	1.15	0.50	0.90		表録
4	石 匙	サヌカイト	4.00	4.90	0.90	14.10		SD4345自然流跡上
5	「ブランク」	黒 曜 石	2.70	1.65	1.00	5.00		SB4340
6	剥 片	#	3.00	1.35	0.50	2.20		SK4338
7	#	サヌカイト	2.75	2.00	0.80	4.30		
8	#	#	2.55	1.75	0.35	1.50		SD4345
9	砥 石	砂 岩	5.65	4.00	2.00	61.50		SD4345下層

小 結

今回の調査で検出した主な遺構には、四面廂の掘立柱建物SB4340と溝SD4345等がある。ここでは現段階におけるこれらの遺構の位置付けと問題点を指摘するに留めたい。

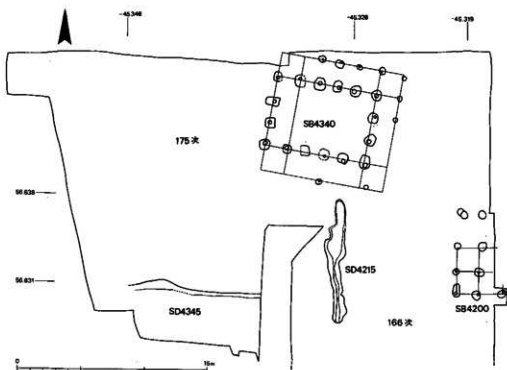
本地域は冒頭でも述べた通り、広丸地区官人居宅城の西境推定地である。これまで、第96次調査、142次調査をはじめとする調査では、8～11世紀代の建物群を検出してその変遷を示した。そして、第166次調査で検出したSB4200掘立柱建物をもってその境を比定していた。今回の調査ではまずこのSB4200建物に関連する遺構を検出することが目的の一つであった。

検出したSB4340の身舎の廂の柱穴を観察すると、特に北側桁行柱穴3・4の柱痕跡（第24図参照）では、他よりも量の多い炭化物や焼土を確認でき、柱穴6では柱が火を受けて炭化したと考えられる柱痕跡を検出した。このような状況は、北側梁行の東側付近だけで廂や南側の桁行では確認できなかった。これらの事実から、本建物が北側身舎付近で火を受けた可能性を指摘できよう。また、本建物の時間的な位置付けについては、SD4335との切り合い関係より推察できる。この建物を縦断しているSD4335は、出土した土器により8世紀後半の年代が与えられる。このことから、SB4340の年代は8世紀後半以前に求められよう。また、SD4335はSB4340とはほぼ同じ軸方向をとることから、両者は近接する時期のものと考えられる。

一方、SD4345については、4層を中心に土器や瓦が多量の炭化物と混在し、一括投棄された状態で出土した。遺物はこの溝に投棄したような状況で、出土土器は8世紀後半の年代であり、その時期に溝は埋められたと考えられる。このSD4345は東に拡がらず空間的にも限られた遺構

であり、かつ火を受けたと考えられる炭化物と遺物の混在した出土状況をあわせて考えると、SB4340との関連を求めざるを得ないであろう。つまり、SB4340が火を受けた後、その残骸をSB4345に投棄した可能性が考えられるのである。このことは、周辺においてSD4345出土の遺物にかかわる遺構が他に存在しないことや、SB4340建物の時期が8世紀後半以前に求められることから、土器の時期幅を考慮しても両遺構の時期は近接しており、同時並存した可能性は高い。ただ、SD4335との関係については、土器に時期差がなく並存した可能性が高いが、先の仮説に立てば時間的には先行することになる。

ところで、このSB4340掘立柱建物は、政庁前面の建物群の中では最も西に位置しており、主軸方位がG.Nに対して9°5′東に大きくふれていることで特異である。また、3間×5間身舎の周囲に廂を取り付けた四面廂の建物であるが、廂の堀形は小さく、かつ渠行、桁行における柱間距離が狭い。このことは、これまで政庁前面域で検出されてきた、掘立柱建物が柱間寸法や方位などに規格性をもつ官衙の建物に対し、性格が異なるものとして理解される。もし、SB4340が8世紀後半より少しだけ時間的に遡る程度の時期の所産である、という解釈が正しいなら、すでに広丸地区官人居宅域からははずれた別の性格をもつ建物であると考えられる。このこと



第49図 第186・175次調査主要遺構配置図

からも第166次調査時に検出した、SB4200の建物を含めた東側でその境を再検討する必要がある。

一方、出土遺物からみると、SB4340と関係あると考えられるSD4345に一括投棄された遺物が注目される。一般容器のほかに、製塩土器や硯、壺類の多さが目立っている。その他、特殊な遺物としては、漆の付着した杯皿や櫛羽口、大型土錘などがある。特に大型土錘の多量の出土はこれまでに例がなく、官衙域にはみられない日常生活の側面を持っていることで重要である。この事実からも、SB4340建物をはじめとするこの付近一帯は、大宰府内において特異な地域であったと言える。そして、これらの状況を考えると、来木丘陵一帯で確認されてきた“工房”跡との関連が考えられる。つまり、この調査区周辺地域は工人をはじめとする特殊技能を持った人々が集り居住した地区であった、という可能性である。このことは、第167次調査で検出した竪穴住居SI4220の位置付けについても同様に考えざるを得ないことから言えるだろう。

今後、さらに周辺の様相が明らかになったとき、述べてきた問題を踏まえたこの建物の大宰府における位置付けを行うことができよう。(杉原)

別 表

器種	押図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナアの有無	板状圧底の有無
						ヘラ	米		
SB4340 (第175次調査)									
須恵器	蓋	28	1	(19.6)					
SD4335									
須恵器	蓋	28	2	(14.0)					
		"	3	(16.0)		2.2			
	杯	"	4	(10.0)	(6.4)	4.3			○
		"	5	12.6	8.1	3.4			○
		"	6	(14.3)	(8.8)	4.1			○
皿	"	7	(19.4)	(15.8)	1.95				
SD4345									
須恵器	蓋	29	1	(6.7)					
		"	2	12.2		2.0			
		"	3	13.1		1.3			
		"	4	12.5		1.9			
		"	5	13.0		2.6			
		"	6	(12.6)					
		"	7	(14.0)					
		"	8	14.1		3.2			
		"	9	14.4		2.6			
		"	10	15.0		1.6			
		"	11	(15.0)					
		"	12	(14.7)					
		"	13	(15.2)					
		"	14	15.4		3.0			
		"	15	(15.6)					
		"	16	(15.8)		2.8			
		"	17	(16.4)					
		"	18	(17.0)					
		"	19	16.7		2.4			
		"	20	18.0		1.7			
		"	21	18.3					
		"	22	(20.0)					
		"	23	16.4		2.6			
杯	杯	30	1	(11.0)	6.8	3.9			
		"	2	(11.6)	5.8	3.7~4.1			
		"	3	11.5	6.2	4.1~4.2		○	
		"	4	(12.0)	7.0	3.9			
		"	5	(12.3)	7.3	4.5		○	
		"	6	(12.4)	(7.5)	4.0		○	
		"	7	12.3	7.9	4.2	○	○	
		"	8	(12.4)	(4.0)	3.8~4.3			
		"	9	12.6	7.6	4.3	○	○	
		"	10	12.8~12.9	7.7	4.3	○	○	
		"	11	13.0	(8.6)	3.8	○		

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無	
						ヘラ	糸			
須恵器	杯	30	12	13.2	8.0	4.6			○	
		#	13	13.5	7.5	4.0			○	
		#	14	(13.0)	7.2	4.5	○		○	
		#	15	(13.2)	(7.6)	3.7	○			
		#	16	(13.2)	(8.0)	3.9	○			
		#	17	(13.2)	7.8	5.1	○			
		#	18		9.0		○		○	
		#	19	14.9	8.6	5.5			○	
		#	20	15.0	7.5	5.4~5.6	○		○	
		#	21		(8.9)					
		31	22	(15.0)	(9.5)	5.5	○			
		#	23	(15.0)	(8.2)	5.4~5.7	○		○	
		#	24	(14.9)	8.7	4.9			○	
		#	25	(15.0~16.4)	8.5	5.9~6.5	○		○	
		#	26	15.2	8.6	5.3	○		○	
		#	27	15.2	9.8	5.5	○		○	
		#	28	16.0	9.6	5.5	○		○	○
		#	29	(8.0)	7.5~7.7	5.6			○	
		#	30	(16.5)	(9.2)	5.5			○	
		#	31	(16.6)	(10.6)	5.1				
		#	32	(16.6~17.0)	9.9	5.3~5.9			○	
		#	33	(17.0)	8.6	5.3~5.7			○	
		#	34	(16.0)						
		32	35	(7.0)	(8.9)	5.9			○	○
		#	36	(19.0)	(10.4)	7.7			○	
		#	37	18.7	11.6	7.6				
		#	38		(10.6)					
		#	39		7.6				○	
		#	40	10.0	6.1	2.5	○		○	
		#	41	10.7~11.2	6.2	2.7	○			
		#	42	(12.6)	(8.3)	3.4	○		○	
		#	43	(12.2)	(7.4)	3.8	○			○
		#	44	(12.4)	8.1	3.7	○			
		#	45	(12.5)	7.6	3.6	○		○	
		#	46	12.2~12.8	7.7	4.0			○	
#	47	(12.4)	(8.2)	4.4	○		○			
#	48	(12.6)	(8.0)	3.3~3.6	○		○			
#	49	(12.6)	8.6	3.3	○					
#	50	13.6~13.8	8.3	3.8	○					
#	51	13.0	8.5	4.3	○		○			
33	52	13.1	8.0	4.2	○		○			
#	53	13.2	7.5	3.6	○		○			
#	54	(13.0)	9.1	3.8	○					
#	55	12.6	8.3	3.4	○		○			
#	56	(13.8)	(9.0)	3.8	○					
#	57	13.4	8.7	3.9	○		○			
#	58	13.2	9.4	3.9	○					
#	59	13.0								

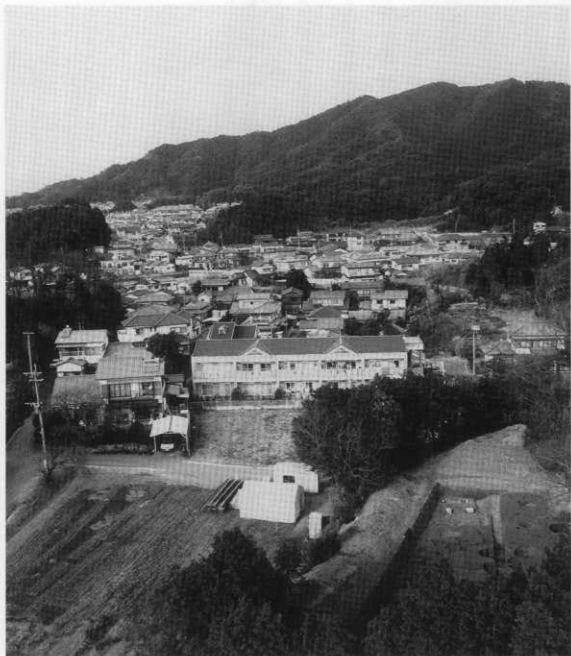
器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無		
						ヘラ	糸				
須恵器	杯	33	60	(13.5)	(9.0)	4.1	○				
		"	61	(14.2)	10.2	4.7	○	○			
	皿	"	62	13.7~13.8	10.7	2.1~2.5	○				
		"	63	(16.0)			○				
	長頸壺	"	67		(7.0)						
		34	1		(11.0)						
	壺	"	3	(4.2)	(8.6)	18.1					
	短頸壺	"	5	(18.2)	(10.0)						
	甕	"	35	7	(13.8)						
		"	8	(16.3)							
"		9	(20.9)								
土師器	蓋	"	36	1	(15.1)						
		"	2	18.0		3.0					
		"	3	(18.0)							
		"	4	18.5							
	杯	"	5	11.9	(7.0)	4.0					
		"	6		(10.0)				○		
		"	7		(12.0)				○		
		"	8	(10.8)	6.9	3.9					
		"	9	(12.7)	7.3	3.8	○				
		"	10	(12.9)		3.5					
		"	11	(13.1)	(7.1)	3.8	○	○			
		"	12	(11.0)	(3.6)	3.2					
		"	13	(12.0)							
		"	14	(12.9)	6.5	2.9					
		"	15	13.9	7.5	4.0		○			
		"	16	14.2		4.0		○			
		"	17	(15.4)	8.4	3.7					
		"	18	(16.1)	9.1	3.7					
		"	19	(16.0)	(6.7)	3.4		○			
		"	20	(16.2)	6.8	4.0					
		"	21	16.4	8.4	4.3					
		37	22	(17.2)	(9.5)	4.0					
		皿	杯	"	23	(17.4)		2.6			
				"	24	(17.5)	(9.0)	4.4			
	"		25	(17.5)							
	"		26	(17.9)	(9.8)	4.0					
	"		27	(17.8)	(8.6)	3.5					
	"		28	(17.9)	(9.1)	3.8					
	"		29	(18.4)		3.3					
	"		30	13.5	7.8	3.6					
	"		32	(16.4)							
	"		33	(11.5)		(9.7)					
	"		34	(13.8)							
	"		35	12.6		3.6					
	皿		"	38	(18.9)	(14.8)					
		"	39	19.2	14.2	2.3					

器種	挿図番号	番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部のナアの有無	板状圧痕の有無	
						ヘラ	糸			
土師器	壺	38	1	(10.8)						
	碗	"	3	(25.0)						
	鉢	"	4			(13.6)				
	甕	"	5	(14.7)						
	"	"	6	(12.8)						
	"	"	8	(15.4)						
	"	"	9	16.2						
	"	"	10	(15.2)						
	"	"	11	(15.8)						
	"	"	12	(16.2)						
	39	13	(17.2)							
	"	14	(17.0)							
	"	15	(17.1)							
	"	16	(18.3)							
	"	17	(19.0)							
	"	18	(20.1)							
	"	19	(20.0)							
	"	20	(22.0)							
	"	21	22.0							
	40	22	(26.0)							
	"	23	(28.5)							
	"	24	(30.0)							
	"	25	(29.5)							
	"	26	(40.0)							
	製塩土器	41	6	(12.0)						
		"	7	(12.7)						
"		8	(10.5)							
"		9	(13.3)							
"		10	(10.7)							
"		11	(12.0)							
"		12	(10.2)							
"		13	(9.7)							
"	14	(11.8)								
SK4333										
土師器	碗	43	1		7.2					
SK4334										
須恵器	蓋	43	2	(11.0)		1.1				
		"	3	(11.0)						
土師器	碗	"	4	(12.4)	(7.1)	4.8				
		"	5	(12.6)	(7.6)	4.3				
		"	6			7.6			○	
		"	7			7.3				
		"	8			(8.4)			○	
		"	9			8.6			○	

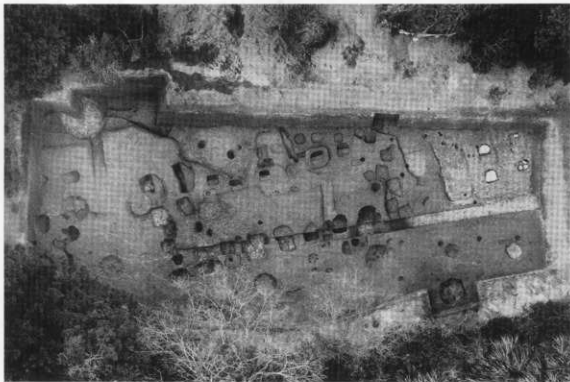
器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
土師器	杯	43	10	(11.8)	7.3			○	
		#	11	(12.5)					
		#	12						
土師器	甃	#	13	(26.2)					
		#	16	10.4					
SK4336									
須恵器	蓋	#	17	(15.6)					
土師器	碗	#	18		7.2			○	
		#	19		6.6				
		#	20		(6.4)				
SK4337									
土師器	皿	#	23	(9.0)	(7.1)	1.3			
SK4338									
土師器	碗	#	24	(8.6)	1.2	(7.2)			
		#	25		(7.2)			○	
SK4341									
須恵器	壺	#	27		(13.0)				
土師器	碗	#	28		7.7			○	
		#	29		7.3			○	○
SK4342									
土師器	杯	44	1		(7.8)				
		#	2		(12.0)				
SK4343									
須恵器	蓋	#	3	(14.8)					
土師器	碗	#	4		(7.6)				○
SK4344									
須恵器	杯	#	5		(8.8)			○	
		#	6		(10.0)				
土師器	杯	#	7		7.6			○	
		#	8		(7.1)		○		
SK4346									
須恵器	杯	#	16		(7.2)			○	
		#	17	(12.8)					
SK4347									
須恵器	蓋	45	1	(13.5)					
		#	2	(15.4)					
		#	3	(15.8)					

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
須恵器	杯	45	4		8.4				
		"	5		(10.8)			○	
土師器	椀	"	7		8.3			○	
	杯	"	8		7.3	○		○	
緑釉	皿	"	12	15.8					
灰釉	椀	"	13		(5.8)				
緑釉	"	"	14		8.8				
灰釉	壺	"	15		(9.8)				
石鍋	"	"	18	(17.8)	9.1				
SK4348									
須恵器	壺	"	19		(9.4)				
土師器	杯	"	20	(16.0)		2.6			
遺構検出面									
青磁	椀	46	3		(9.0)				
		"	4		(8.2)				
須恵器	碗	"	7		(16.6)				

圖 版



第169-1次調査区全景（南上空から）



第169-1次調査区全景（東上空から）



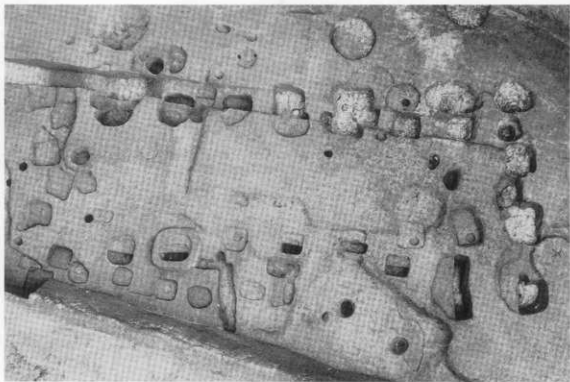
第169-1次調査区全景（北から）



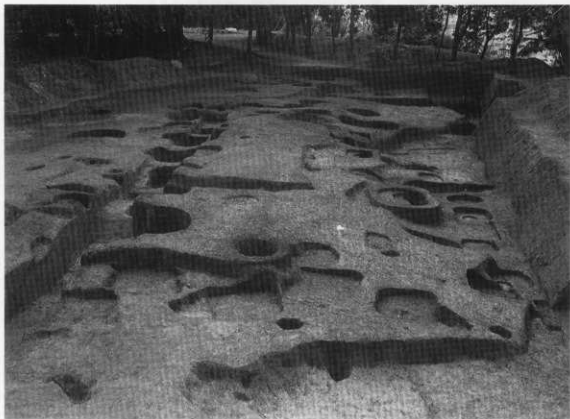
第169-1次調査区全景（拡張後、北東から）



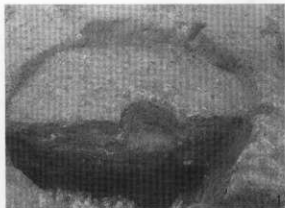
第169-1次調査区全景（拡張後、南西から）



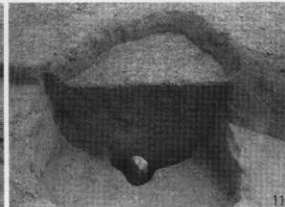
掘立柱建物SB4245・4250（西上空から）



掘立柱建物SB4245・4250（北から）



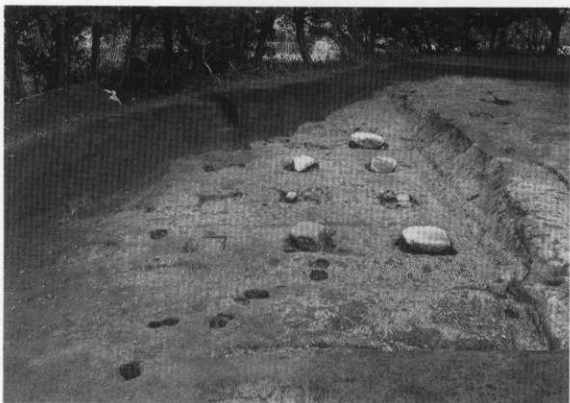
掘立柱建物SB4245柱掘形



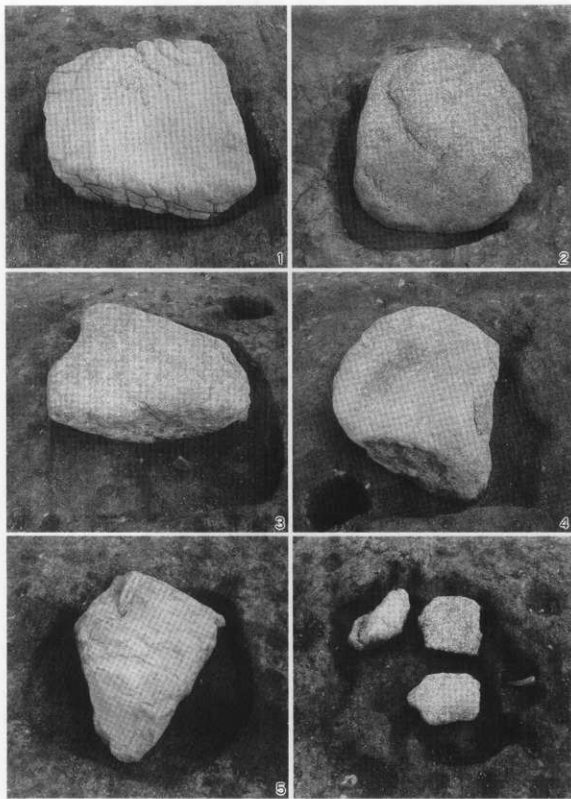
掘立柱建物SB4250柱掘形



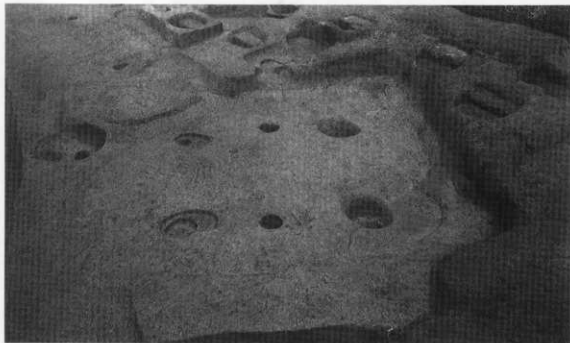
礎石建物SB4255 (東から)



礎石建物SB4255 (南から)



礎石建物SB4255礎石・根石



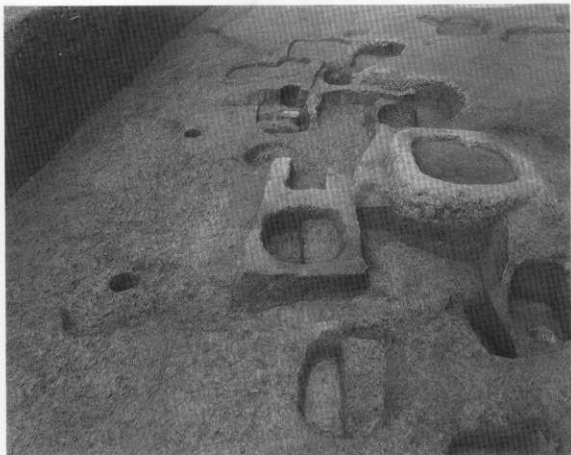
竪穴住居SI4230
(南西から)



SI4230カマド
(南西から)



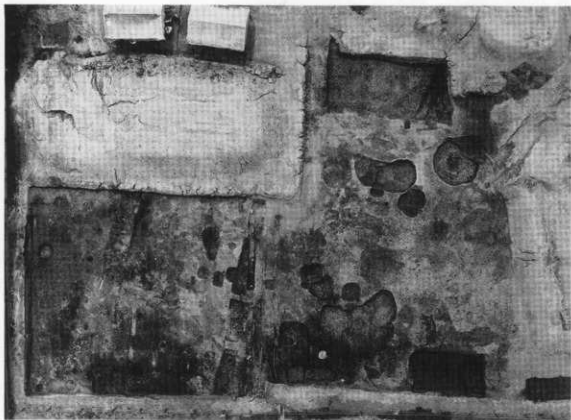
SK4233遺物出土状況
(南西から)



竪穴住居SI4235 (南から)



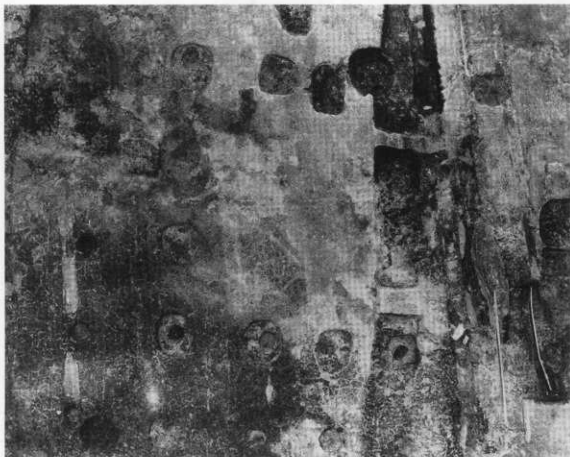
SI4235カマド (南から)



第175次調査区全景（北上空から）



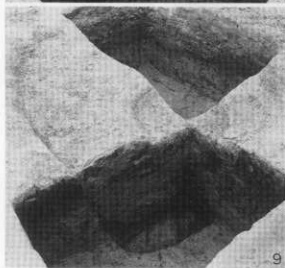
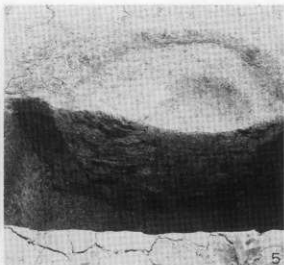
第175次調査区全景（西から）



掘立柱建物SB4340、溝SD4335（北上空から）



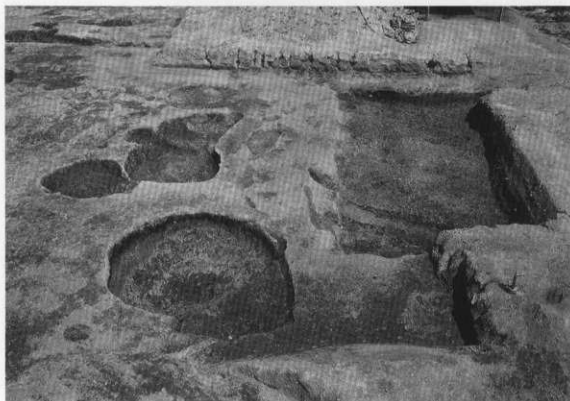
掘立柱建物SB4340、溝SD4335（南から）



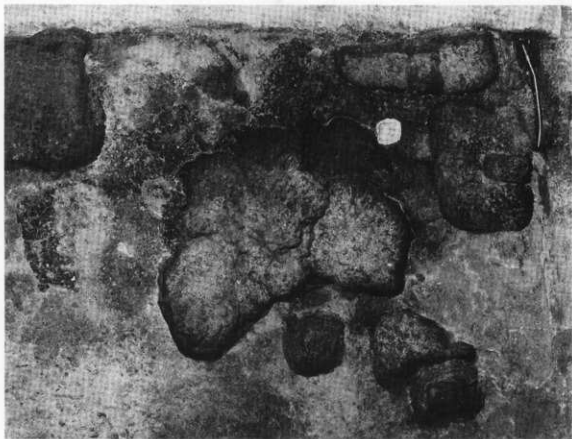
掘立柱建物SB4340柱掘形



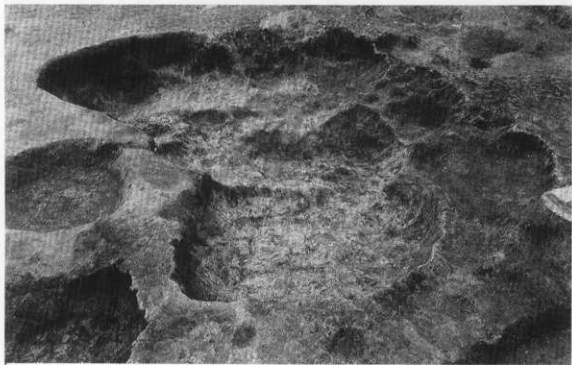
調査区西半土壌群 (西上空から)



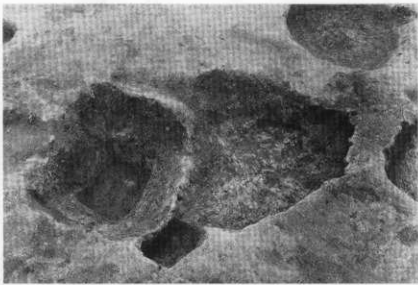
溝SD4345、土壌SK4347 (西から)



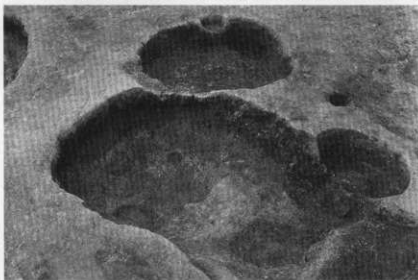
北側土壌群SK4333・4334・4336・4338・4339（南上空から）



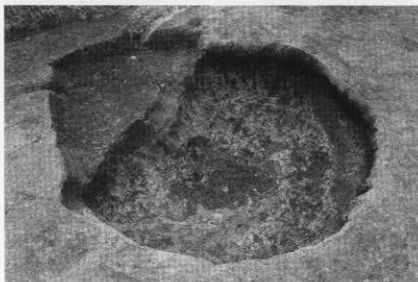
土壌SK4334（東から）



土壌SK4338・4339
(北東から)



土壌SK4344・4346・
4348 (南東から)

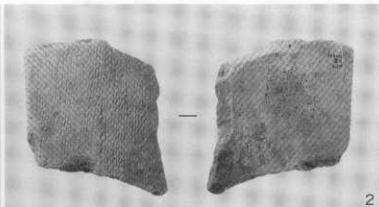


土壌SK4347
(北東から)

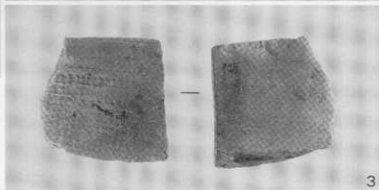


水城瓦窯出土瓦

1. 軒丸瓦
2. 平瓦
3. 平瓦



2



3

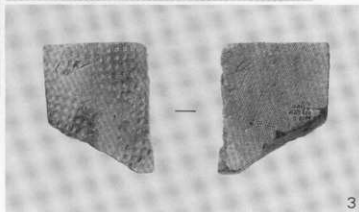


「日本の音百選・
観世音寺の鐘」選定
記念碑基礎出土瓦

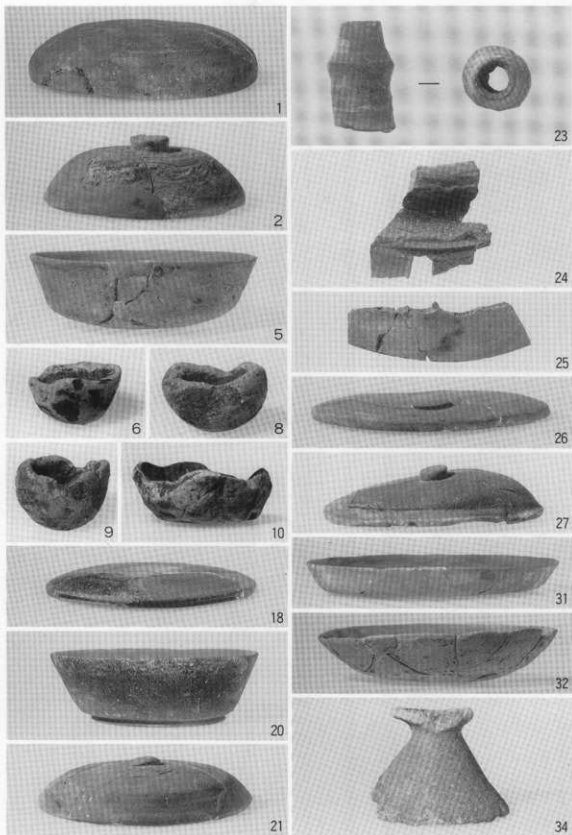
1. 軒丸瓦
2. 軒平瓦
3. 壁斗瓦



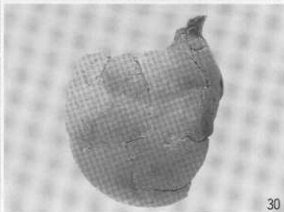
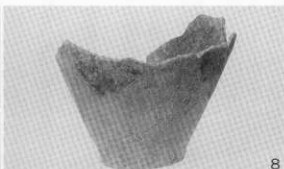
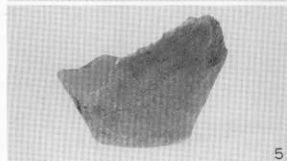
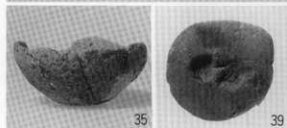
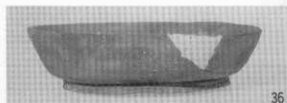
2

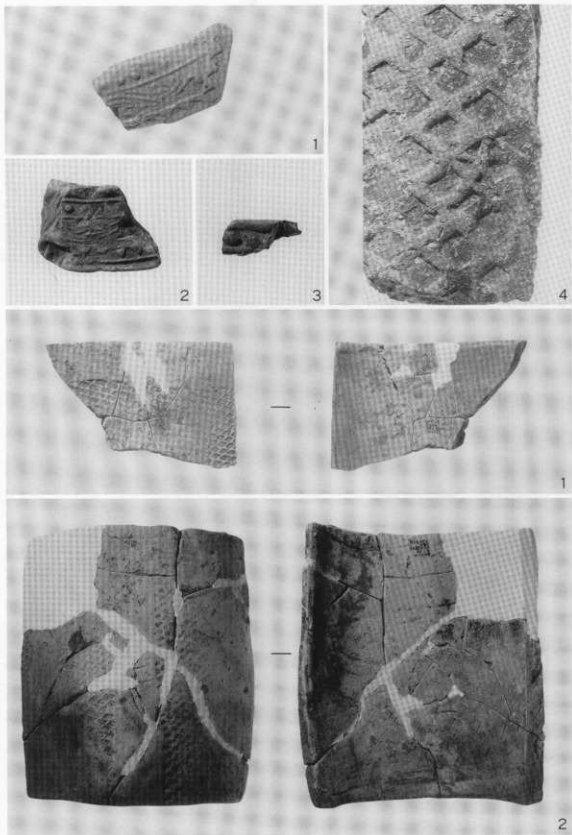


3

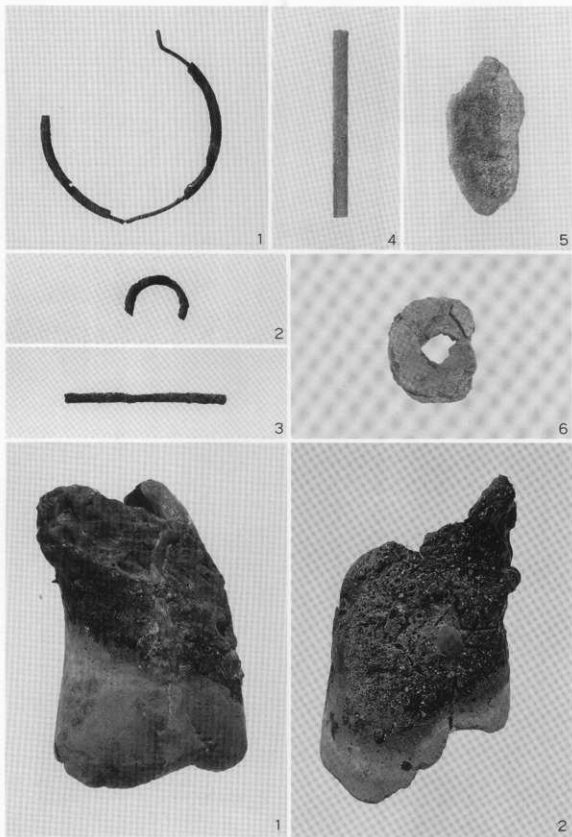


第169—1次調査SI4230、SB4245・4250・4255、SK4233出土土器・土製品

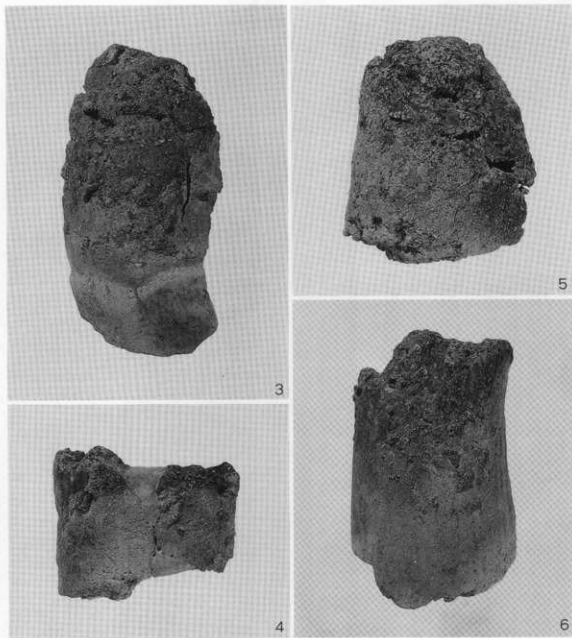




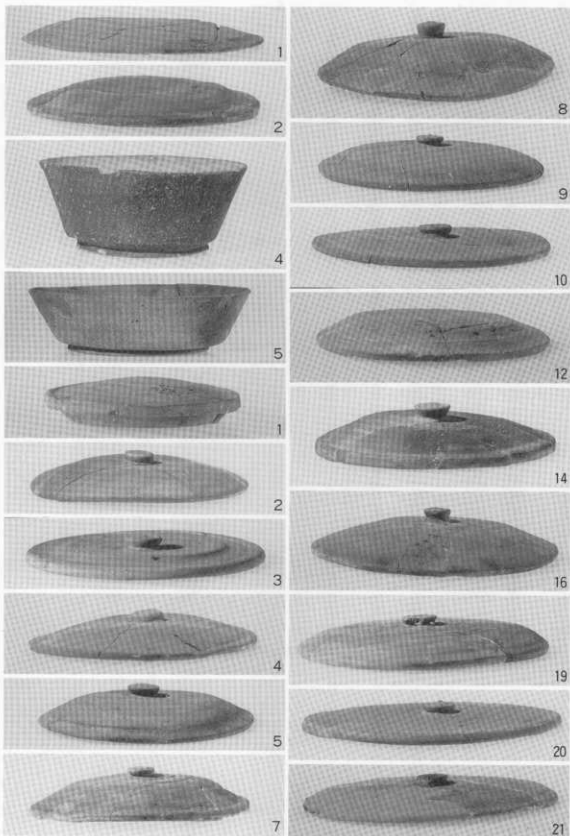
第169—1 次調査出土軒平瓦・平瓦・文字瓦



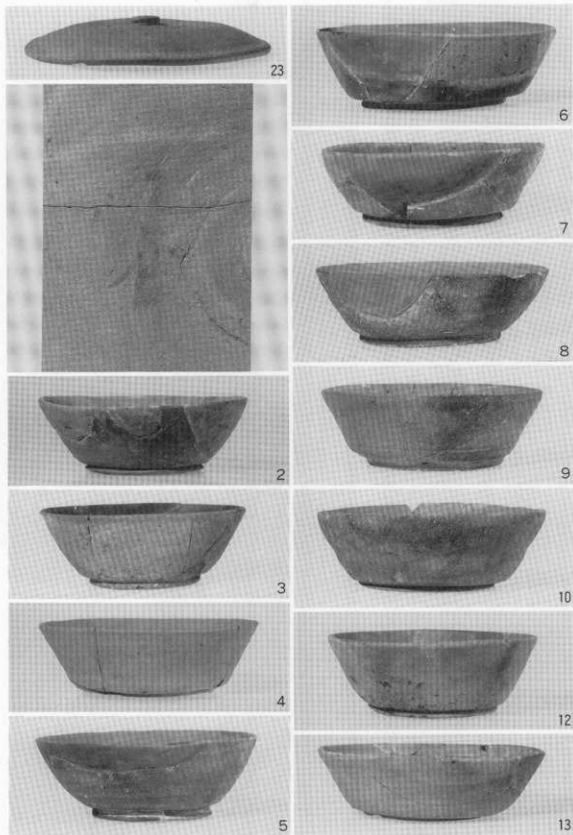
第169—1次調査出土金属製品・鞆羽口



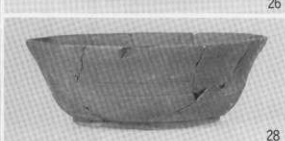
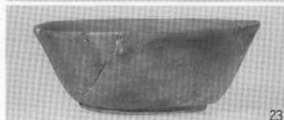
第169—1 次調査出土籠羽口

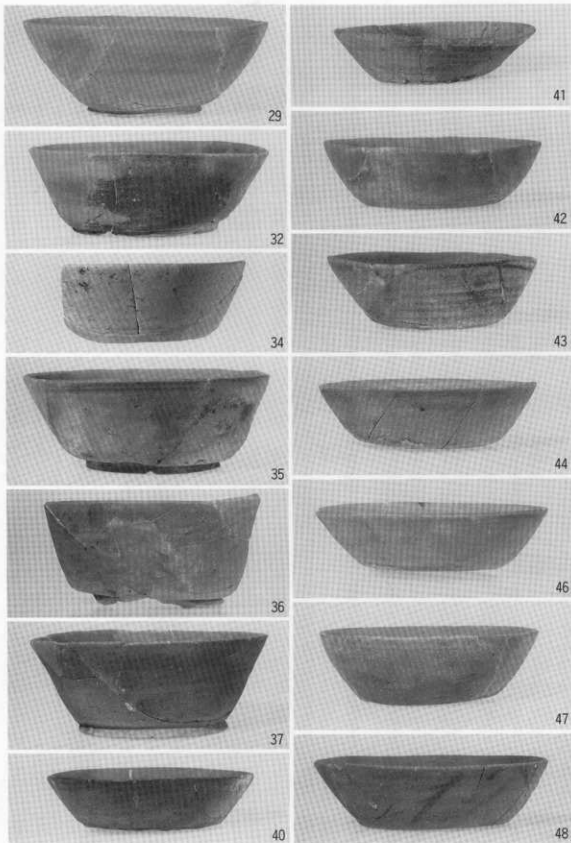


第175次調査SB4340、SD4335・4345出土土器

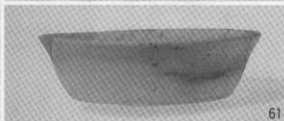
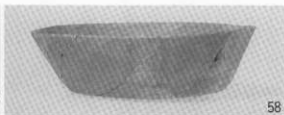
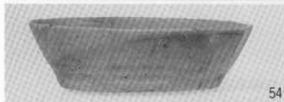
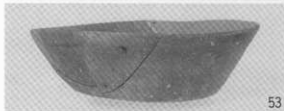
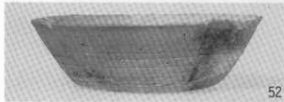
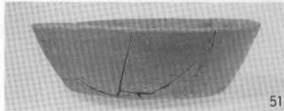
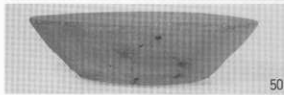


第175次調査SD4345出土土器 (2)

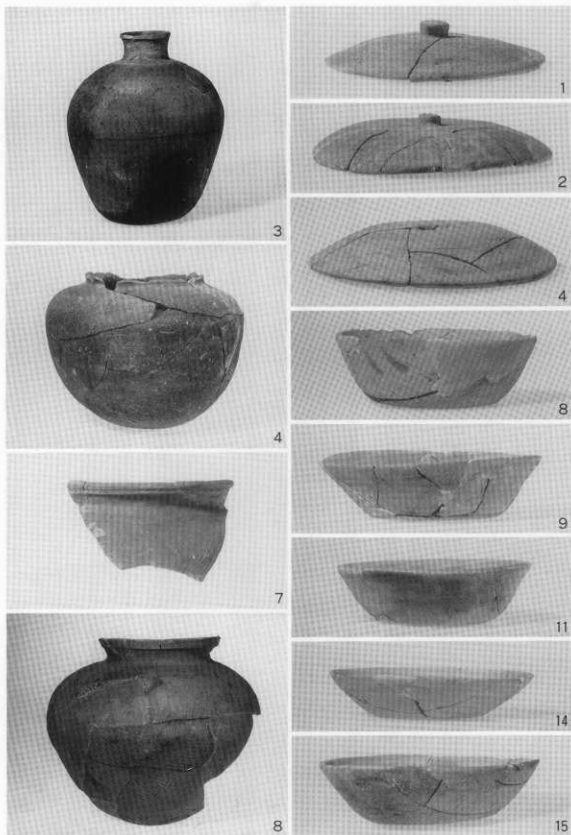




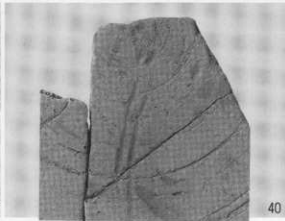
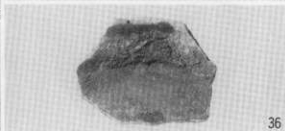
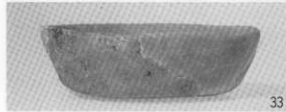
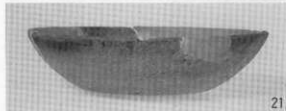
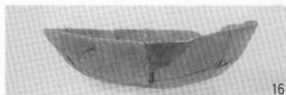
第175次調査SD4345出土土器(4)



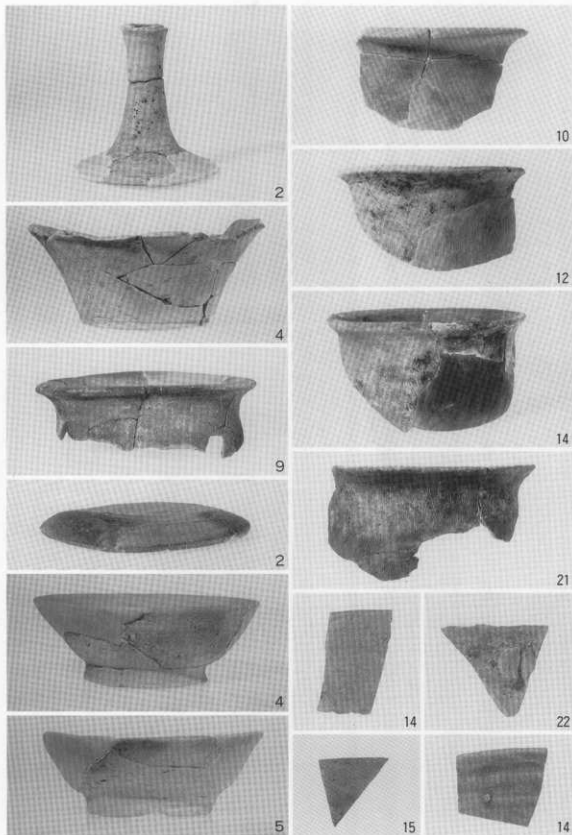
第175次調査SD4345出土土器 (5)



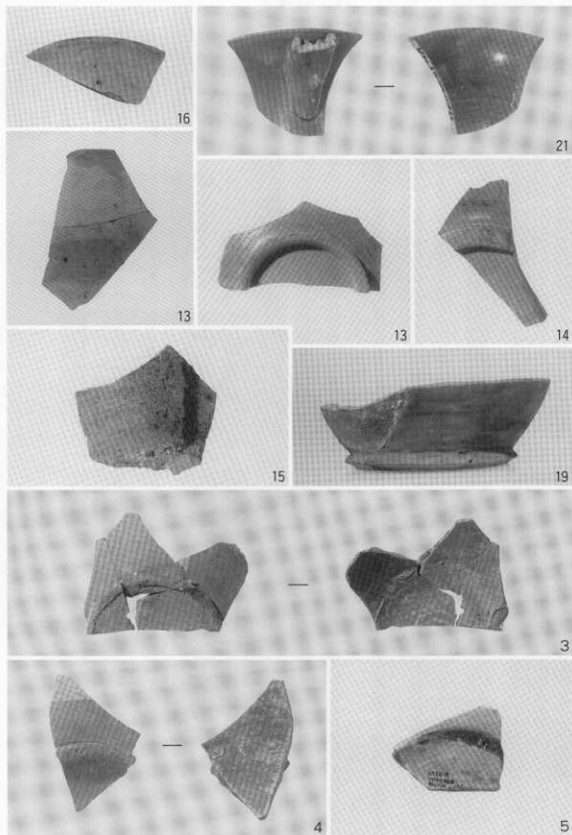
第175次調査SD4345出土土器 (6)



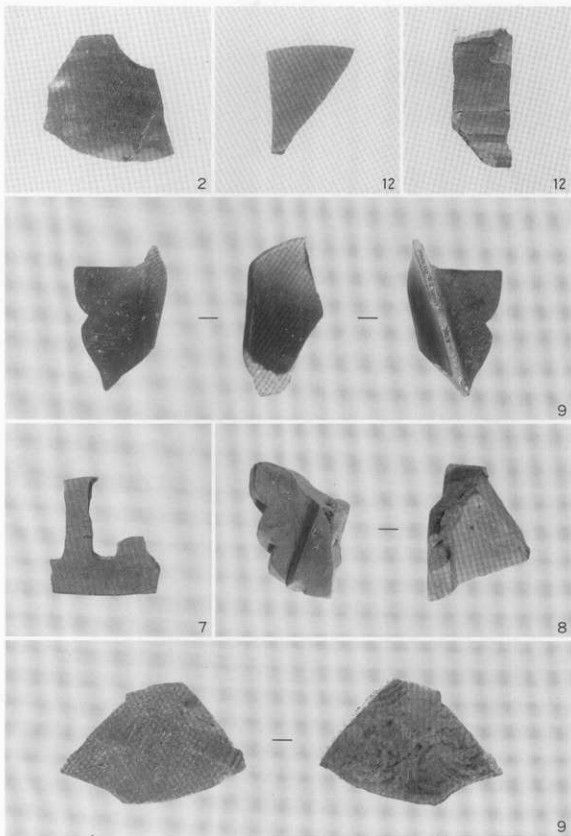
第175次調査SD4345出土土器(7)



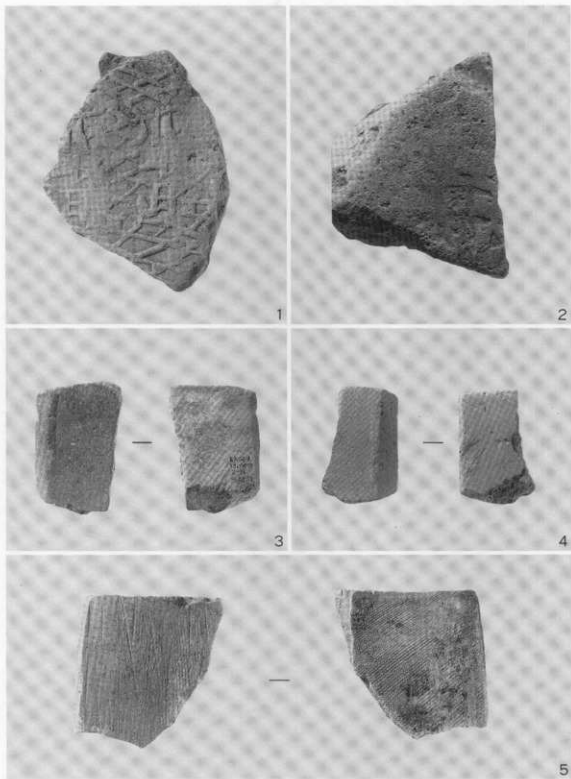
第175次調査SD4345、SK4334・4336・4344出土土器・陶磁器



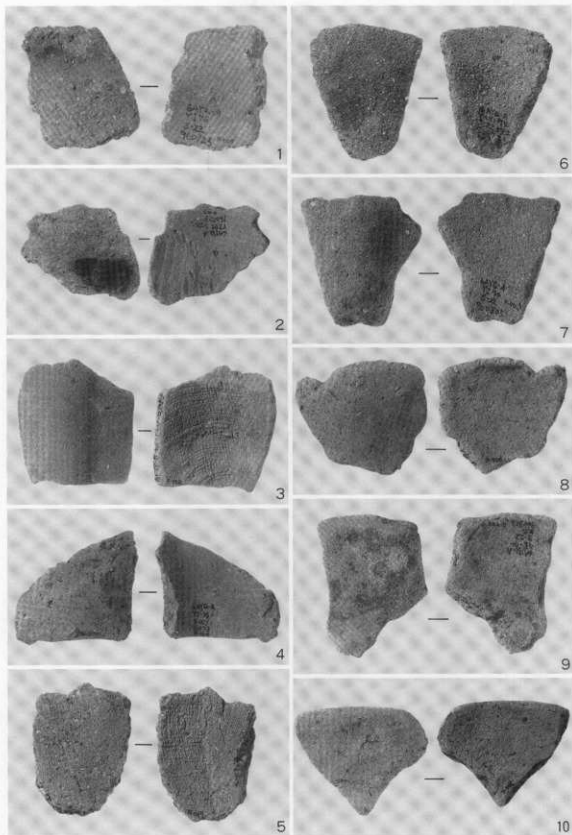
第175次調査SK4334・4336・4344・4348、検出面出土陶磁器



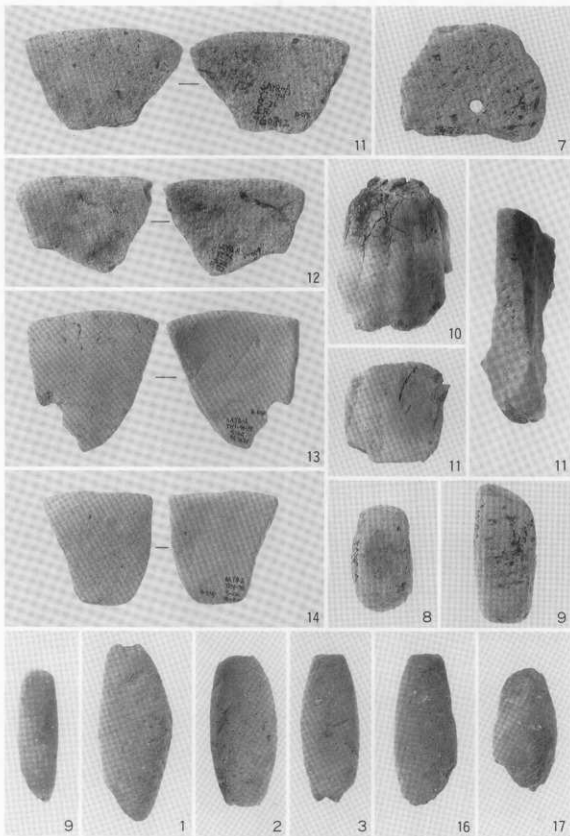
第175次調査SK4347、検出面出土硯・陶磁器



第175次調査出土文字瓦・平瓦

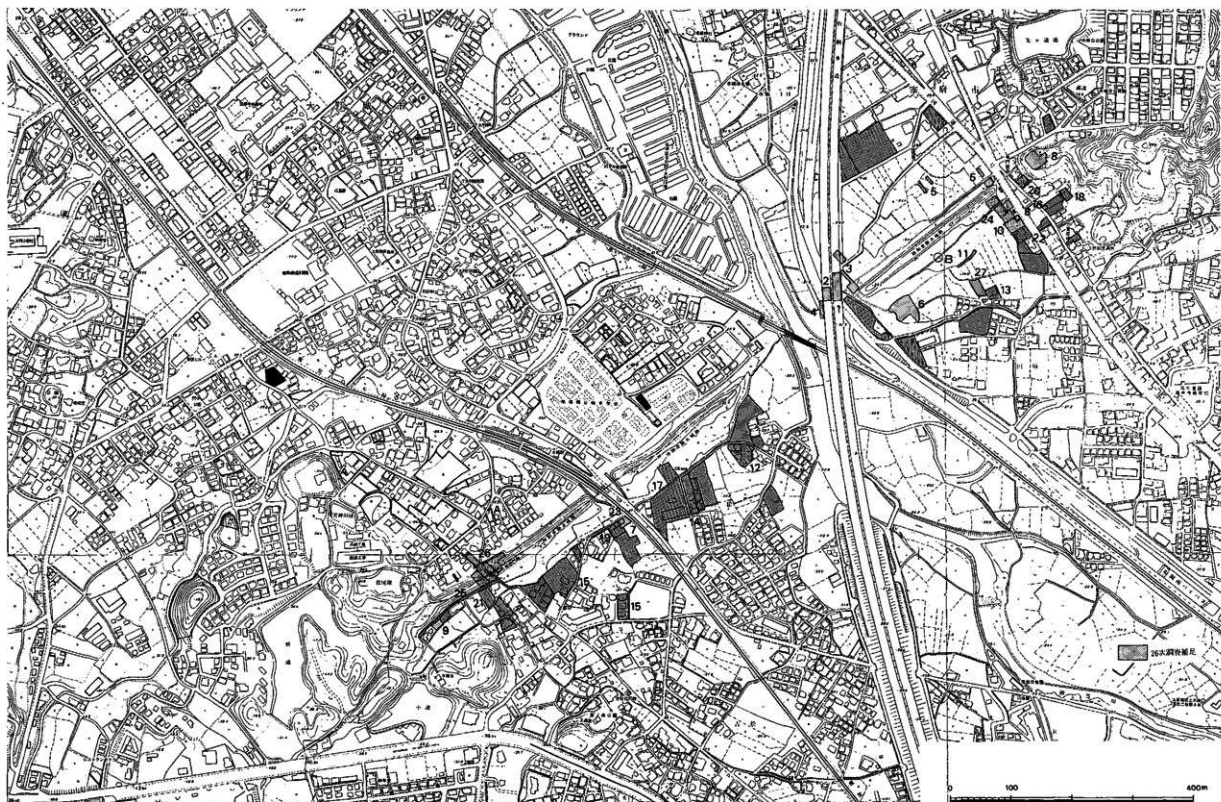


第175次調査SD4345出土製塩土器



第175次調査SD4335・4345、SK4347出土製塩土器・土製品

IV 水城跡の発掘調査



第56图 水城跡発掘調査地域図

IV 水城跡の発掘調査

1. 第26次調査補足

大宰府史跡発掘調査第5次5箇年計画は、特別史跡水城跡の諸施設の解明を調査目的として平成5年度より実施しているが、早くも4年次が経過した。水城の全容解明にはほど遠い状況ではあるが、それなりの成果を得ており、従前の調査成果を振り返っておこう。

先ず、調査初年度の平成5年度は、旧国道3号側の東門地区（太宰府市国分）において、8世紀後半代とみられる獨立柱建物を2棟検出した。また、太宰府側基底部の断ち割り調査においては、土壘本体寄りの最下層に樹木の枝葉（粗朶）を敷いていることが確認された。併せて土木学的見地からの調査も行われ、水城の築堤工法に関して大きな成果を挙げている。また、木種の電気探査及び粗朶の樹種同定など諸分野からのアプローチがなされ、新たな知見を得ることができた。

次年度以降は西門地区（⁽⁸⁾太宰府市吉松・大野城市下大利）に視点を移し、門遺構の検出を目指すこととなった。平成6年度は西門推定地の土壘切り通し部分において調査を行い、調査区北半部では石敷き溝と官道の西側溝SD109を検出した。また、切り通し東側部分の土壘（以下、東土壘と省略）基底部からは、石列とそれに直交して付設された石組暗渠SX105を、切り通し壁面からは石垣を検出したものの、平成6年度の指導委員会では、「思った以上の成果が得られていないことから次年度も西門地区の調査を継続すべきである」との意見が大勢を占めた。

平成7年度は門遺構を検出するという目標に加え、先年度検出した石垣・石組暗渠の追調査、官道と外濠との関係、土壘頂上部における遺構の存否などを明らかにするために行った。また、発掘調査と並行して西門地区周辺の測量調査も実施した。それによると、これまで2段築成とみられていた土壘の博多側中段に平坦面が存在し、土壘北面は3段築成であること、中段の平坦面は切り通しの左右で途切れていること、それに対応して土壘頂部幅が、切り通し側に向かって大きく広がっていること、切り通し箇所の土壘本体は、太宰府側にコ字形の張り出し部を有していることなどが測量調査の結果指摘された。

平成7年度の調査は前年度に発掘を行ったE区から開始したが、切り通し西側部分の土壘（以下、西土壘と省略）裾部において土壘に直交したかたちで柱掘形4個を検出し、ここに念願の門遺構が確認された。門建物SB110は本柱と控柱の間隔が2.7mで、控柱の前には支柱が付き、その間隔は2.5mであること。また、門の幅が東土壘側面の石垣SA103よりは広がらない（柱列から石垣までの距離は約7.5m）ことから一間一戸の四脚門が想定でき、土壘頂部には軒先瓦・丸・平瓦が多量に存在することから重層の門であったと考えられる。

次に、先年度の懸案であった土壘前面の外濠と官道との関係であるが、J区においても官道

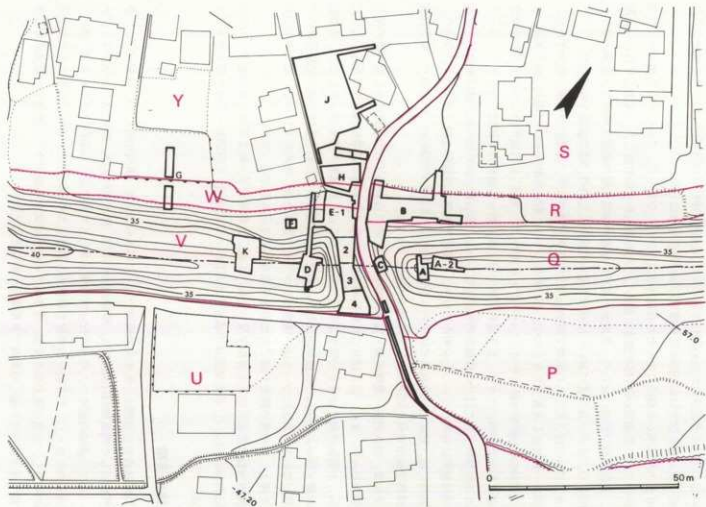
の西側溝が検出され、さらに門と西土塁取り付き部との中間のG区でも濠が検出されなかったことから、西側溝以西には外濠は存在しないことが明かとなった。また、官道に関しては、路面自体は削平を受けて遺残していないが、東西両側溝を検出した。西側溝は谷川遺跡(平成6年度大野城市教委調査)に連続するとみられるが、東側溝は長さ9.2mで終わり、外濠に接続している。官道自体の終焉は大宰府の衰退と期を一にしたものと推測されるが、路面中央に掘られた土壌(11~12世紀)が官道の廃絶時期を示すものであろう。

追調査の結果、石列SA104は東土塁隅部から土塁線と平行して裾部に埋設され、全長17.5mを測る。これは、先の中段平坦面が途切れ、土塁頂部幅が門側に向かって大きく開いていることと関連し、重層の門建物を構築する際の基礎工事的なものと解釈される。水城跡の土木工学調査にあられた佐賀大学低平地防災研究センターの林重徳氏は、基底部石列は土塁のカウンターウエイトとしての機能を持つとされている。また、石列に直交して石組暗渠SX105と新たに検出したSX106を付設している。SX106は長さ6.2mで、その先端部は外濠に接続しており、外濠低面との比高差は1.5mであった。

また、西土塁頂部に設けたトレンチにより、頂上部には柵列などの遺構は存在しないが、拡幅部は中段平坦面から切り通し壁面にかけてし字形に埋めていた。この拡幅工事は門建物に伴うものと考えられた。さらに、東土塁頂上部の平坦面では、方形の溝を巡らした経塚を調査しており、経筒と副納品の短刀などが出土している。

上記が平成7年度までの調査成果であるが、調査終盤になって門建物の1m下層に硬化面が存在し、硬化面に叩き込むようにして8世紀代の須恵器・瓦の破片が検出されたことにより、築境時の門と考えていたSB110の年代が下り、築境当初の門遺構を探すことが次年度の第一の課題となった。また、西土塁隅部で検出していた石垣SA115、溝SD109(平成7年度概報ではSD120と報告していたが、今次報告よりI期門建物をSB120とし、溝をSD109に変更する)は、層位的にSB110の下層に位置することになり、両者はI期に遡る可能性が出てきた。このことから、平成8年度の調査はI期門遺構の検出とSA115・SD109の追調査及び中段テラスにおける柵列の確認、さらに経塚の個数確認などを行うことになった。

以上のことから、平成8年度はE区の再調査が中心となった。4月10日に重機を搬入し、昨年の調査終了後一旦埋めていた覆土の除去から取りかかった。これと並行して、西土塁の伐採及びC・F区の埋め戻し作業を行い、本格的な調査に入ったのは5月になってからである。E区の北西端から掘り下げを行い、先年度検出していた溝SD109が分岐しているのを確認し、溝の東側の地山直上では道路に伴う硬化面を検出した。また、石垣SA115の南側延長部分を精査している最中にIII期積み土中から8世紀中頃の須恵器杯が出土し、SB110はそれ以降の築造であることなどを5月15・16日の指導委員会で報告を行った。その後、E2区でIII期積み土の落ち込みを検出し、建物の掘形になると予想された(後日、I期柱掘形と判明)。E3区は硬化面を除



第51图 水城跡第26次調査補足発掘区配置図

去し、灰黄色土の地山面まで掘り下げたが、柱掘形は検出されなかった。掘形が土壘際に寄っているのではと予測されたためSB110を半載し、柱掘形の検出に努めたが、結果的には検出されなかった。E4区ではSD109の延長部と石垣の掘形を検出した。

6月の半ば頃から梅雨に入ったため進捗状況は芳しくなかった。さらに、7月初め～8月末にかけては、作業員が第175次調査に移動したため調査を一時中断した。現場は9月から再開し、K区中段平坦面において、平坦面を埋めたIII期の版築土層の確認と櫓列など遺構の有無を調査した。また、A2区においては経塚2基を検出したものの、既に盗掘されていた。

9月12日には、E2区石垣際で径50cmほどの空洞が見つかり、待望の柱掘形が検出された。掘形は一辺2mもある大きなもので、先に検出していた東側の掘形との柱間は4.2mを測る。また、SD109Aが西側の掘形を切っていることも判明した。再度、E区南半部において掘形の検出作業を行ったが検出できず、E3区の版築土層を断ち割って掘形の再確認を行うこととなった。掘り下げが終了した11月に柱掘形の検出を行ったが、SA115とSD109の延長部は検出できたものの柱掘形は存在しないことが明かになり、I期の門遺構は柱掘形2個と言うことになった。

10月には、K区の土壘裾部で柱穴列(4個)を検出した。その間隔は1.3m前後で、韓国扶蘇山城跡で検出された柱間隔1.5mに近い数値となった。

その後、平板測量・遺構実測・写真撮影を行い、それらが終了した発掘区から順次埋戻し作業を行った。また、12月12日にはD区の土層剥ぎ取りを学芸二課横田義章氏の指導のもとに行い、土層剥ぎ取りは後日公開する予定である。さらに、柱掘形を断ち割ったところ、西側掘形の最下層から径50cmの柱根が出土した。実測・写真撮影終了後取り上げ、坂本発掘事務所にて保管している。E区については、遺構面をマサ土で覆った後、埋め戻している。諸々の事後処理を終え、本年度の調査が終了したのは平成9年の3月6日であった。

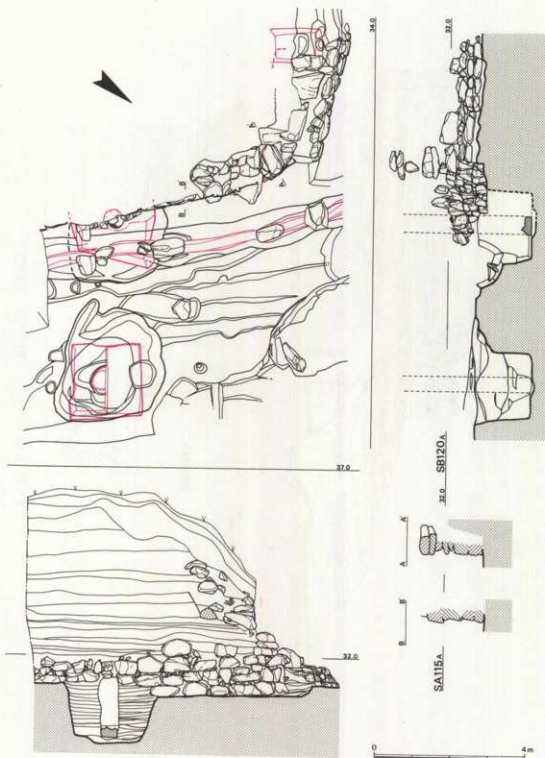
調査地番は太宰府市大字吉松字星ヶ丘447-1他、大野城市下大利2丁目1番地他で、調査面積は約500㎡である。調査期間は平成8年4月10日～7月8日、8月26日～平成9年3月6日である。

検出遺構

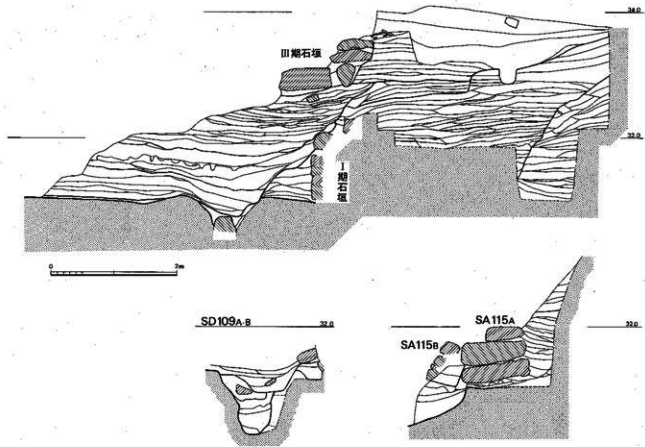
今回報告する遺構は、先年度未報告であった石垣SA115A・溝SD109A・B、経塚SX111と本年度検出した門遺構SB120A・B、路面遺構SX127、柱穴列SA128、経塚SX112・113などである。なお、遺構の説明にあたっては、博多側を北にして切り通し以東の土壘を東土壘、同じく以西を西土壘とし、切り通しの東壁を右壁面、西壁を左壁面とした。また、所謂上成土壘を土壘本体とし、土壘の最上部を頂部、博多側の中段平坦面を中段テラス、裾部を土壘基底部、博多側下成土壘を切り通しの東西で東基底部・西基底部と記す。



第52圖 水城跡西門周辺測量図



第53圖 石垣SA115A・B、門建物SB120A実測図



第54图 石塚SA115A・B、溝SD109A・B土层图

石垣

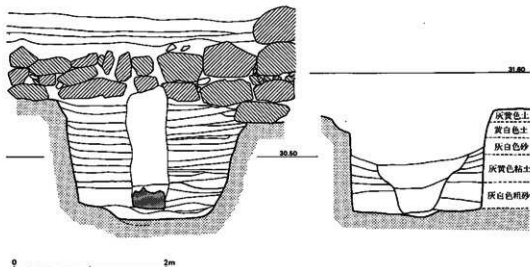
SA115A 昨年度、西土塁の北隅部で検出していた石垣である。石積みは硬めの地山面を露出させ、大きいもので70×40cm前後、小さいもので30×20cm前後の花崗岩の割石を水平を意識して積んではいないが、大きい石と石の隙間を小石で充填しており、長方形切石を整然と積み上げた御所ヶ谷神籠石などの水門部に見られる石塁と比較すると極めて雑であり、水城の場合、裏込め石はみられないものの近世城郭の野面積みに近い印象を受ける。また、石積みは北隅部で6段、中央部で1段、南隅部では石が抜かれ、掘形を確認したに留まる。石垣本来の高さがどこまであったかは、III期門建物整地の際に壊され定かでないが、石垣の機能が切り通し壁面の崩壊防止にあったとするならば、切り通し法面全面を覆っていたものと考えたい。

また、石垣西端の背面にトレンチを入れたところ、石垣の掘形を検出した。その部分の土層を観察すると、第54図上段右端部分に山形の土盛りが見られる。この部分は茶褐色土・灰色砂・灰黄色土を割合雑に盛っており、石垣と落ち込みとの間は黄灰色粘土と灰色粘土及び灰白色砂を互層に積んでいる。これを復原すると、旧地形を整形した後、土塁の核ともなる山形の土盛りを築き、石垣を並べる範囲の裾廻りをカットし石を据える。次に、石を堰板代わりに利用し、石と山形の土盛りとの間に土を水平に入れ、突き固める。石積みと土の突き固めとを交互に繰り返し、法面部を築いたものと推察される。

門建物

SB120A SA115Aの屈折部から4.5m南側の石垣際で径0.5mの空洞(柱痕跡)が現れ、これ

SB120



第55図 門建物SB120柱掘形断面図

を手がかりに柱掘形を検出した。西側掘形は東辺長1.9m、石垣際で2.25m、深さ1.35mを測るが、西半部が石垣の下に潜るため北辺長1.6m、南辺長0.8m程度。掘形の埋土は茶褐色土を10cmほどの厚さで版築状に突き固めており、よく締まっていた。掘形を断ち割ったところ、柱根の下部から埋土下位にかけては白色粘土（厚さ0.5m）を入れており、径52cmの柱根が高さ25cmほど遺存していた。奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏の鑑定によると杉材であった。また、空洞部分上部には30cm大の石が2個あるが、この位置に門の柱を建て、柱半分は露出させるが、半分は石垣に埋設していたのが、柱が腐ったことにより石が柱底に落ち込んだものとみられる。なお掘形はSD109に切られ、溝内には石が落とし込まれていた。

東側掘形は検出時点での上面形が3mほどの楕円形を呈し、中にはⅢ期整地土が入っていたが、それを掘り下げると北辺長1.88m、東辺長1.88mの正方形の掘形が現れた。検出面からの深さは1.3mを測る。掘形を断ち割ったところ柱の抜き取り穴が確認されたが、穴の下端が径48cmの円形を呈することから柱の圧痕は留めているものとみられる。柱根の心から抜き取り穴の中心までの距離は4.22m（14尺）を測る。

この門遺構が四脚門形式を成すとの想定のもとに南半部及び東土塁SA103際で詳細に確認を行った。E3区においては硬化面を除去し、灰黄色の地山まで掘り下げたが、柱掘形は検出できなかった。さらに、SB110柱掘形を半載して確認したが、検出されない。また、西土塁中央においてもⅢ期整地層を掘り下げて確認したが、掘形は存在しなかった。以上のことから、当門遺構は控柱をもたない本柱だけの簡単なつくりの門と判明したが、西側柱根と東側石垣までは11.5mの間隔を有することから、柱掘形がもう1個存在する余地は残されている。しかし、その箇所は市道部分であるため調査できていない。

SB121B SB120A東側掘形の上面には長径3.4m、短径2.8m、深さ0.3mの浅い楕円形土壌があり、掘形と重複している。また、SD109BがSB120Aと切合う箇所の東壁は九く袂れ、土壌状を呈する。その中には50cm大の平らな石と30cmほどの石が3個据えられていた。西土塁中央ではSA115Aの石垣が途切れること、SD109Bの上面には40cmほどの平らな石を置き、締まりのある黄白色粘質土を入れていた。さらに、かつて西門の切り通しからは門礎石が出土していること。西土塁北西斜面部には薄層館式の軒瓦が散布していることを合わせて考えると、8世紀前半代において礎石の門建物が存在していたことは確実であり、先の土壌状の落ち込みを礎石の根石掘形とみることも可能かと思われる。

その様な視点で遺構図を再検討すると、切り通し中央に2.9×2.1mの東西に長い円形土壌が存在する。この土壌の埋土は黒色土であり、近現代の遺物が入っていたことから攪乱墳と考えていたが、規模・レベル的にも北側の楕円形土壌と同じである。また、その3m南側にも同じく攪乱墳とした土壌がある。これらを総合的に考察すると、中央の攪乱墳が扉を支える本柱を据えた礎石の抜き取り穴と想定され、SB120Bは瓦葺きの礎石建物で、門の形式としては八脚門と

推察される。なお、規模に関しては不確定要素が多いが、南北は2間で10mほど、東西は石垣間に納まることから10mほどであろうか。

溝

SD109A SA115Aの0.2~1.0mほど東側で、石垣にはほぼ沿って掘削された溝で、切り通し部を南北に貫ぬく。上面幅0.3~0.5m、底面幅0.1~0.2mと細身の溝で、レベルは中央部が高く、南北両側が0.2m下がっている。埋土下層からは須恵器杯が2点出土した。当溝は築塼当初の門を切っているが、8世紀前半代とみられる礎石門建物に切られることから、時期的には7世紀末~8世紀初頭に納まるが、その性格については判然としない。

SD109B SD109Aとほぼ重複して乗っかるが、石垣から北に6mの地点で分岐している。なお、当溝もSB120Bに切られる。溝の規模は北端で幅0.9m、深さ0.3m、南端で幅1.6m、深さ0.6mであるが、SD109同様中央部が高く、南北両端に下がっている。また、SD109Aとの境の最下層には砂粒が薄くではあるが堆積しており、当溝は流水の痕が認められた。

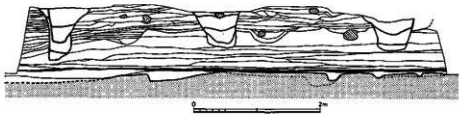
路面

SX127 切り通し部分は軟質の地山である茶褐色土を除去し、硬めの赤褐色土を露出させている。北端部での硬化面は厚さ1cm足らずであるが、土器細片・砂利を叩き込んでいる。E1・2区においては地山直上が路面となるが、E1区では瓦片は少ない。また、SB120Bが位置するE3区では、地山と硬化面との間に灰色粘土の間層がみられるが、厚さは2~8cm程度であることからII期門建物に伴う基壇は存在しない。しかし、SB120Bと北端部との比高差は1.0mあるが、南端部との比高差は10cmほどであり、門の北面においては緩やかに傾斜している。

さらにSB120Bの北側には幅0.5~0.8mの溝状の浅い凹凸があり、併走して走る。また、底面には土器・小礫が叩き込まれており、轍と考えられる。

SB110

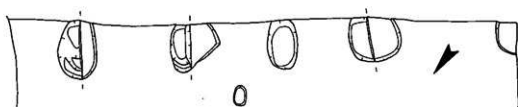
22.80



第56図 門建物SB110下層土層図

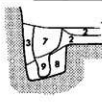
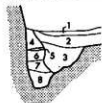
柱穴

SA128 K区中段テラス土塁裾部で5個検出したが、西端の柱穴は埋土が他の柱穴に比して硬く締まっていたことから除外している。柱穴は長径0.6~0.8m、短径0.4~0.7mほどの長円形



SA128

36.20



- 1 灰色砂と黒灰色粘土
- 2 赤褐色土と黄色粘土
- 3 ②より赤褐色土多し
- 4 ②より黄色粘土多し
- 5 赤褐色粘土
- 6 黄褐色粘砂
- 7 灰色粘砂
- 8 ②に灰色粘土混じる
- 9 ①とマサ土

0 2m

第57図 柱穴列SA128実測図

を呈し、平坦面からの深さは0.5m前後を測る。また、柱穴の間隔は1.2~1.4mとややばらつきが見られるが、土層際で検出しており、堰板支柱の柱穴と考えられる。東側の柱穴2個は北側にテラスを有し、埋土も乱れていることから柱自体は抜かれているものと判断した。柱穴からは遺物は出土していない。なお、権列はA・D・K区頂部及び中段テラスにおいても検出されしていない。

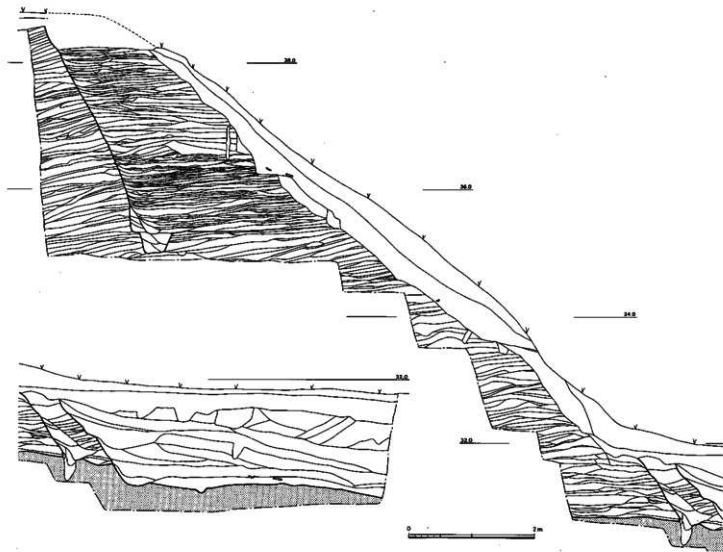
土壌

SK128 SA115Bのすぐ北側で検出した落ち込みで、北半部は未掘。南辺は2mほどになるか。埋土は黒紫色土と黄褐色土との混合土であり、新しい印象を受けた。

D区土層断割トレンチ

III期積み土の状況と中段テラスとの関係を把握するために北・東・南の3方向にトレンチを設定し掘り下げた。また、北トレンチは土層を半載する格好で、基底部まで延長した。その結果、北・東のトレンチでは築堤当初の土層上端の線が確認できたが、南トレンチでは確認できなかったことから、形に埋めていることが判明した。

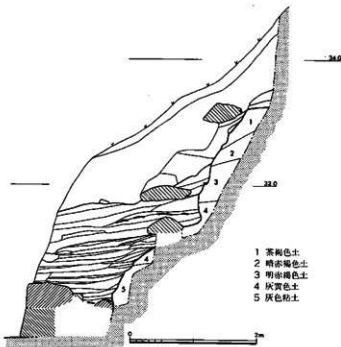
また、北トレンチでの積み土の状況は、上位1/3ほどが赤褐色土と黄褐色砂質土の互層で、中位は赤褐色土とマサ土の互層で非常に細かい。下位は赤褐色土を主体に黄褐色砂質土・マサ土を互層に積んでいた。これらは、まさに版築土と呼べるくらい緻密で、唐鍬で掘っていても火花が出るほど硬く締まっていた。興味深いのは、壁にもたせかけた積み土の端部が上方に跳ね上がり、土層もやや厚めである。これは、壁と接する部分は突き固めがやり難いために厚さに違いが生じたものと考えられる。なお、壁面の傾斜角は下位が70°で、上位は60°を測り、上端か



第58図 D区土層断り土層図

ら3.5m（標高35.4m）で中段テラスに達する。また、裾部では支柱の穴を検出している。ちなみに、K区中段テラスの標高は35.6mで、両者間は13mほどの距離を有するが、その間はほぼフラットと言うことになる。

また、東土塁西端部では軟質の茶褐色土の地山が標高33.3m付近の高い位置にあり、路面との比高差が2mを有することから、土塁部分の築堤に際しては旧地形を最大限利用し、門が構築される通路部分は土質の硬い層まで掘り下げて地盤強化を図る工夫がなされていると言える。



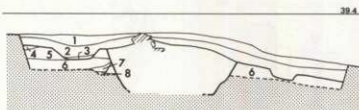
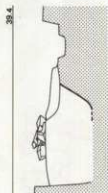
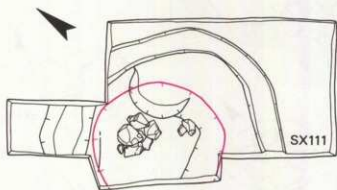
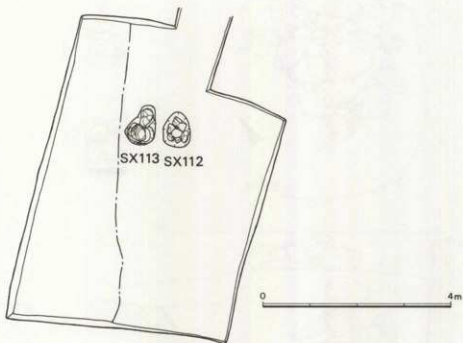
第59図 東土塁西端土層図

経塚

東土塁の頂部平坦面において3基検出した。頂部には桧が植樹されており、SX111は東半部だけの調査となった。

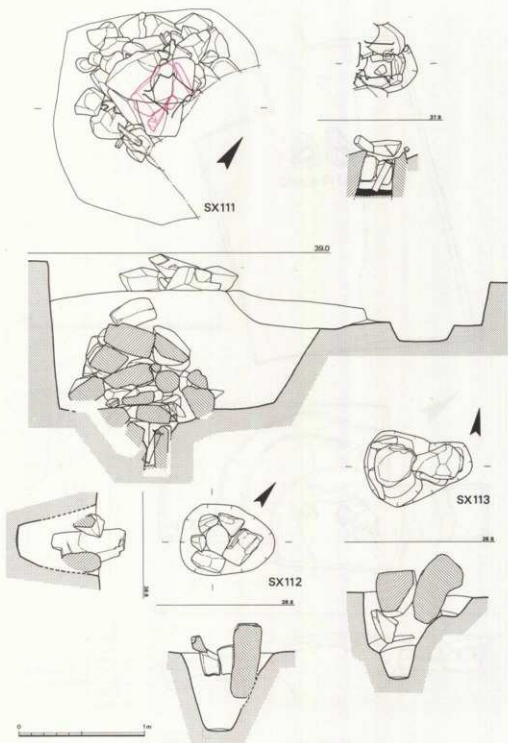
SX111 東土塁西端に位置する。検出以前は、中央の石が表土から僅かに露出していた状態であった。掘形の上には壇状の外部施設があり、30～50cm大の花崗岩を一段方形に組んだもので、現状で0.7×0.9mを呈するが、南側にも動いたとみられる石が2個あるため当初の規模は明確ではない。表土を除去すると内径3.7mの周溝が検出されたが、整円ではなく、隅丸方形に近い。幅0.46～1.05mで、深さ0.24mの規模。掘形は上面が2.8mの円形であるが、底面は長軸1.7mの多角形を呈する。掘形の深さは壇の下端から0.9mを測る。また、掘形の縁は石壇が乗る褐色土を若干掘り下げて検出しており、当経塚は土饅頭状の盛土を有していたことが判る。

内部施設は、掘形底面のやや北側を径60cm、深さ40cmほど掘り窪めた後、底面に石を敷き、5個の石を方形に組み合わせ内法26cmの小石室を作る。ここに経筒を安置し、その周囲に木炭を厚さ5cmほど入れた後、小石室の蓋を被せる。さらに、石子詰め状に10～45cm大の花崗岩を90cmの高さに積み上げ、排土で掘形を埋め戻している。また、石積みの途中で短刀2本を納納しているが、鏡・利器は魔除けの意味をもつものとされている。



- 1 表土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 赤褐色土と白色砂の互層
- 6 ⑤より赤褐色土多し
- 7 赤褐色土
- 8 白色砂

第60図 経線SX111・112・113配置図



第61図 経塚SX111・112・113実測図

SX112 SX111の7m東側に位置する。表土除去後、SX112の立石と113の立石とが検出されたため先の石壇を想定し、その中央にトレンチを入れたが掘形・石積みなどは検出されなかった。周囲を若干掘り下げ再度検出を行い、石組みを発見した。石組みは東側に長さ60cmの大きめの石を立て、それを小さめの石4個で繋いでいる。掘形は75×57cmの楕円形を呈するが、深さは石の下端より25cm下がっており、経筒の出土はなかった。また、埋土は硬く締まっており、古い段階で盗掘を受けたものと思われる。埋土中からは木炭の細片が出土した程度。

SX113 SX112のすぐ北側で検出した。掘形は86×60cmの不整形を呈し、深さ68cmを測る。掘形内には長さ57cmと36cmの石が残るが浮いた状態であり、経筒も検出されなかったことから盗掘を受けたものとみられる。埋土中からは木炭の細片が出土したのみ。

出土遺物

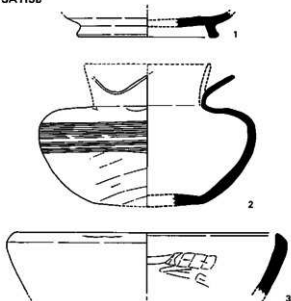
SA115B出土土器 (第62図、図版52)

須恵器

杯(1) 1は底部破片で、高台径は11.2cmに復元した。高台は低めで、端部を丸く納める。

壺(2) 2は長頸壺の1/3ほどの破片であるが、焼き歪みにより口縁部が大きく開く。器面調整は外面が胴部中位をカキ目、下半はへら削りで、内面はナデによる。11.5cmほどの器高になるか。1・2は石列前面より出土した。

SA115e



SB120A



SB120b



第62図 SA115B、SB120A・B出土土器実測図

鉢(3) 鉄鉢形で、口唇部は三角形に尖る。外面ナデ、内面はケズリ後ナデ調整による。

SB120A出土土器(第62図、図版52)

須恵器

杯(4) 立ち上がりが小さく内傾し、形態的には蓋とも考えられるが、底部が平らであることから身として実測した。1/2ほどの破片で、器高3.0cm、復原受部径11.6cm、底径5.4cmを測る。焼成は軟質で、灰黄色を呈する。西側掘形埋土上位の出土である。

SB120B出土土器(第62図、図版52)

須恵器

蓋(5) 口縁端部の立ち上がりが弱く、天井部には大きめの扁平な揃みを付す。器高2.3cm、口径15.1cm。埋土上位と柱抜き取り穴出土品が接合した。

SD109A出土土器(第63図、図版52)

須恵器

蓋(1・2) 1は口唇部が若干肥厚し、面を持つことから短頸壺の蓋になろう。2は内面にかえりを有する口縁部の小片。1はE3区、2はE2区の出土。

杯(3~5) 3・4は体部と高台との境にシャープな稜を有し、体部は直線的に開く。また、高台端部は小さく突出する。器高5.0cm、口径14.0cm、高台径10cm前後を測る。5は底部の破片で、左右で体部の立ち上がりが異なり、底部はへたばる。3・4はE2区埋土下位の出土で、5はE3区埋土上層より出土した。

壺(6・7) 6は長頸壺の頸部破片。中位にへら抜き沈線を1条施すが、不明瞭なものとなっている。E2区埋土下位の出土。7は胴下半部の資料で、E2区溝出土品とE2区Ⅲ期整地層(32層)及びD区断割りトレンチ出土品が接合した。肩部の稜はシャープで、八字形の高台は高めである。胴部中位以下をへらケズリし、内面はナデによる。焼成は堅緻で、小豆色を呈する。

土師器

高杯(8) 裾部の破片で、脚径は12.4cmに復原した。端部はへら先で沈線状に窪める。内外面とも赤橙色を呈する。

SD109B出土土器・鉄器(第63図、図版52)

須恵器

杯(9~11) 9~10は有高台の杯、11は無高台。9は1/4ほどの破片で、復原高台径10.8cm。高台は高めで、体部は内湾気味である。10の高台は体部際に寄っている。9はE1区西端部、10はE3区、11はE2区の出土であるが、Ⅲ期整地層の遺物が混入している可能性がある。

土師器

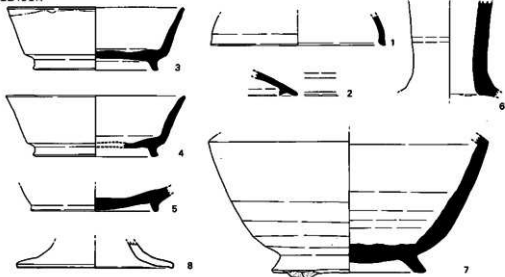
蓋(12) 口縁部小片であるが、口径12.8cmに復原した。外面は細いへらミガキで、内面には縦方向の暗文がみられる。胎土に石英を含むが精良で、赤橙色に焼き上がる。E2区の出土。

盤 (13) 1/2ほどの破片で、高台径14.8cmに復原した。高台は低く小さめ。器面調整はヘラミガキによる。E 2 区の出土。

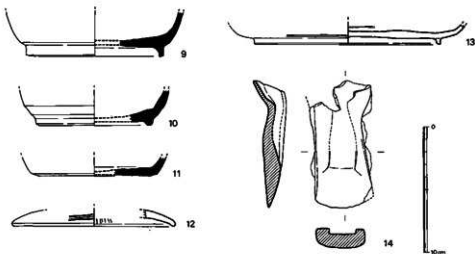
鉄器

斧 (14) 袋状鉄斧で、残存長10.2cm、刃部幅は4.6cmになろう。酷使によるものが袋部は外反している。E 2 区上層からの出土であるが、Ⅲ期整地層に伴うもの。

SD109A



SD109B



第63図 SD109A・B出土土器・鉄器実測図

SK129出土土器 (第64図、図版52)

須恵器

蓋 (1・2) 口縁部の立ち上がりは弱い。天井部は低く、扁平な轆を貼付する。器高2.5cm、復原口径13.6cm。2は摘み部付近の破片で、生焼け品。1は土坑内ではなく、SK129を埋める黒紫色土下位の地山直上の出土。

杯 (3) 高台径に比して器高が高めの器形で、底部はへたばり気味。生焼け品。3も1同様、黒紫色土下位の地山直上の出土。

SX127出土土器 (第64図)

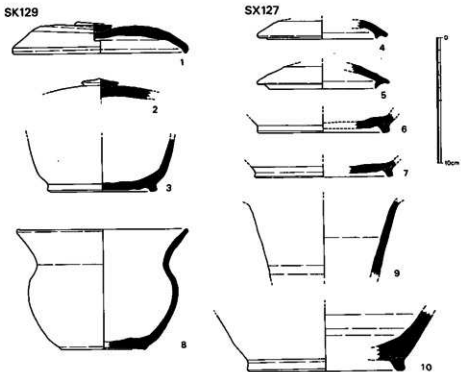
破砕し路面に叩き込んでいた土器群で、何れも小片であるため傾き・復原径に疑問を残すが、参考までに掲載しておく。9がE2区の出土で、それ以外はE3区の出土。

須恵器

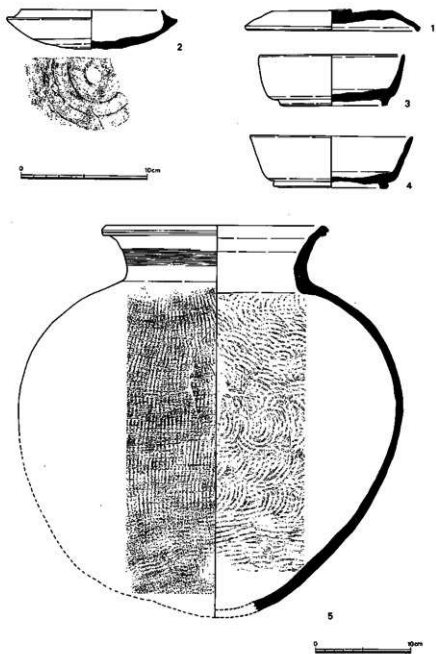
蓋 (4・5) 4・5は内面にかえりを有する蓋で、5のかえりは口縁部よりも突出する。

杯 (6・7) 6・7は底部の破片。高台は低く、端部寄りに付している。

壺 (8~10) 8は広口壺で、口縁部は大きく開く。器高9.5cmで、口径は13.6cmに復原した。



第64図 SK129、SX127出土土器実測図



第65图 III期版筑土层出土土器实测图

内外面ともナデ調整による。また、外底部には火禰がみられる。9は長頸壺の頸部破片。10は底部破片で、高台は体部際貼付する。

Ⅲ期版築土層出土土器（第65図、図版52）

ここで紹介する土器は、Ⅲ期門建物に伴うE2区の整地層中から出土したもの。

須恵器

蓋（1） 口縁部内面の段が不明瞭で、天井部には大きめの扁平な掬を貼付する。内面には全面に墨痕があり、転用硯として使用したもの。器高1.7cm、復原口径13.6cm。

杯（2～4） 2は杯身で、たちあがりは低く内傾する。器高3.1cm、復原口径9.8cm。口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調整。外底部には十字形のヘラ記号を付す。3・4は有高台の杯で、3の体部はやや内湾する。4は直線的に開く。高台は断面四角形を呈する。器高は3・4とも4.1cm、口径は3が11.4cmで、4は12.9cmに復原した。3は35層、4は36層の出土。

甕（5） 球形の胴部に大きく外反する口縁部が付く甕で、口唇部外面は凸帯を削り出す。調整は口縁部ヨコナデ、頸部カキメで、胴部は外面楕格子タタキ、内面円弧タタキによる。器高は42cmほどになろう。口縁部～胴部にかけてはSD109B上部の出土で、底部はB区北側の土塊状の落ち込み出土品と接合した。

E区北西端出土土器・土製品（第66図、図版53）

須恵器

蓋（3～5・13～16） 3・4・14は口縁部内側の段が不明瞭な蓋で、3は天井部に鈕状の掬を付ける。5・13・16は器高が低平で、口唇部を丸く納めている。15はやや高め器高で、口縁部の立ち上がりも割合明瞭である。器高は3が2.3cm、13は1.75cmで、復原口径は3が11.4cm、13は11.8cmを測る。3～5は褐色土層の出土で、13～16は表土からの出土。

杯（1・2・6・7・17） 1・2は有高台の杯。1の体部は短く立ち上がる。器高4.4cm、口径14.4cm。2・6・17は高台と体部との境にシャープな稜を有する。7は口径が小さく、器高が高めであることから杯とした。1・2は赤褐色土、6・7は褐色土、17は表土の出土。

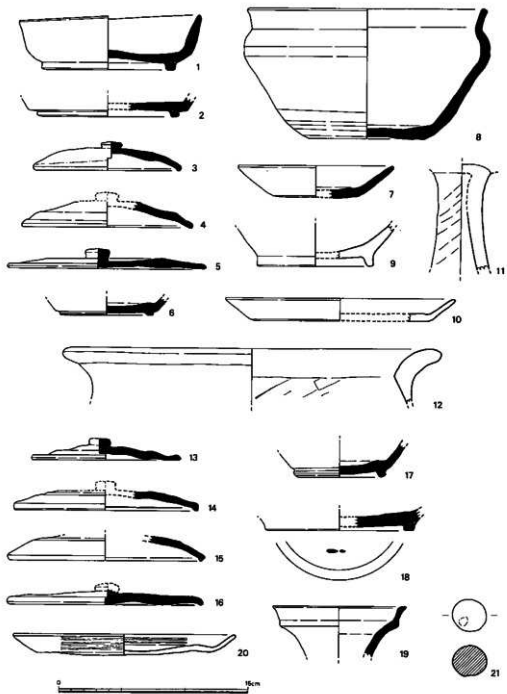
壺（8・18） 8は短頸の広口壺で、口頸部はS字形に屈曲する。器高10.4cm、復原口径19.0cm。18は器肉が厚く、高台径が大きめであることから壺とした。高台は低く、外底面には「一」の墨書がある。8が褐色土、18は表土の出土。

瓶（19） 口縁部は頸部から大きく開き、さらに上方に立ち上がる。口径は10.6cmに復原した。外面は小豆色を呈する。表土より出土した。

土師器

壺（9） 底部資料であるが、体部が開いていることから壺とした。9は褐色土の出土。

皿（10・20） 10・20は体部ヘラ磨き、外面削りによる。20は器高1.7cm、口径17.7cm、底径13.8cm。10が褐色土、20は表土の出土。



第66图 E区北西端出土土器·土製品実測图

- 高杯 (11) 脚柱部の破片で、シボリによる整形。褐色土より出土した。
 甕 (12) 口縁部は肥厚し、端部を丸く納める。復原口径は30.0cm。褐色土の出土。

土製品

- 土玉 (21) 径2.6cmで、表土から出土している。

D区出土土器 (第67図)

須恵器

- 蓋 (1) 天井部破片で、擬宝珠形の撮を貼付している。裾部灰色土の出土。

- 瓶 (2) 底部破片で、瓶もしくは深めの碗か。2も裾部灰色土の出土。

土師器

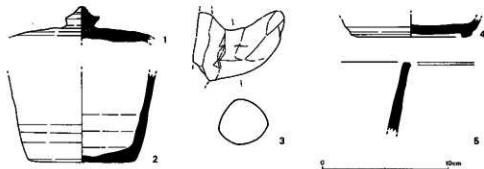
- 取手 (3) 瓶または取手付き甕の取手部。断面形は丸みを帯びながらも側縁に稜が付く。

K区出土土器 (第67図)

須恵器

- 杯 (4) 高台部の破片で、高台は体部際に貼付する。中段テラス上層の出土。

- 鉢 (5) 口縁部破片で、口唇部上面が若干窪む。5も中段テラス上層の出土。 (小田)



第67図 D・K区出土土器実測図

瓦類

平成7年度の調査概報では、軒瓦を中心にその概略を報告した。水城西門跡では平成8年度も調査を継続して実施したことや瓦葺きの建物が門跡だけ(衛舎なども可能性として考えられようが、遺構としては確かめられていない)であり、門の遺構も土塁と土塁との間の狭い空間に限られるという特別な条件でもあることから、丸・平瓦についても不十分なから報告することとした。

軒瓦 (第7～10表)

平成7年度概報では軒丸瓦7種55点、軒平瓦10種40点が出土したことを報告した。これに平

成8年度出土資料を加えれば、軒丸瓦が7種62点、軒平瓦が10種51点となった(第9・10表参照)。平成7年度の調査以後、新しい形式の軒瓦は認められない。さらに、軒平瓦では現代の軒瓦2種を含んでいるから水城西門に用いられた軒瓦は、門の創建期(瓦は使用しなかったと考えられる)から10世紀の廃絶期までで軒丸瓦7種、軒平瓦8種ほどが用いられたこととなった。統計的にみても鴻臚館式・鴻臚館系の出土量が若干増加している程度である。既に各形式の軒瓦の特徴は、既報で報告済みであるが、後項で丸・平瓦について報告する内容と関連させる意味で、軒瓦の丸瓦部・平瓦部の叩打痕・整形痕などについて若干記しておきたい。

なお、土塁頂上部のV地区では、斜格子文の丸・平瓦片を中心に第6類の軒丸瓦1点と第2・7類の軒平瓦1点ずつが出土した(第68図)。このうち、軒丸瓦の丸瓦部の叩打痕と2類軒平瓦

第7表 軒丸瓦の特徴

型式	丸瓦部の特徴	その他	
1	鴻臚館式	玉縁式丸瓦、縄目叩打具痕のものあり	
2	鴻臚館系	玉縁式丸瓦、縄目叩打か	
3	鴻臚館系	玉縁式丸瓦、縄目叩打か	
4	老司系	玉縁式丸瓦、縄目叩打か	
5		玉縁式丸瓦?、不明	
6	園分瓦窯系?	玉縁式丸瓦、斜格子叩打具痕	「平井瓦」の陰刻文字例あり
7		玉縁式丸瓦、不明	

※型式は第9表の瓦当文様に対応

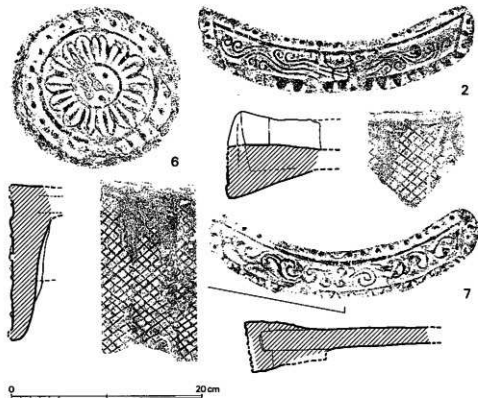
第8表 軒平瓦の特徴

型式	平瓦部の特徴	その他	
1	鴻臚館式	正格子・斜格子・平行線叩きに縄目叩きがある 粘土板桶巻き4枚作り	段頸
2	園分瓦窯系?	斜格子叩打 粘土板桶巻き4枚作り	包み込み式、段頸から曲線頸 「平井瓦」の陰刻字例あり
3		縄目叩打、粘土板桶巻き4枚作り	段頸
4		縄目叩打、粘土板桶巻き4枚作り	段頸
5		不明	包み込み式、曲線頸
6		縄目叩打、粘土板桶巻き4枚作り	段頸
7		斜格子叩打	付段頸
8		不明	曲線頸

※型式は第10表の瓦当文様に対応

の平瓦部の叩打痕とは第68図にみるとおり、同一の叩打具によって打たれた可能性がでてきた。

また、高橋章氏によれば、この軒丸瓦の丸瓦部には陽刻文字「平井瓦」が伴った例があり、軒平瓦2類には陰刻文字「平井瓦」が伴った例があるとされる。軒丸瓦・軒平瓦2類とが同一の工房で製作された可能性が生じてきた。また、頂上部のV地区からこの軒丸瓦などが出土したことから、この瓦は第Ⅲ期門遺構に使用されたものと考えられる。さらに、土壘頂上部からの出土であることから第Ⅲ期の門は重層の門であったと推測する根拠となっている。



第68図 西土壘頂部出土軒瓦拓影・実測図

道具瓦

平成7年度概報では、鬼瓦2点と面戸瓦1点を報告している。今回は、別型式の鬼瓦片1点と完形の面戸瓦1点を新たに加えることができた。

鬼瓦（第69図、図版53）

向かって左側脚部の破片である。表面が大きく破損しているため文様の全体を知ることは難しいが、鬼面だけを表現しているものと思われる。大宰府史跡では新出の資料である。文様は

外周に圏線を配し、連珠文帯を作る。大きく開いた口の部分は外周より一段高く、上歯の一本が見え、下顎部は一段低く表現されている。大宰府式鬼瓦の一種とすべきものと思うが、時期的には9～10世紀頃のものと思われる。左側面下半部と脚下面及び中央の円弧の一部が生きている。裏面は指ナデ。開口部で厚さ3.5cm。砂粒を多く含むが焼成は良い。R地区表土の出土。

面戸瓦 (第70図6、図版55)

縄目印打痕が付く丸瓦を原体とした蟹面戸瓦である。長さ23.5cm、幅14.7cmほどである。内面を大きく面取りする。SK129出土。

文字瓦

既概要報告では、印打具に文字を刻み込んだもの2種「平井」・「平井瓦」と縄目印打の平瓦にへら書き文字のあるものを報告した。前回報告のうち「平井」として報告した瓦は、下一字分が欠落した「平井瓦」である。文字の大きさ、斜格子目が相違していることから文字銘は同一であっても、印打具の種類は別のものである。今回は、丸・平瓦片を収納していた土嚢袋から新たに「介」の字を斜格子文の間に刻んだ丸瓦片4点が見い出されている。斜格子文の特徴から軒平瓦7類との関連が予想されそうであるが、小破片であるため今後の課題としたい。

丸・平瓦片 (第70～72図、第11表)

丸・平瓦片は土嚢袋191袋に収納していた。瓦葺き建物が門の遺構に限定されること(第II・III期の門遺構)や調査区が比較的限られており、瓦片の出土量も余り多量ではなかったこともあって、破片全体の点数を第175次調査で行ったのと同様な方法で、点数を総当たりすることとした。点数を数えるのにあたり、同一遺構出土の瓦片や同一個体と思われるものについては、接合作業を行った上で個体数を数えたが、大半の土嚢袋のものについては点数を数えただけで終わっている。

また、遺構別・地区別の分類・点数計算も行った。そのことから軒瓦と丸・平瓦の組合せや共伴土器との年代的な新知見を得ることを期待したが、特別に紹介できるような事実はなく、調査区全体の統計表を掲載するのに留めた。統計表の分類方法は前記第175次調査で試みた方法と全く同一である。従って、分類表がもつ多くの問題点もそのままである(本書62頁)。ただ、点数を数える作業の中で、丸瓦では99%以上が玉縁式丸瓦であるのに対して、若干数の行基式の丸瓦を認めたこと、平瓦片では鴻臚館式軒平瓦の平瓦部に印打されている平行線文の瓦片が少量認められた点が異なっている。

点数表及び調査によって判ったことを別記すれば、次のような点である。

A. 丸瓦・平瓦ともに縄目印打されたものが最も多い(丸瓦24.9%、平瓦57.0%)。丸瓦の場合、凸面を擦り消し整形するケースは軒丸瓦1類に認められるが、2～4類の軒丸瓦の丸瓦



第69図 鬼瓦拓影

部もこの例と推定されることや、側縁に平行して叩打される斜格子文の場合、叩打痕がそのまま残っているケースが多いことを考慮すれば、縄目叩打された丸瓦は少なくとも縄目平瓦と同程度の出土率と考えられる。

- B. 調査時点で、第III期門跡の柱穴下の層から老司I式平瓦片（叩き締めめの円弧を描く平瓦）の小破片が検出されたが、これ以外では調査区全体から老司I式平行期の平瓦の出土はない。斜格子文の多くの瓦片は、長さ20cm以上の叩打具により側縁と平行に叩打されている。
- C. A・Bのことから、水城跡西門に葺かれた丸・平瓦の50%以上が凸面に縄目叩打された瓦であり、長手の叩打具を用いて瓦側縁に平行して叩打された斜格子文のものより多い。格子目瓦のうち、叩き締めめの円弧を描く一群の瓦は殆どない。
- D. 発掘調査区と検出遺構の関係から、R・V・W地区に瓦片が集中している。などのことが挙げられよう。

さらに、この結果と軒瓦との関係を知るため第9～11表を参考にして考えれば、

1. 出土した軒瓦ではそれぞれのもつ年代観から、鴻臚館式軒瓦が8世紀初頭のものと考えられるのが最も古く、軒丸瓦で39%、軒平瓦で35%の出土率を占めることから、門が瓦葺きとなったのは第II期のことであり、第I期の建物は瓦葺きではなかった。
2. 鴻臚館式系軒丸瓦である軒丸瓦第2・3類及び老司系軒丸瓦4類は、出土点数の上で鴻臚館式軒丸瓦を補う程度の出土点数を示す。その丸瓦部も縄目叩打されたものであった可能性が高い。
3. 軒平瓦では第3・4・6類の平瓦部に縄目叩打具痕がみられる。軒平瓦第3・4・6類を鴻臚館式軒瓦の用いられた時期と同時期とみることが現段階ではやや難しい。
4. 丸・平瓦片のうち、凸面に縄目叩打具痕を認めたものは、1・2・3で記した軒瓦に伴うものであり、軒瓦の出土比率から考えれば、鴻臚館式軒瓦が門建物に用いられた時期の丸・平瓦が最も多い。従って、第II期の門は縄目叩打された丸・平瓦が葺かれ、その軒先を鴻臚館式軒瓦が飾ったと考えられる。
5. 軒丸瓦第6類、軒丸瓦第2・7類の丸・平瓦部に斜格子文がある。軒丸瓦第5・7類、軒平瓦第5・8類の丸・平瓦部の叩打痕については不明であるが、それぞれの瓦当文様や丸・平瓦の瓦当への接合方法からみると丸・平瓦は斜格子文であった可能性が高い。
6. 第67図はV区土室頂上部から出土した軒瓦3種である。3種類の軒瓦の丸・平瓦部には、ともに斜格子目の叩打痕がみられた。
7. 軒丸瓦5・6・7類、軒平瓦第2・5・7・8類の出土点数及び出土比率からはどの軒丸瓦・軒平瓦が主体になったかは不明であるが、第III期の門跡に葺かれていた丸・平瓦は長手の叩打具を用いて側縁に平行に叩打される斜格子文の瓦が主として用いられたと考えられる。

以下に、土嚢袋から選びだした丸・平瓦片を若干紹介する。

丸瓦（第70図、図版53～55）

1・2は行基式丸瓦である。1は狹端部付近の破片である。凸面は狹端部付近でヨコナデ、胴部は縦方向にナデられ、縄目叩打具痕を消している。凹面では布筒の布が寄った痕が数本みられる。分割は内側狹端から広端に工具を入れて割っている。従って側縁には載面と破面が残る。砂粒を含む粘土を用い、灰白色でやや焼き上がりは悪い。SA115付近の出土。

2は広端側の破片である。凸面広端部寄りではヨコナデ、胴部は縦方向のナデにより縄目叩打具痕を消している。凹面には糸切り痕と布筒痕がみられる。従って、粘土板を用いて作られた丸瓦である。砂粒を含む粘土を用い、暗灰色に焼き上がる。E区北西隅から出土している。行基式丸瓦は出土点数からみて、第II期の門の時期に補助的に用いられたものと思われる。

3は長手の斜格子目を刻んだ叩打具により側縁と平行した叩打痕がみられる玉縁式丸瓦である。広端部を打ち欠いて用いられているが、先端部の一部は残っている。胴部広端寄りの部分と玉縁寄りの部分をヨコナデしている。玉縁は回転台上でヨコナデ整形し、作り出している。凹面には布筒痕が付くが、布は疲弊している。分割には円筒の内側玉縁方向から工具を入れて割っている。従って、側縁には載面と破面が残る。長さ34.0cmほどで、胴幅17.5cmほどである。砂粒を含む粘土を用いており、淡黄色を呈し、焼き上がりはやや悪い。D区表土の出土。

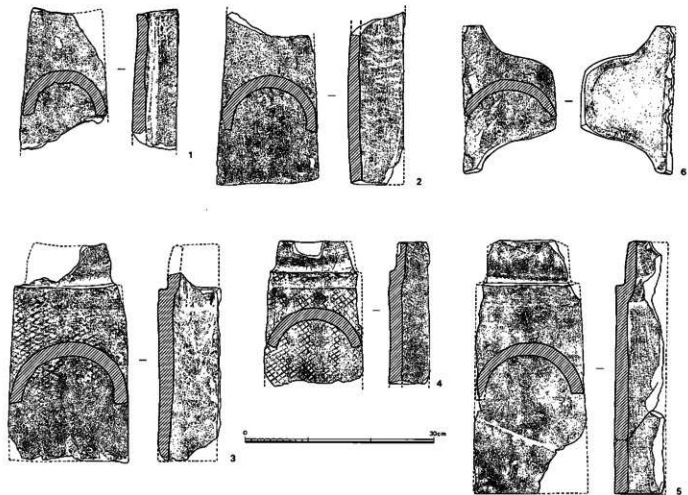
4は斜格子目の玉縁式丸瓦である。広端から胴部の1/5ほど及び図に向かって右側の側縁が打欠かれている。胴部玉縁付近から玉縁部は回転台上でヨコナデによって作り出している。凹面には粗い布筒痕が付く。分割方法は3と同様である。この丸瓦に残る斜格子文は第67図の軒丸瓦6と軒平瓦2の丸・平瓦部に残る叩打具文と同一のものとみられる。砂粒を含む粘土を用い、淡茶灰色で硬く焼き上がる。V区土壘頂部からの出土である。

5は広端部右側を失い、側縁部左側が打欠かれている。凸面胴部は玉縁寄りの部分をヨコナデするが、他の部分は縦方向にナデられ、縄目の痕が僅かに見られる。玉縁部分はヨコナデ仕上げ。凹面には目の細かい布筒の痕と粘土板の合わせ目を認める。玉縁は後から粘土を付けたして作られている。長さ40.5cm、胴部残存幅17.5cm。砂粒を含むが、良質の粘土が用いられ、灰褐色で焼き上がりも良い。D区土壘断面トレンチから出土した。この瓦は長さ・幅の点で鴻臚館式に伴う丸瓦よりやや大きく、老司式平瓦（粘土紐桶巻き作り）に近い感じである。

平瓦（第71・72図、図版55～57）

1は斜格子文の中に縦線を配した叩き目が側縁と平行して叩かれた平瓦である。凸面では狹端縁を僅かに面取りするが、胴部には叩打具の痕が付く。凹面は被布の痕が粗く付く。多量の砂粒を混ぜた粘土が用いられ、淡黄色で焼き上がりも良い。D区土壘頂上部の出土。

2は平行線叩きと縄目叩きが凸面に認められる。平行線文は鴻臚館式軒平瓦に伴うものである。この平瓦片の場合、広端縁を残すから軒平瓦の一部ではなく、平瓦そのものとして作られたと考えて良い。凹面には模骨の痕、被布痕、粘土板の合せ目痕が認められる。側縁は丁寧な工具で整形されている。厚さ2.0～2.7cmあり、他の平瓦と比較して厚い。細かい砂粒を含む良



第70图 丸瓦・道具瓦拓影・実測图

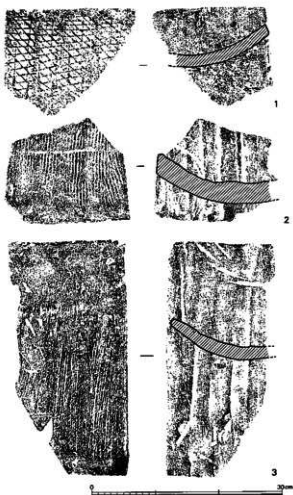
質の粘土を用い、黒色に焼し仕上げされている。W区表土の出土。

3は凸面縄目印打の平瓦である。狭端・広端部では横方向のナデで縄目を擦り消している。凹面で横骨痕、被布痕、粘土の合わせ目痕が見られる。凹面側縁は幅広くへら削りされている。側面はへら削りされて丸みを持つ。砂粒を含まない精良な粘土が用いられている。灰白色で焼き上がりはやや甘い。長さ38.5cmと大きく、九瓦5とセットになる可能性がある。H区の出土。

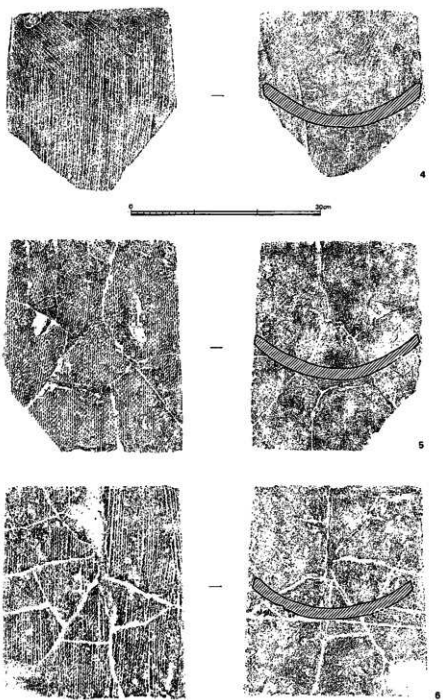
4は広端側を欠く縄目印打文の平瓦である。凸面には縄目印打文の他に明瞭な糸切り痕がみられる。側縁端部に細い塊状のアトリ痕が認められるから凹型整形台を用いて二次的な整形を行ったものと思われる。凹面には被布の痕、糸切り痕が見られる。また、2・3ほど明瞭ではないが、横骨と思われる痕も観察される。側面は工具で二面の面取りがされている。砂粒を混ぜた粘土を用いて、明褐色で硬く焼き上げている。V区断ち割りトレンチ北斜面の出土。

5・6は凸面を丁寧に縄目印打した平瓦である。縄目は両端部まで残り、凸面にはナデなどの痕はみられない。凹面は両者とも被布と糸切り痕を認める。側縁は工具で丁寧に整えられている。細かい砂粒を少量含むが、良質の粘土が用いられている。黒色から褐色を呈しているが、焼し仕上げされたものだろう。5・6とも東土屋北西端版築土層の瓦層からの出土である。長さ34.0cm、狭端幅23.8cm、広端幅27.7cmほどのほぼ同じ大きさの資料である。厚さや横骨痕が明瞭でないことから鴻臚館式平瓦とやや異なるが、大きさや焼し仕上げされている点は鴻臚館式軒瓦に類似する平瓦である。

(栗原)










第71図 平瓦拓影・実測図(1)













第72圖 平瓦拓影・実測圖(2)

第9表 水城跡西門地区出土軒瓦瓦点数表

番号	型式	出土地区名									合計	備考
		P	Q	R	S	U	V	W	Y	不明		
1				6	2		1	8	5	2	24 (39%)	
2			1								1 (2)	SA104出土
3				2			1	1	1		5 (8)	SD101埋土出土
4					1		1	1			3 (5)	SX108出土
5				1			1	4	1		7 (11)	SD101出土
6				1			3		2		6 (10)	SD101出土 土基頂部出土
7					1			4			5 (8)	SD101埋土出土
	不明			3	2			6			11 (17)	
	合計		1 (2%)	13 (20)	6 (10)		7 (11)	24 (39)	9 (15)	2 (3)	62 (100%)	

第10表 水城跡西門地區出土軒平瓦点数表

番号	型式	出土地区名									合計	備考
		P	Q	R	S	U	V	W	Y	不明		
1			1	1			5	11			18 (35%)	SD101掘土出土
2				2			5	2			9 (17%)	土層頂部出土
3			1					3			4 (8)	SD101掘土出土
4							1	3			4 (8)	
5							1	2			3 (6)	SD101掘土出土
6				1				1			2 (4)	SD102出土 S 27
7				1			1				2 (4)	土層頂部出土
8											1 (2)	SX119出土
9							1				1 (2)	
10							1				1 (2)	
	不明			2				4			6 (12)	
	合計		2 (4)	7 (14)			15 (29)	26 (51)	1 (2)		51 (100%)	

第11表 水城跡西門地区出土瓦点数表

地区	丸瓦片				合計(%)	平瓦片				合計(%)
	縄目	格子目	捺消し	その他		縄目	格子目	捺消し	平行線	
Q						4				4(0.1)
R	159	53	260		472(23.3)	1009	115	229	2	1355(21.7)
S	30	7	66		103(4.9)	191	22	72	2	287(4.6)
V	207	264	368	行基1 (縄目)	840(39.9)	794	578	572	5	1949(31.2)
W	120	57	469	平行線1 行基3	650(30.6)	1468	324	664	17	2473(39.6)
Y	8	6	25		39(1.8)	75	19	59	1	154(2.4)
不明	2	1	9		12(0.5)	22	3	2		27(0.4)
合計 (%)	526 (24.9)	388 (18.3)	1197 (56.6)	5 (0.2)	2116(100)	3563 (57.0)	1061 (17.0)	1598 (25.6)	27 (0.4)	6249(100)

SX111出土経筒・利器・垂飾品・経巻・木製品 (第73~75図、図版58・59)

経筒

銅板製の蓋と筒身からなり、筒身の中には炭化した経巻・経軸、短冊形の添え木7本が入っていた。なお、経筒・添え木を赤外線カメラで観察したが、銘文はみられない。

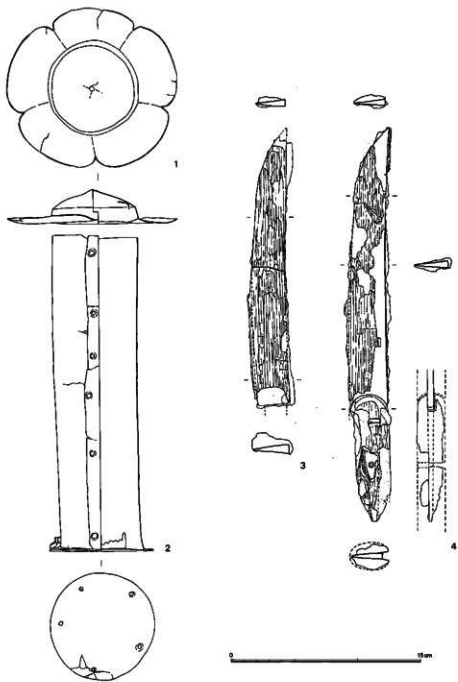
蓋(1) 山形帽状を呈し、高さ2.8cm、径12.8~13.5cm、厚さ0.5mmを測る。蓋は円形の銅板を筒身に被さるように中心を叩き窪め、鈎の5箇所に入り込みを入れて花卉を表現している。弁間は線状に隆起し、花卉相互を区画している。弁端には環状の垂下穴は穿っていない。また、内壁には紙片が付着しており、経巻の包装紙と考えられる。

筒身(2) 円筒形を呈し、高さ25.0~25.3cm、口径5.6~5.8cm、底径8.2~8.4cm、厚さ0.5~1.0mmを測る。高さの割に径が小さく、細身の印象を受ける。筒身は銅板を丸め6箇所を鉄留めし、底部は裾を折り曲げ底板とを5箇所鉄留めし接合している。筒身内底面には炭化した経巻の残欠が1本分付着しており、内壁の中程には紙片が僅かながら付着しているのが観察される。また、外面にはガラス玉が側面に3箇所、底部に2箇所付着しており、計11個を数える。

利器

短刀(3・4) 積み石中に入れられていた短刀で、2本出土した。3は鋒と柄を欠くが、残存長21.6cmで、背の厚さ0.7cm。木質が遺存しており、鞘に納められていたのは判るが、柄は埋土中から検出されておらず、副納する時点で既に柄を欠いていたと思われる。

4は全長31.4cmで、鞘付きの状態が副納されていた。関は背と身の両方にあり、刀身22.6cm、柄8.8cm、背の厚さ0.5cmを測る。鋒は切り出しナイフ状に鋭角に尖る。鞘は呑み口式でU字形を呈し、柄はそれに合うよう丸く切り込んでいる。目貫は柄の中程にあり、柄頭から1.9cmの部分には柄巻の一部が遺存している。

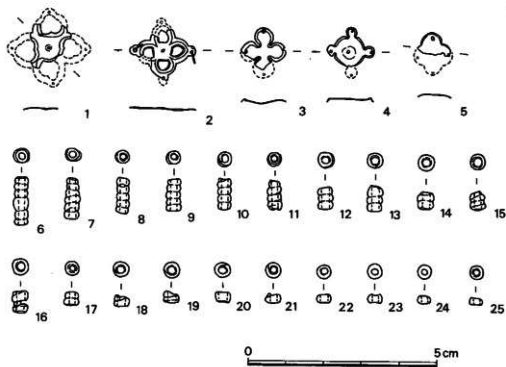


第73圖 経塚SX1111出土経筒・利器実測図

垂飾品

飾り金具（1～5） 1～5は金銅製の飾り金具で、非常に薄い。他にも数十点ほど出土したが、細片であるため残りの良い5点を図示する。1は中央部分しか残っていないが、透かしに稜が入ることから三ツ葉状の透かしになるものと思われる。2は透かしを4箇所設け、突起部分にはクリップ状の鎖が付いており、4方向に垂下させたことが判る。3・4は透かしがないもので、3は四葉形で、先端に垂下穴を穿つ。4は中央が丸く大きく、垂下穴の突起部分は小さい。5は残欠で、垂下穴が一つ見える。四葉形になるか。

ガラス玉（6～25） 6～25はガラス玉で、経筒の周囲から378点出土した。切り離しが行われておらず、6個連結しているもの（6・7）、5個連結しているもの（8・9）、4個連結しているもの（10・11）、3個連結しているもの（12・13）、2個連結しているもの（14～17）がある。1個の大きさは径6mm、厚さ3mmほどである。16～19をみると螺旋形を呈しており、熱いうちに紐状に伸ばしたガラスを竹ひごなどに巻き付けて製作したことが判る。また、出土したガラス玉全てを紐で繋げると167.4cmで、これは経筒の約7倍の長さとなり、紐を通して蓋に垂下させていたものと思われる。



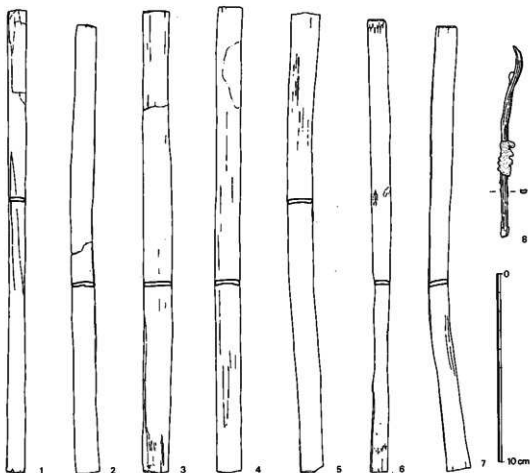
第74図 経塚SX1111出土垂飾品実測図

経巻

経軸(8) 経巻は完全に炭化しており、現状で長さ1.9cm、径0.8cmの黒色の固まりとなっている。経軸は炭化してはいるものの、長さ10.1cm、幅4.0cm、厚さ0.2cm遺存しており、断面形は長方形である。

木製品

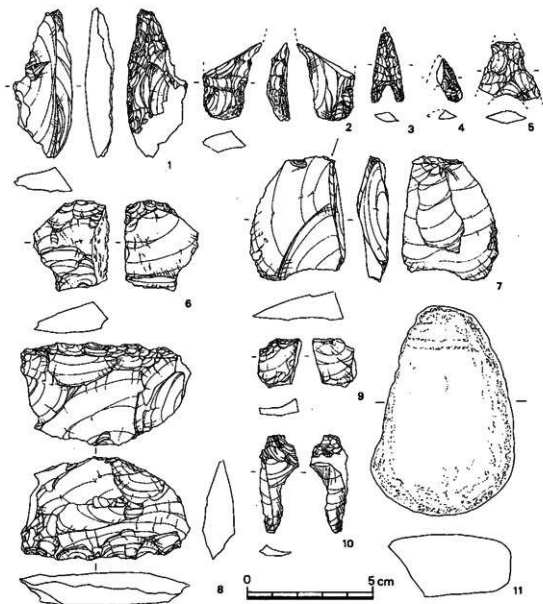
添え木(1~7) 1~7は経巻と筒身との間に入れられていた短冊形の薄板で、頭部は刃物により圭頭状に尖らせたものもみられる。幅1.0~1.6cm、厚さ0.2cmで、長さは23.9~24.8cmで、筒身とはほぼ同じ長さである。板の幅を合計すると8.7cmで、これを丸く繋げると径2.7cmとなり、筒身の底に付着している経巻の径にほぼ等しい。また、蓋・筒身に紙が付着しているこ



第75図 経巻SX1111出土木製品実測図

とから経巻の外周に当てていた添え木と考えられ、経巻と添え木を紙でくるみ経筒に納めていたものと推察される。材質は鑑定に出していないので不明であるが、木目の詰まった材を用いている。表面には黒色の付着物があり、経巻か包み紙が腐食したものとみられる。

また、武蔵寺4号経塚経筒はガラス玉や金属片を綴った嬰塔を垂下したもので、大治元(1126)年銘の5号経筒例などから当経塚出土の経筒は平安末の時期が考えられる。なお、経塚・経筒・



第76図 石器実測図

副納品などに関しては、当館参事宮小路寛宏氏にご教示頂いた。

(小田)

石器 (第76図)

水城の西門跡切り通し付近は、背振山系より派生した舌状丘陵に版築土を被せる形で土塁本体が築造されており、版築土の断ち割りによって旧地形が確認されている。旧地形の地積は、基盤層、Aso-4起源の八女・鳥栖ローム層、石器包含層であるレス層の順となる。今回の調査では、石器類は原位置を遊離して版築土層中などから出土した。

1は黒曜石製の横長剥片を素材としている。素材どうしが切合う一稜を器体に取り入れ、一面に平坦剥離を施し3稜を形成している。角錐状石器の未製品であろう。西土塁版築層から出土した。2も黒曜石製の横長剥片を素材としている。背面は両側縁から面的加工を行っており、端部に礫面を残す。槍先形尖頭器の未製品であろうか。採集資料。

3～5は石鏃である。3は磨滅が著しい。それ以外は欠損資料。6は両極剥離の入る楔形石器転用のスクレイパーである。7は単設打面より剥離された剥片の打面部にファシットを入れた形器である。黒曜石製で、風化が進んでいる。8は横長剥片を素材とする。端部に刃部加工を施した石匙であろう。握み部を欠損している。9・10は調整剥片である。10は面を直接加撃している。11は風化が進んでいるが、恐らくは擦り石であろう。

(杉原)

第12表 水城跡第26次調査補足石器観察表

	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	出土地点
1	角錐状石器	黒曜石	5.85	2.30	1.10	11.60	未製品	
2	「槍先形尖頭器」	〃	(3.05)	2.30	0.90	4.00		表採
3	石鏃	サヌカイト	2.75	1.35	0.45	1.30		E-4区
4	〃	黒曜石	1.80	2.00	0.40	0.50	左欠損	
5	〃	サヌカイト	(2.35)	—	0.50	2.70	先端基端欠	E-3区
6	スクレイパー	〃	3.65	3.00	1.40	14.70		E-3区
7	形器	黒曜石	4.95	3.80	1.25	20.20		E-2区
8	石匙	サヌカイト	(4.20)	6.65	1.30	36.90		E-4区 礫土下層
9	剥片	〃	1.95	1.80	0.70	2.30		E3区
10	〃	黒曜石	3.85	1.50	1.05	1.70		
11	擦り石	花崗岩	11.5	9.60	3.55	368.10		E-4 礫土下層

小 結

今回の水城西門跡の調査では、築堤時に関する遺構として門遺構、道路面、壁面石垣及び版築土塁の堰板支柱穴などが検出された。また、土塁の断割り調査によって門の建替えが2回行われていることが判明した。さらに、東土塁においては、思いもかはず経塚が3基検出された。ここでは、門建物の変遷を中心にまとめたい。

〔門建物の変遷〕

I 期（664年）—門遺構S B120A・石垣S A115A

掘立柱形式で一辺2m、深さ1.3mの柱掘形2個（柱間間隔4.22m）を検出した。掘形の半分は石垣S A115Aの下に隠れており、大野城太宰府口城門跡のI期掘立柱門建物と同様の構築法である。つまり、方形の柱掘形を掘り、中央に門柱を建ている。次に、壁面に石垣を積むが、門柱の扉側半分だけを露出させ、残りは石垣で覆ってしまう（大野城太宰府口城門II期）。門柱には切り込みのある門礎—唐居敷を添え、扉を設ける。ちなみに、西門跡南側の民家の石垣には唐居敷が転用されているが、恐らく西門跡から掘り出されたもので、I期の門に使用されていたと思われる。

また、東土塁の石垣S A103（III期）の下部壁面には地山が露出しているため、これより奥には柱掘形は想定できないが、柱間間隔が4.22mなので1個分の柱掘形が存在する余地は残されているが、門の構造上及び機能的側面からすると門柱2本で扉を支えていたと考えた方が妥当である。構造的には門柱に横木を渡し、それに扉を付けただけの冠木門的な簡易な造りの門が考えられるが、門の構築に際しては緊急性を第一義に考慮した結果とみられる。しかも、間口は4m足らずと狭く、土塁の規模に比して極めて対照的である。さらに、通路部分の壁面には石垣を高く築き、堅固さを図っている。これらのことから、I期の門は人物の往来する通路としての側面よりも防衛的機能を強く前面に押し出した堅牢な城門であったと言えよう。

II 期（8世紀前半）—門建物S B120B

二番目の門は、かつて西門跡から門礎石が出土していることと西土塁の北西斜面部には鴻臚館式の軒先瓦が多量に散布していることから礎石形式の門建物と考えられるが、その規模については後世の擾乱などにより定かではない。しかし、前述したごとく、I期門遺構S B120Aの柱掘形上面は土壌状を呈し、礎石の根石掘形とみられることからII期門建物の控柱列と重複していると考えられる。また、土塁中央の円形土壇が本柱礎石の根石掘形に比定できるならば、礎石門建物は土塁のほぼ中央に建っていたことになり、大棟の位置が土塁頂部の北側肩部のライン上に乗る。S A103はレベル的にIII期門建物に伴う壁面石垣と考えられるので、その下位に

みられる地山の壁面は、Ⅱ期門建物造営の際に東側土塁を切り広げたものであり、SA115Aと東土塁壁面間は11.5mの間隔を有することからⅡ期礎石門建物は八脚門の想定が可能である。さらに想像を逞しくすると、門建物は11.5mの空間内に納まることから八脚門の大宰府政庁中門跡の例を取り中央間を4.5m(15尺)とすると両脇は3.3m(11尺)に復原される。

また、Ⅱ期の門建物は礎石建物であるが基壇を伴っておらず、路面の硬化面がそのまま建物の内部に及んでいる。性格的にはⅠ期の門が防衛的側面を重視したのに対し、Ⅱ期は通路自体が3倍に拡幅され、門は瓦葺きの礎石建物に建て替わり、物流を重視した通路としての側面が強化される。これには、新羅の脅威が一段落したことにより、対内的には律令体制の確立に伴い早急に道路網の整備がなされ、対外的には外国使節団を饗応する役割を担う大宰府の表玄関に相応しい壮麗な門に姿容したものと考えられる。

Ⅲ期(8世紀半ば以降)―門建物SB110・石垣SA103

最初に検出した門建物SB110は、前年度概報では8世紀代の築造と報告していたが、この門建物に伴う整地土層から8世紀中頃の須恵器有高台の杯が出土しており、それ以降に築造されたことが明かとなった。しかし、明確な築造及び終焉の時期に関しては明らかにし得ていない。それに、柱掘形の形態は礎石建物の根石掘形とするよりは掘立柱建物状であり、この点に関しても疑問を残す結果となった。

また、平面的には一間一戸の四脚門として復原したが、東土塁頂上部には平安期の軒先瓦・丸・平瓦が多量に散布し、これらの瓦類がⅢ期の門建物に伴うものとするならば、柱掘形検出面から土塁頂部との比高差は7.5mを測ることから重層の門であったと考えられる。さらに、控柱の前面に支柱が付くこと。土塁頂上部の拡幅は門建物の長さが十分納まる範囲で行われていることなどからⅢ期の門は楼門形式であったと推定しているが、逆に考えると楼門の高欄を介して土塁頂上部を繋ぎ、通路として確保するために頂上部の拡幅を行ったとみることもできる。このことは、再び防衛的側面が強化されたことを意味する。

8世紀半ばには再び新羅との関係が悪化し、新羅討伐に備え怡土城を築城し(756年)、船舶・武器を造らせ(759・760年)、大宰府に弩師をおいた(762年)。さらには、大宰少武采女朝臣淨庭を水城修理専知官とし(765年)、水城の修築にあたらせるなど緊張が高まったことが『続日本紀』から窺える。Ⅱ期の門建物の終焉とⅢ期門建物の築造理由に関しても種々の要因が想定されるが、改築直前まで使用していた官道の機能を一時的ではあるにしても否定し、門を含めた周辺部を大規模に改築したことの背景には、単に門が老朽化したから建て直したなどと考えよりは、外的要因により国家的窮地に陥ったため再度水城の防衛的側面―取りも直さず大宰府防衛の強化が図られたと考える方が理解しやすい。案外、Ⅲ期版築土層出土の土器はこのことを裏付けているのかも知れない。

〔土塁の構築方法について〕

今回、K区中段テラスの土塁裾部において堰板支柱の柱穴列が検出され、土塁部分は版築工法による盛土がなされたことが明確となった。柱穴間隔は1.2~1.4mとばらつきがみられるが、韓国の扶蘇山城で検出された支柱間隔の1.5mに近い数値である。また、神龍石では3m間隔で支柱穴列が確認されているが、水城の土塁は神龍石の規模を大きく凌駕しているので堰板に架かる土圧の関係上、支柱間隔が密になったものとみられる。

また、I期石垣S A115Aの背面部の盛土状況を確認するためにトレンチを入れたところ、石垣側に向かって傾斜する旧地表を主体とした山形の土盛りが確認され、裾部は石垣を据える際にカットされていた。また、東側土塁の西端部では、旧地表がI期路面との比高差2mの高い位置に存在する。次に、門を含めて水城の築境状況を復原すると以下ようになる。

まず、通路部分をオープンカットし、門柱の掘形を掘り、門柱を建てる。土塁部分は旧地形を最大限生かし、それを覆う格好で割合雑な土盛りにより山形の一次盛土を築く。次に、その裾部をカットした後、柱半分を残し、ある一定の高さに石垣を積み上げる。その後、石垣と一次盛土間を版築工法により突き固める。この際、石垣が堰板の役目を果たす。このことは、石垣の背面に裏込め石がなく、土層が石の背面に水平に連続している点から言える。そして、石積みと版築盛土を交互に繰り返し、土塁部分を築いている。但し、石垣は切り通し壁面の崩落を防止し、門・路面を保護する目的で積まれたものであり、土塁切り通し壁面を「」形に覆うが、土塁全体に施したのではない。ここで注目されるのが山形の一次盛土で、現J R鹿児島本線拡幅工事の際に土層観察を行った中山平次郎博士は、土塁基部に蒲鉾形の「低平な長堤」の存在を確認されている。この土盛り間を埋めていく方法は、最初にカルデラ状に外周を築き、その間を埋めていく前方後円墳の盛土に共通したやり方で、面的に平坦に土盛りするよりも土質が締まり、かつ、土砂の流失が防げ、効率化が図られるとの林氏の教示を得ている。

以上をまとめると下記のごとき変遷となる。

(小田)

I期(7世紀後半) ……S B120A 掘立柱門遺構・S A115A

↓

S D109A → S D109B

↓

II期(8世紀前半) ……S B120B 礎石門建物・路面S X127

↓

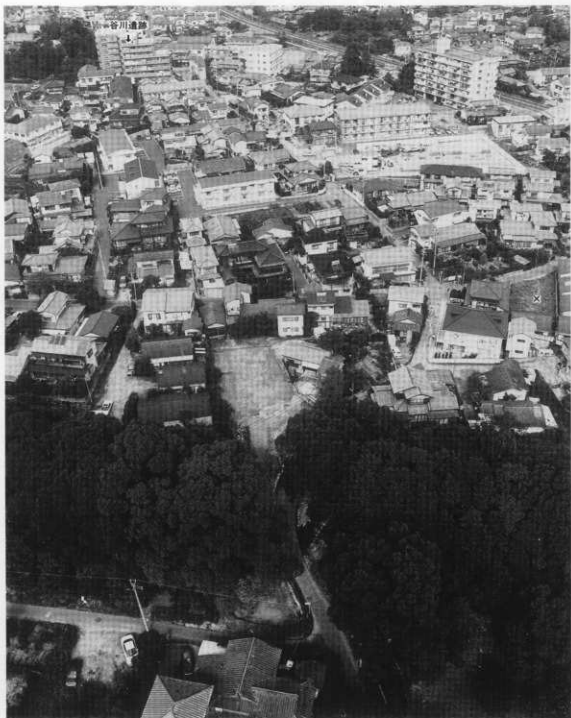
III期(8世紀中以降) ……S B110門建物・石垣S A128・官道側溝S D102・103

別 表

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナアの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
SA115B (水城26次調査補足)									
須恵器	杯	62	1		(11.2)				○
	鉢	"	3	(20.8)					
SB120A									
須恵器	杯	"	4	(9.8)		3.0	○		
SB120B									
須恵器	壺	"	5	15.1		2.3			
SD109A									
須恵器	蓋	63	1	(13.8)					
	杯	"	3	14.0	9.9	5.0			
		"	4	(14.2)					○
		"	5		10.1				
須恵器	短頸壺	"	7		(12.2)				
SD109B									
須恵器	杯	"	9	(12.9)	(8.1)	4.1	○		
		"	10		(10.8)		○		○
		"	11		(9.2)				
土師器	蓋	"	12	(12.8)					
	盤	"	13		(14.8)				○
SK129									
須恵器	蓋	64	1	(13.6)		2.5			
	杯	"	3		(8.7)				
SX127									
須恵器	蓋	"	4	(10.3)					
		"	5	(10.5)					
	杯	"	6		(10.4)				○
		"	7		(11.0)				
	壺	"	8	(13.6)	(6.6)	9.5			
		"	10		(12.4)				
Ⅲ期版築土層									
須恵器	蓋	65	1	(13.6)		1.7			
	杯	"	2	(11.2)		3.1			
		"	3	11.4	8.5	4.1			
		"	4	12.9	9.0	4.1			
		"	5	17.2		(4.2)			
Eトレンチ									
須恵器	杯	66	1	(14.4)	10.6	4.4			○
		"	2						○

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナアの有無	板状圧痕の有無
						ヘラ	糸		
Eトレンチ									
須恵器	蓋	66	3	(11.4)		2.3			
		#	4	(13.6)					
		#	5	(15.8)		1.6			
	杯	#	6		7.4				
		#	7	(12.4)	(6.8)	2.5			
	短頸壺	#	8	(19.0)	9.2	10.4		○	
土師器	壺	#	9		(9.2)				
	皿	#	10	(18.2)	(14.4)	1.8			
	甕	#	12	(30.0)					
須恵器	蓋	#	13	(11.8)		1.75			
		#	14	(14.6)					
		#	15	(15.0)					
		#	16	(15.3)					
		#	17	(11.8)					
	杯	#	18		8.4			○	
	瓶	#	19	(10.6)					
土師器	皿	#	20	17.7	13.8	1.7		○	
Dトレンチ・Kトレンチ									
須恵器	瓶		2		(8.6)			○	
	杯		4		(9.6)			○	

圖 版



水城跡西門地区空中写真（南東上空から、×印試掘箇所）



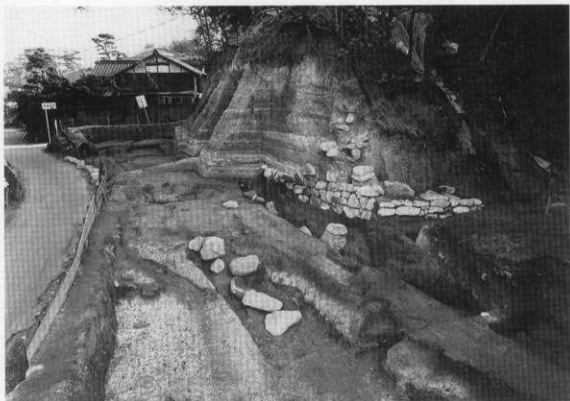
水城西門跡遠景（北西上空から）



水城西門跡遠景（南東上空から）



水城跡第26次調査区（西門跡、北西から）



水城跡第26次調査補足区（Ⅲ期整地層除去後、北西から）



西土壘石垣SAI15A・B重複状況（左側がSAI15A、北東から）



東土壘石垣SAI03下位壁面



石垣SA115背面版築土層
(北西から)



石垣SA115A 撮形
(西から)



石垣SA115 A・B、門建物SB120、溝SD109（北西から）



門建物SB120 A（北西から）



門建物SB120 A
西側柱穴
(北東から)



西側柱穴柱掘形
(北東から)



柱根検出状況
(北東から)



門建物SB120 A 東側柱穴
(北東から)



東側柱穴柱掘形
(南東から)



西土壘中段テラス（西から）



柱穴列SA128検出状況（東から）



西土壘断割トレンチ
(北西から)



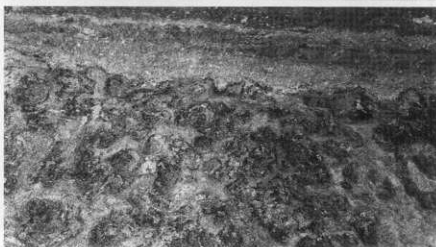
西土壘頂上部Ⅲ期版築土層 (左側が築堤期土壘)



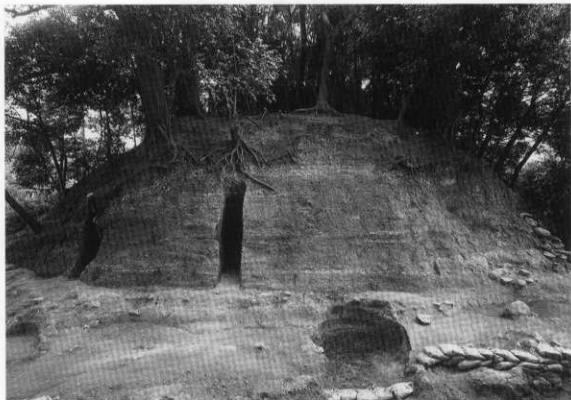
E 2 区Ⅲ期版築土層
(北から)



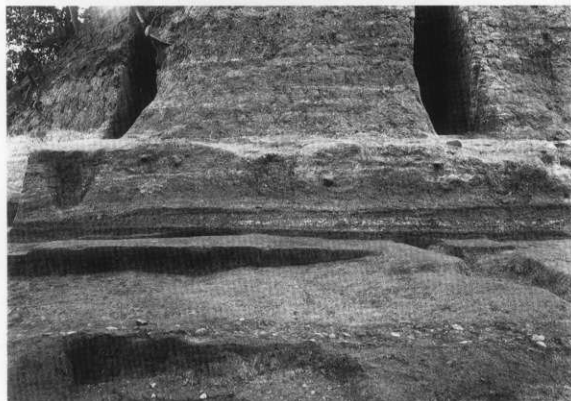
E 3 区Ⅲ期版築土層
(奥の石はSA115A)



版築土突棒痕



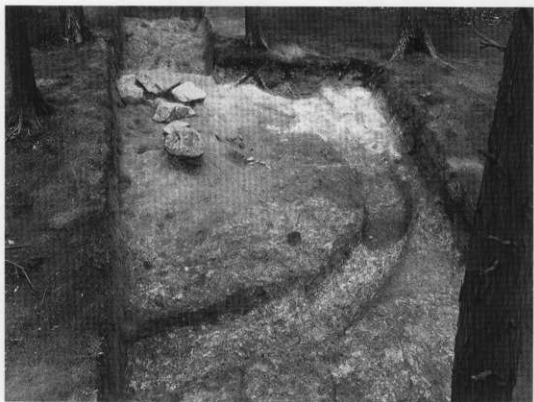
西土壘壁面（Ⅲ期版築土層、北東から）



Ⅲ期門建物SB110半截状況（北東から）



経塚SX111全景（東から）



経塚SX111全景（南東から）



経塚SX1111積石状況（西から）



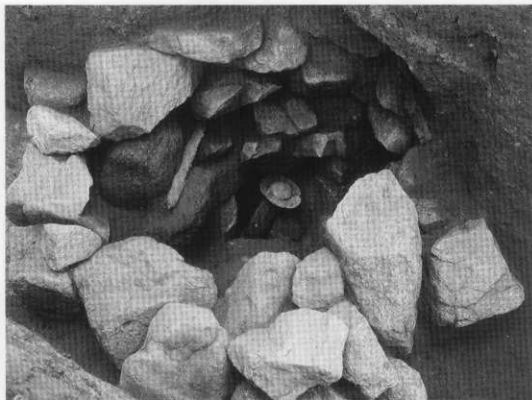
経塚SX1111積石状況（南から）



積石除去後（中央が蓋石、左脇に短刀）



経塚SX111掘下げ状況（南東から）



経筒・短刀埋納状況（南から）



経塚SX112・113検出状況（南西から）



経塚SX112・113（左側SX113、右側SX112）



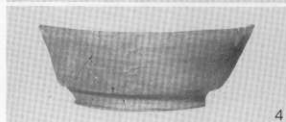
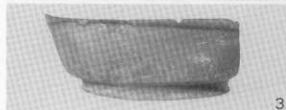
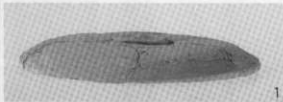
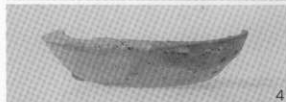
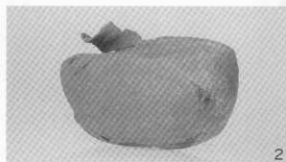
経塚SX112
(南東から)



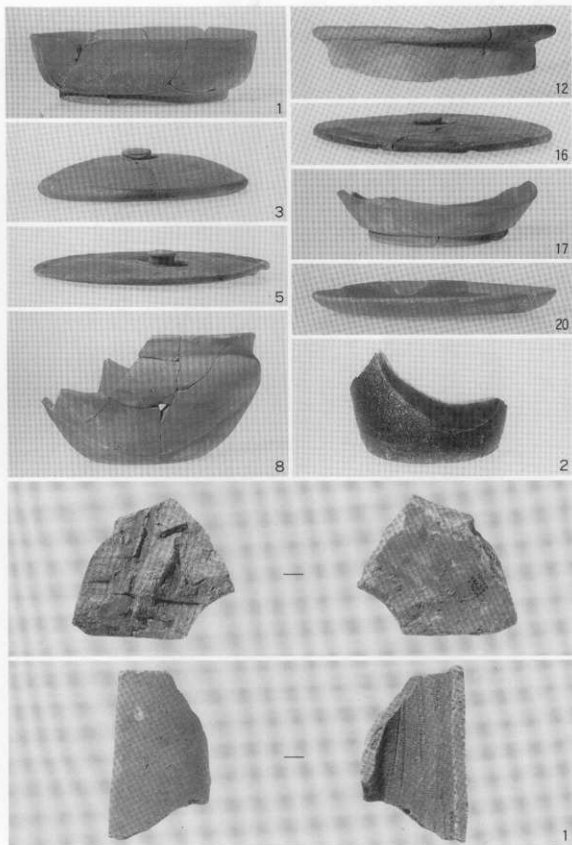
経塚SX113
(南から)



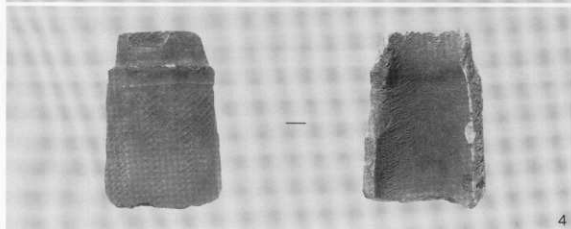
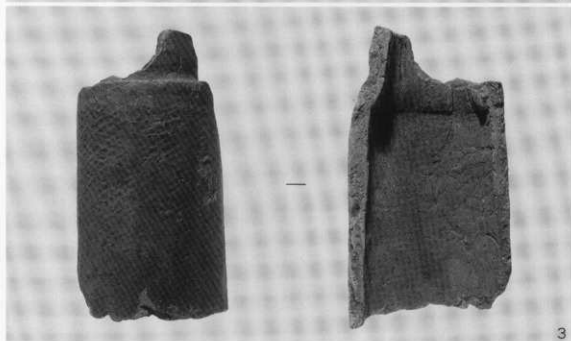
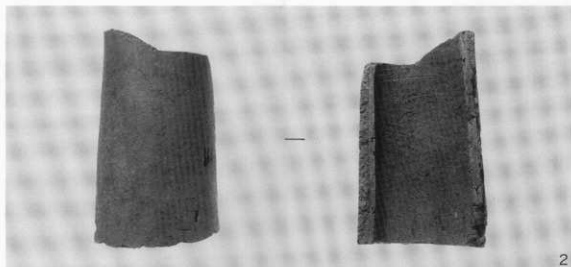
経塚SX113掘形
(立石除去後、南東から)



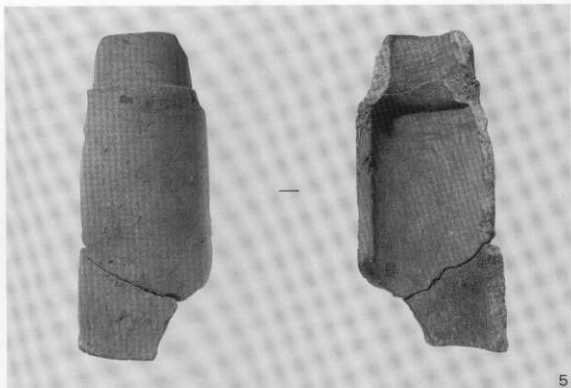
水城跡第26次調査補足SA115B、SB120A・B、SD109A・B、SK129、版築土層出土土器・鉄器



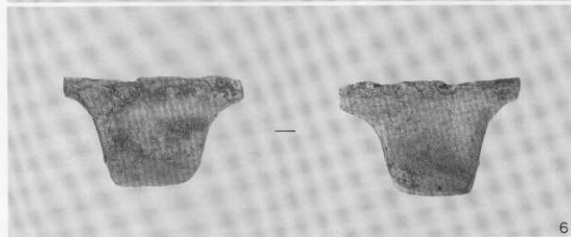
水城跡第26次調査補足E区出土土器・鬼瓦・丸瓦



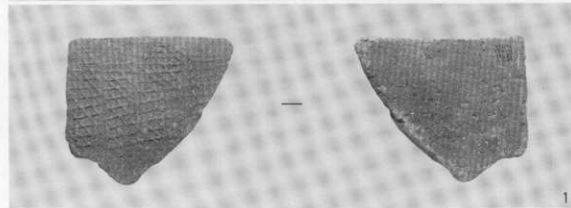
水城跡第26次調査補足出土丸瓦



5

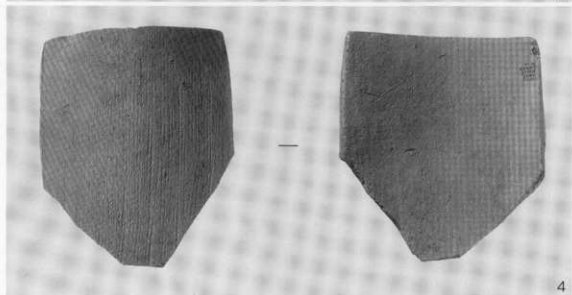
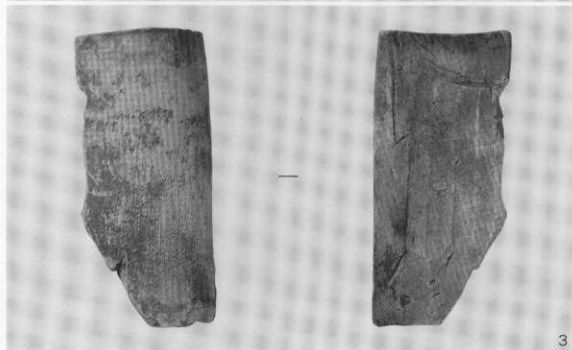
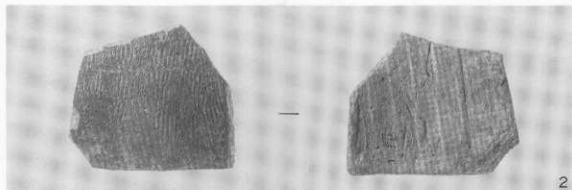


6

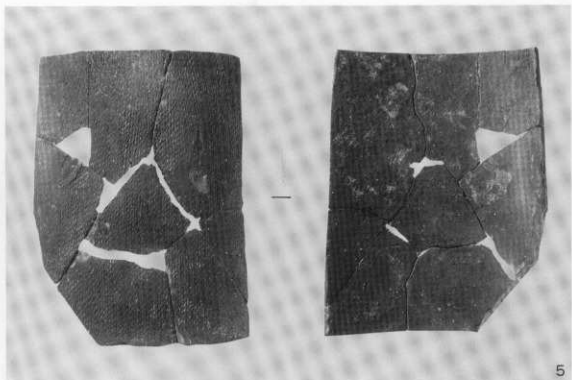


1

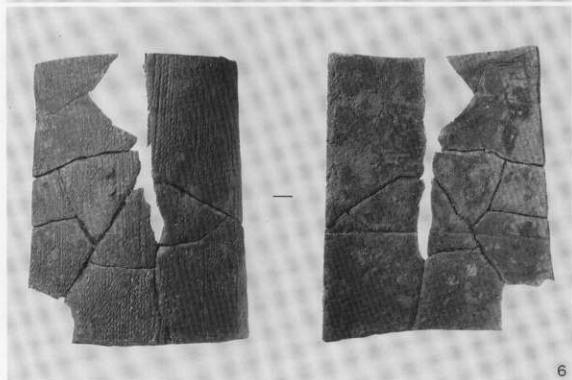
水城跡第26次調査補足出土丸瓦・面戸瓦・平瓦



水城跡第26次調査補足出土平瓦（2）

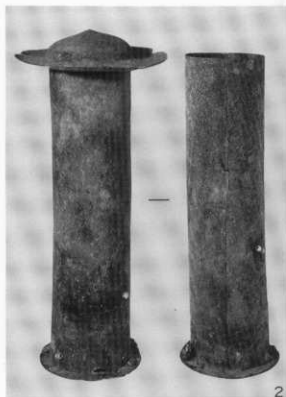


5

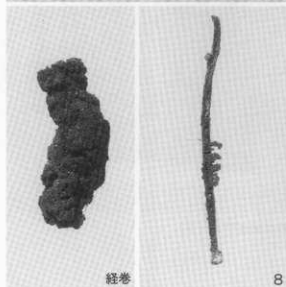


6

水城跡第26次調査補足出土平瓦（3）

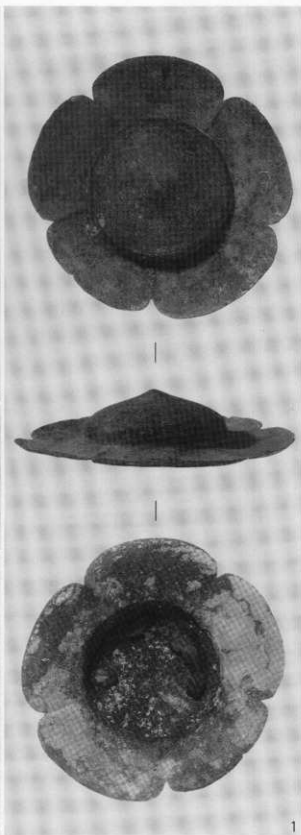


2



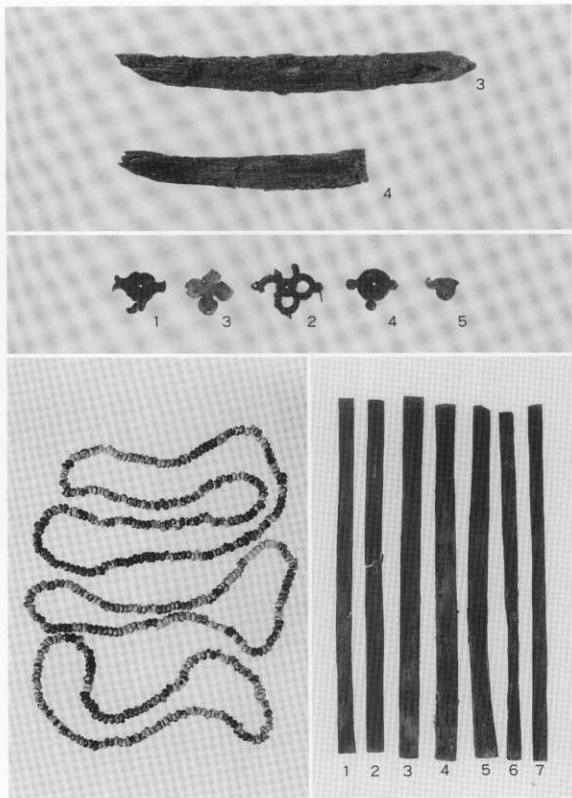
經卷

8



1

水城跡第26次調査補足出土経筒・経卷・経軸



水城跡第26次調査補足出土経塚副納品・木製品

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせき						
書名	大宰府史跡						
副書名	平成8年度 発掘調査概報						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	栗原和彦、横田賢次郎、小田和利、小川泰樹、杉原敏之						
編集機関	九州歴史資料館						
所在地	〒818-01 福岡県大宰府市石坂4丁目7番1号						
発行年月日	1997年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大宰府史跡 第169-1次調査	大宰府市観世音寺431-1-2433番地		33°40'43"	130°30'48"	960725～ 960126	500㎡	住宅建設
大宰府史跡 第174次調査	大宰府市観世音寺4丁目218		33°30'60"	130°31'24"	960228～ 960326	82㎡	史跡学校院跡 の現状変更
大宰府史跡 第175次調査	大宰府市観世音寺355-5		33°30'57"	130°30'08"	960709～ 960831	580㎡	住宅建設
大宰府史跡 第176次調査	大宰府市観世音寺4丁目1100他 5丁目896-132他		33°30'68"	130°31'25"	960924～ 961202	260㎡	下水道工事
水城第26次 調査補足	大宰府市大字古松字見ヶ浦447-1他 大野城市下大利2-1番地他		33°30'46"	130°29'31"	960410～ 970310	500㎡	計画調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
大宰府史跡 第169-1次調査	官衙	奈良時代	掘立柱建物 4棟 礎石建物 1棟 竈穴住居 2軒 貯蔵穴 1基	須恵器、土師器、瓦、弥生土器、 簡羽口、埴埴、土製品、 石製品		官衙と構造遺構が伴う	
大宰府史跡 第174次調査	官衙	奈良時代	ヒット	なし			
大宰府史跡 第175次調査	官衙	奈良時代～平安時代	掘立柱建物 1棟 溝 2条 土壇 12基	須恵器、土師器、瓦、石製品 陶磁器、製塩土器、土製品		官衙か官人居住区と 考えられる	
大宰府史跡 第176次調査	官衙	奈良時代～平安時代	掘立柱建物 2棟	須恵器、土師器、陶磁器、 文様埴			
水城第26次 調査補足	防塁跡	奈良時代	門跡 版築支柱 1棟	須恵器、土師器、瓦、石製品		水城創設期の門跡を 検出	

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
05	004

大 宰 府 史 跡

平成8年度発掘調査概報

平成9年3月31日

発 行 九州歴史資料館
太宰府市石坂4丁目7番1号

印 刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8-34